
日向に降る雪

彩月空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日向に降る雪

【Nコード】

N6553F

【作者名】

彩月空

【あらすじ】

蒼髪の青年と1人の少女、それから奇妙な小動物が出会ったことにより紡がれてゆくひとつの物語。ひとりひとりの物語が、やがてひとつの終着点へ向かっていく。果たして、その結末は誰にとつてのハッピーエンドになるのだろうか……。

プロローグ『ひなたに降るユキ』

少女は宙を舞っていた。

見渡す限りにどこまでも広がる荒野の上、燦々と輝く太陽が照らす下。叫ぶことも忘れて、宙に舞い上がった少女はまるで夢でも見ているかのような心地になったが、不意に重力を感じたために、いずれおとずれるであろう地面との衝突が鮮明に頭に浮かんで、ぎゅと目をつむった。

それと同時に一陣の風が吹いた。

想像していたのと比べてあまりにも柔らかい衝撃に少女は疑問を抱き、きつく瞑っていた目を恐る恐る開いた。

「だ、大丈夫ですか？」

少女がぶつかっただのは硬い地面ではなく、誰かの腕の中だった。

誰かは焦った声で少女に語りかけ、少女は間の抜けた声を漏らした。

「……へ？」

少女を抱きしめるようにして受け止めていたのは1人の青年だった。すらりとした体型の彼は腰に1振りの刀をさげていた。歳のほどは20歳の手前くらいだろうか、背中に小さなリュックを背負っただけのラフな格好だった。見惚れるほどに鮮やかな蒼髪が印象的な彼は、少女が落ち着いたのを悟るとそっと地面に下ろした。

「いきなりあなたが降ってきたので驚きました」

「あ、す、すみません」

微笑む青年を前に少女はぺこりと頭を下げ、それに合わせて肩ほどまで伸びた髪が揺れた。10代の半ばくらいに見える少女は、こ

んな荒野を彷徨う人間としてはあまりにも不釣合いだった。

「きちんと運転しないと危ないですよ」

青年は彼女の後方に転がっているバイクに視線を向けて言う。そこには無残に横たわるバイクがあり、少女は顔を火照らせて俯いた。「と、止め方が分からなくて……」

「え？」

少女の言葉に青年は目を丸くして小さく声を上げた。そして当然の疑問をそのまま口にするが、そのせいで彼女をさらに困惑させることになった。

「では、なぜバイクに乗っていたのですか？」

「……え、えーっと、い、家出？」

「家出？」

「う……お、お出かけ？」

少女はもじもじと指をいじりながら答える。青年はため息をつくと、しゃがみこんで彼よりも頭1つ分ほど身長の高い彼女に視線を合わせた。

「あの」

「おいこらユキナ！ 俺を無視して会話を続けんなっ！」

青年が口を開いたと同時に足下から声が聞こえた。反射的に青年は視線を下に走らせる。そして、そこに奇妙な存在がいることに初めて気づいた。

「あ、ごめん」

ユキナと呼ばれた少女が足下で喚くハムスターをつまみ上げ、ポケットに入れた。青年はそれを指差して彼女に問う。

「そ、そちらは？」

「俺か？ 俺はハムスターのハム吉。……ああ、待て待て。言いたいことは分かる。言われる前に言うておく。いいか。安易な名前だと文句は言っな」

しかし、答えたのはユキナではなく、そのハムスターだった。

「は、はあ……」

青年は身体のわりに態度の大きい“人間の言葉を喋る”小動物を前にして少しばかり動揺をみせた。ただ、それは本当に少しばかりであり、彼はすぐに平静を取り戻すとハム吉と名乗った小動物をまじまじと見つめた。

「人語を話す動物なんて初めて見ました」

「そらそーだ。普通に生きてりゃ、まず出会えないそりゃもう希少価値の高い存在だからな。……にしては、あんまり驚かないんだな。つまんねえ。ああ、つまんねえ」

「それは、すみません……。しかし、僕の目の前であなたが喋っているというのが現実である以上、疑う理由はありませんから。自分の目で見て、自分の耳で聞いたことを信じないわけにはいきません」

「……そうか。歳の割りに悟ってんだな」

ハム吉は気分良さそうに、へへ、と笑った。青年は興味深そうにやはり偉そうな物言いの小動物の頭を指先でなでると、小さな微笑みを浮かべた。それから、すっと立ち上がると恭しく頭を下げる。

「ユキナさんにハム吉ですね。遅れましたが、僕の名前はひなたといます」

「ひなた……」

そう名乗られて、ユキナはつぶやくように彼の名を繰り返して小さく頭を下げた。頭を上げると、その瞬間を見計らったかのようにひなたが問いかけてきた。

「それで、ユキナさん」

「はい？」

「なぜ家出など？」

「え？ え、えーっと……」

ユキナは言いにくそうに逡巡し、ひなたから視線を逸らした。

「家出っつーか、ありゃ“逃げ出した”って感じだな」

「……う」

ユキナは目を伏せ、小さく身体を震わせた。その様子を見ていたひなたは何かを察したのか、顎に手を当てて、なるほど、とつぶや

いた。

「どうやら野暮なことを聞いたようですね。あなたのような女の子がこんなところにいるくらいですから、きっと人には言えない特段の理由でもあるのでしょうか」

ひなたは微笑みを浮かべてユキナの頭を優しくなでた。ユキナは驚いたように顔を上げると、頬を染めた。

「それで、あのバイクはどうされますか？」

依然として転がっているままのバイクを指差してひなたが言うと、ユキナは弾けたようにそれに駆け寄っていった。

「あいつはバイクなんて運転できねえよ」

彼女の背中を見ながら、いつの間にかひなたの肩によじ上っていたハム吉が口を開く。

「とうとうと？」

ひなたはそんなハム吉の行動には一切の驚きを見せずに淡々と会話を続ける。

「ユキナは箱入り娘だったからな。大事に大事に育てられて、外の世界のことなんてなーんも知らない。要はあれだな。あー……お城の中に閉じ込められたお姫様みたいなもんだ」

「何とも寓話的な例えですね」

「でも、言い得て妙だと思っぜ。うん。我ながら素晴らしい例えだ」
「そうですか」

バイクを起こそうとしては何度も失敗してバイクごと倒れ、ようやく起こし上げること成功したら嬉しい姫……もといユキナは、それを押してひなたの元に戻ってくる。

「ふう」

「ところでユキナさん。バイクに乗ったことはあるんですか？」

「え……えーっと、出て行くときに飛び乗ったのが初めてかな？」
「なるほど……」

ひなたはハム吉をつまみ上げてユキナに手渡してやる。それから、彼女が支えているバイクに手をかけた。

「ご覧の通り、今の僕には移動手段がこの足しかありません」
「うん？」

ひなたの言いたいことが理解できずに首をかしげるユキナに向かって、彼はひとつの提案をした。

「僕がバイクを運転しますので、近くの街か村まで一緒に行きませんか？」

「……え？ ええ!？」

ユキナは心底驚いたように声を上げた。しかし、ひなたはそれとは対照的に静かに微笑んだ。

「僕もそろそろちゃんとした場所で美味しいものが食べたいですし、あなたもどこかで一息つきたいでしょう」

「ん。ま、まあそれはそうだけど……」

「こんな荒野で不慣れなバイクを走らせていても、はつきり言っただけ無謀だと思いますし、案外悪くない提案だと思うのですが……」

「俺は魅力的な提案だと思うぜ」

ユキナのポケットからふてぶてしく腕を組んだハム吉が言う。ユキナはしばらく、うー、と唸った後、こくりと頷いた。

「それじゃあ、お願いします」

「了解です」

ひなたは言っただけ、自分の荷物をバイクの荷台にくくりつけた。それから運転席にまたがると、ハンドルに手をかける。

「それでは、どうぞ」

「う、うん」

ユキナはややどきまぎしながらもひなたの後ろに座ると、壊れ物に触れるようにそーっとひなたの身体に手を回した。

「もう少し力を入れていただかないと、振り落とされますよ」

「わ、分かった」

ひなたの言葉に、ユキナはぎゅっと力を込めてひなたの身体を抱きしめた。言葉には表さなかったが柔らかい感触がお互いに伝わる。ユキナは自らの鼓動が高まるのを感じ、あまりの恥ずかしさで吹っ

切れたのか、さらに腕の力を込めた。

「それでは、参りましょう」

「うん」

ユキナの顔がどんな表情を浮かべていたのか、前を向いていたひなたには見えなかった。

零章 『例えば仮に、ここを“はじまり”とした場合』

とある町。名前はもう忘れた。もはや覚えている者など居も
しない。

夜、半分くらい欠けた月が闇を照らす。散りばめられた星々が微弱ながら月の光に付き従う。人工的な明かりはない。ただあまりにも儂い自然の光だけが2つの影を映し出していた。

そんな小さな森の中で竹刀が何かにぶつかる音が響いた。それと同時に乱れた息遣いが聞こえた。

「ぐあー!!」

うめき声をして人が倒れる音がした。続いて、幼い子どもの声。

「今日は僕の勝ちだね」

どうやら先ほどの2つの影は小さい男の子たちのようだ。笑いながら自慢げに言う男の子の方は細身の体で優しそうな顔つきをしている。竹刀を片手にした男の子の蒼い髪は目を引くほど綺麗でどこか女性的に見え、それもあいまって一見女の子に見えなくもない。

「うるせえよ!!」

倒れていた男の子が起き上がる。こちらは年齢の割りに鍛えられた体をしていた。髪の毛は紅く短髪で、一言で言えば、わんぱくな少年、といった感じである。手には物騒にも拳銃が握られている。

「お腹もすいたし、そろそろ帰ろうか？」

勝ったほうの男の子がにこっと満足げに笑う。

「はいはい」

負けたほうは素っ気なく答えると、体についた土を払った。

少年たちが家路に着こうと町の方に目を遣る。ここは町からやや離れた場所にある森。木々が邪魔をして全体を見渡すことはできないが、その隙間からちよっとだけ見えた自分たちの町は、なんだか

いつもと違って不気味に見えた。

「……ねえ、カゲ」

カゲと呼ばれた少年、負けたほうの少年は、こくりと頷く。

「なんか嫌な予感がするな。急ぐぞ、ひなた!!」

そう言っで一足先に町に向かって駆け出していくカゲ。その後、ひなたと呼ばれた少年が続く。自分たちの見慣れた町の様子がおかしかった。

まるで闇が町を飲み込むかのような、そんな不吉な予感が2人を襲ったのだった。

「なんだ、これ……」

町に戻ってきた2人の少年は絶句した。それもそのはず、町の大半が大破し、人影もまばらだった。いや、正確に言えば“生きている人間”がまばらだった。あちこちに死体がころがり、泣き叫ぶ人の声が遠くで聞こえた。

「……」

一言で言うならば、悪夢だった。少年たちは呆然とした眼差しでその光景を見続ける。

しばらくして、頭が現状を理解したのか、まずはひなたのほうを口を開いた。

「………なんだよ、これ」

手が震える。それが竹刀に伝わり、ガタガタと小刻みにゆれた。無意識のうちに彼の足は自宅へと向かっていた。家族は？ いったい、どうなった？ そんな思いを胸に抱いて。

「おい、ひなたっ!」

ひなたの隣にいたカゲが叫び、彼が立ち止まらないのを悟ると自分も自宅へと歩を進めた。ある程度、予想はあった。この悲惨な状況で運よく我が家だけ生き残る必然性など何もなかった。

かくして、全ては予想通りであった。

ひなたは顔色を失い、おぼつかない足取りで町中を歩いていた。家は、なかった。家族も、いなかった。死体も、見た。何も、考えられなかった。ひなたはふらふらと、かつて町だった場所を歩く。不意に、誰かにぶつかった。

「大丈夫かよ、お前」

ひなたがぶつかった相手はカゲだった。

「……カ、ゲ？」

「ああ」

ひなたはきつく唇をかみ締めた。血の味がしたが、それでも止められない。ぶつけようのない感情が彼を取り巻いていく。

「とにかく、落ち着け。俺も混乱してる」

「カゲの」

問いかけて、やめた。カゲの顔を見れば一目瞭然であった。彼もひなたと同じ思いを味わったのだろう。

お互いに、あえて説明することはなかった。2人は無言のまま町を出ようと決意し、翻したところで見覚えのある男を発見して絶句した。

「！」

そのときのことを、彼らは決して忘れない。その男は無表情のまま2人を凝視していた。記憶の中にある彼とは似ても似つかぬ顔つきに2人の中で何かが弾けた。

「手前てめえつ！！！」

まずカゲが飛び出した。その手には強く拳銃が握り締められてい

る。すぐさま、ひなたがカゲに続いて飛び出す。標的は目の前の1人の男。

カゲが拳銃を発砲し、ひなたが竹刀を振るう。完璧に捕らえたと両者は思った。

が、

「!?!」

まさに、男に竹刀を振り下ろそうとしたときだった。ひなたの足が何かにとられる。それが銃弾を簡単にかわして瞬時に接近してきた男の手であると確認するのに1秒かかったか否か。だが、それだけで充分だった。

「うぐっ!!」

今までに味わったことのない、鋭く、そして重い痛みがひなたの体を貫いた。息が詰まる。普段からそこそこ鍛えていたひなたでさえ、死んだと感じるほど強烈な一打だった。そのまま数メートルほど吹き飛ばされ、地面に思い切り体を打ち付ける。

「ひなた!!」

吹き飛ばされたひなたの方にカゲが視線を向ける。それもわずか1秒足らずの余所見というところ。だが、その間に男はカゲの背後に回りこんでいた。

「がっ!!」

気づいたときにはカゲの体も宙を舞っていた。もはや、どこが痛いのか分からないくらい全身がしびれるほど痛かった。

そして、そのまま彼の意識は途絶えた。

~~~~~

「……い……ゲ」

誰かの声がかゲの耳に届く。

「おい、……ゲ！」

それが、いつも聞いていた声だったと気づくに、軽く数分を要した。

「おい、かゲ!!」

しばらく自分のことを呼び続けたのであろうひなたの声にはっと目を覚ますかゲ。どうやら自分たちは生きているようだった。しかし、体はとてつもなく痛い。少しでもどこかを動かそうとすると、容赦のない痛みが走った。

「……ひ、なた？」

かゲは、ようやくそれだけ喋った。ひなたは、彼が反応を示したことにほっとしたように少し笑う。その瞳はやや潤んでいた。それほどまに心配してくれたのであろう。

「み、ん、なは？」

かゲは無理やり唇を動かして、そう訊ねた。その問いにひなたが悲しそうな顔をして静かに首を横に振る。

どうしようもない悔しさが内からこみ上げてきた。悔しさ……？  
いや、それだけでは彼らの心境を語るには不十分だった。

悔しさ。

憎しみ。

恐怖。

苛立ち。

悲しさ。

そんな負の感情が彼らを丸々支配していた。自分たちの町がなくなった。町の人みんな死んだ。友だちも、家族も……。そんな状況に陥って負の感情を抱かないほうがおかしいくらいだ。

「俺は、強くなる」

唐突にカゲが言った。瞳には涙がたまっていた。物心つくころからずっと一緒に居たにもかかわらず、ひなたは彼が泣く姿を初めて見た。そして、だからこそその言葉が本気であることを悟り、彼もまた力強く頷いた。

「僕も……強くなりたい」

そのときから2人は揃って道を踏み外したのだろう。

「俺は、絶対に仇を討ってやる」

そのときからカゲは、ひなたとは若干異なっただ煮えたぎる思いを抱いていたのだろう。

そして、それが因果となったのだろうか。初めは同じように道を外れた2人だったが、小さな亀裂が次第に大きな溝となり、いつしかそれぞれ別方向へ転がり始めることになる。

ただ、今はまだ先のことなど誰も分からない。

ここから彼らの物語が始まった。

一章『そして、彼は語り始める(1)』

そこは都市と呼んでもよいくらい大きな街だった。たくさんの方が行き交い、通りは賑わっている。隙間もないくらいに店や屋台が並び、あちこちで人の声が飛びつっている。

バイクを押す青年とその隣を歩く少女は、あっという間に人ごみにまぎれた。

「大きな街ですね」

「そうだね」

ユキナは興味津々といった風にきよろきよろと辺りを見回す。そのポケットからハム吉が顔を出し、ほお、と感嘆の声を漏らした。

「こりやまた凄いところに連れてきたもんだな」

ハム吉も鼻をひくつかせながら、周りに視線を走らせた。理由は分からないが街に入る前にめがねと帽子をかぶり、軽い変装を施したひなたが満足げに頷く。

「できるだけ大きな街に行った方が、今後の旅程を決めるのにも充分な情報が得られると思います……。これだけの規模があればきっとユキナさんの役に立つ何かがあると思います」

「そうかな？」

「はい」

ひなたはひとまずユキナを宿屋に案内して、自分は駐車場にバイクを止めに向かった。彼としては、その間に彼女に中に入ってもらい、宿泊の手続を済ませてもらえれば都合が良かったのだが、ユキナは何故か彼が戻ってくるまでその場で待ち続けていた。

そこで、彼は仕方なしに共に中に入る事になった。見ると、ユキナはどうやらこういうことには慣れていないらしくて、やや拳動不審気味だったので、代わりにひなたが従業員らしき人物に声をかけ、空き部屋の確認をすることにした。

ユキナはてきぱきと動く彼をぼーっと見ていることしかできな

った。

「それでは、ユキナさんはこの宿にお泊りください。あ、お金は持ってますか？」

「ん？ う、うん。結構あるよ」

ユキナはそう言っつて、ポケットからお金の入った袋を取り出した。その重さからして、安い宿なら数十日は余裕で泊まれるくらいはあるようだった。

「それだけあれば充分ですね」

ひなたはそう言っつて笑うと、そのまま外に出て行くこととする。

「え？ ちょ、ひなた!？」

それをユキナが呼び止め、彼の服の裾をつかんだ。

「どうしました？」

「どこに行くの？」

「どこ、と言われましても……」

ひなたは困ったように頬をかいた。そもそも彼はここで彼女と別れる予定であり、だからこそ次の言葉を発する。

「無事に街に着きましたし、ここからは僕がいない方がユキナさんも行動しやすいと思いますすが？」

「……え？」

ユキナはきよとした表情を浮かべ、つかんでいた裾を離れた。

「僕がいるといろいろ厄介ごとに巻き込まれかねませんから」

「まあ、そうだな」

寂しそうに笑うひなたにハム吉が相槌を打つ。

「え？ え？」

1人事情を把握しきれないユキナが動揺しながら、ひなたとハム吉を交互に見るが、そんな彼女に対してどちらも何も説明することはなかった。

1人と1匹はしばらく見つめ合ったままだったが、先にひなたが視線を外し、ユキナに向かって静かに微笑んだ。

「それでは、お元気で。道中お気をつけて」



そう言っつて片手を挙げて背を向けた彼を、ユキナはとうとう呼び止めることができなかつた。

~~~~~

そこは、どちらかというと良質な部屋だつた。柔らかくて大きなベッドにお風呂がついており、広さもなかなかのものだつた。

「うーん……」

ユキナはベッドに腰掛けると、そのまま背中から後ろに倒れた。もう少し身長が高かつたら、壁に頭をぶつけるところだつた。今だけは、いつも文句をつけたくなる自分の低身長に感謝すべきであつた。

「ねえ、ハム吉」

「んあ？」

枕に乗つて、まったりとしていたハム吉はその姿勢のまま気だるそうにこたえる。

「あれ、どういう意味？」

「あれつて何だよ」

「“厄介ごとに巻き込まれる”つてやつ」

「それを知つてどうする」

「どうするつて……」

ユキナが返答に困る様子を見て、ハム吉は姿勢を正した。枕の上に二本足で立ち上がると、背筋をぴんと伸ばした。全く小動物らしからぬ動きをする輩である。

「あのな、ユキナ。お前は世間を知らない、バイクにも乗れない、体力もない、料理もできない、戦う術も持たない……まあ、挙げれ

ばキリがないが、はつきり言つて旅人としては致命的なほど何もできない」

「ん……」

「人にはできること、できないことがある。知つておくべきこと、知らない方がいいことがある。つまり、それ相応のもんがある」

ハム吉は鋭い視線をユキナに向け、

「この件は、お前には不相応だ」

と言いつつ。ユキナは不満そうに唇を尖らせると、ふん、と鼻を鳴らした。

「何よ、それ」

「話は以上だ」

ハム吉は本当にそれつきりという風に枕にごろりと転ぶと早々に寢息を立て始めた。ユキナは何度かハム吉を指でつついていたが、しばらくして諦めたのか、お風呂場に向かつて行った。

水が床を叩く音が聞こえ始め、ハム吉がひよこりと起き上がった。

「……山がでかすぎるんだよ、ユキナ」

~~~~~

同刻、街のはずれ。

ひなたは人通りの少ないところを選んで歩いていた。大きな街には、こういう場所があることが多い。家のない者や、悪事を行う者、通常人が歩くべき道を踏み誤った者たちが集う場所。そこをひなたはのんびりと散歩でもするかのように歩いていた。

地面に座り込む者や、ねそべる者が、そんな彼に視線を向ける。それはまるで獲物を狙う獣のごとく、ぎらぎらとした視線だった。

「おい、お前」

そのうち、1人の男がひなたに近づいてきた。ひなたは足を止めると、にこやかに微笑む。

「なんでしよう」

「とりあえず、有り金全部置いていけ」

男は低い声でそう言った。右手に持ったナイフが光る。ひなたは冷たい視線をそれに向けてから、おどけたように肩をすくめた。

「お断りします」

「あ？」

「あなたに渡すものなど何もありません」

「だったら……」

「だったら？」

「奪うだけだ」

言った瞬間、男の身体が宙を舞った。ナイフをひなたに突きつけようとした瞬間に、ひなたがその右手を掴んで投げ飛ばしたのだった。

「へ？」

男は間の抜けた声を上げて、地面に身体を打ちつけた。その拍子に男の手から離れたナイフを拾い上げつつ、ひなたが口を開く。

「すみません……。でも、先に手を出してきたのはあなたなので、仕方ありませんよね。僕も死にたくはありませんし」

にこりと微笑むひなたの顔は男を恐怖に凍りつかせたらしい。なにやら分けのわからないことを口走りながら、男は逃げるように駆け出した。

「さて、と。これはありがたく戴くとしましょう」

ひなたはナイフを懐にしまってから歩を進める。もう誰も、彼に近づく者はいなかった。

一章『そして、彼は語り始める(2)』

しばらく歩いたひなたは寂れた喫茶店らしき店に入った。店主が彼にちらりと視線を向け、それから再び読んでいた新聞に視線を落とす。

彼がここに入ったのは別に休憩するためではない。旅をしていると情報を得る手段は限られてくる。道中では、たまに新聞屋がバイクに乗ってやってくることもあるので、そこから情報を得るのがほとんどだが、町や村といった共同体内では別の方法を選ぶのが普通だ。

それは大きく分けて2種類。情報屋と呼ばれる、情報の売買を商売としているものから情報を買うか、あるいは、このように一見ただの不良のたまり場のような場所にいる個人の情報屋から情報を得るか、の2つである。端的に言えば、表の世界のやり方をとるか、裏の世界のやり方をとるか、である。

そして、ひなたはとある事情から表のやり方はとりづらく、必然的に後者を選ぶことになっているわけだ。

「うかがいたいことがあるのですが……」

ひなたは早速店主の前に立つと彼とは対照的に愛想の良い笑みを浮かべた。店主はうさんくさそうにひなたを見ると、新聞を閉じることなく小さく頷いた。

「この人たちについて、知りたいのです」

ひなたが荷物から取り出したのは2枚の手配書だった。1枚には、燃えるような紅い髪の方が映っており、もう1枚には、闇のような漆黒の髪をもつ男が映っていた。

「……」

店主は無言のまま、2枚の手配書とひなたの顔を見比べた。

「何か知りませんか？」

「聞いてどうする？」

店主はここで初めて口を開いた。低くて重い声だった。

「それに答える必要がありますか？」

「……いや」

店主は新聞を無造作に折りたたむと、後ろの棚から何かを取り出し、次いで湯を沸かし始めた。

「紅髪の方は数ヶ月前にここに来た」

「……それで？」

店主が棚から取り出したのはコーヒー豆のようだった。彼はそれを適当に挽くと、ペーパーに無造作に乗せた。

「その黒髪と、それから蒼い髪の男について、知っていることを聞きたいと言ってきた」

「……」

湯が沸いたのか、店主はやかんを手にとると、それでコーヒーを淹れ始める。手順も何もない、ただ淹れられれば良いというやり方だったが、それによってコーヒー独特の香りが店内に充満した。

「ここは、ご覧のとおりでかい街だ。それなりに悪党の情報は入ってくる。だが、その黒髪と、お前が訊ねる紅髪、それから蒼髪についての情報は不思議なくらいにほとんど入ってこない。まるで政府側が意図的に何かを隠しているんじゃないか、と思うくらいにな」

出されたコーヒーをひなたは口に含んだ。熱すぎるし、何より雑味がひどい。

そもそもコーヒーの抽出に最適の温度は82度から83度辺りと言われている。沸騰したお湯でそのまま抽出するなど素人でもやらない。それに、あの豆の保存状態はどうだ。ただ棚に放り込んでおいただけではないのか。それから挽き方はあれで良いのか。それぞれの豆に適した挽き方があるのを、この男は知らないのか。

ひなたは様々な文句をつけたい衝動に駆られたが、それを何とか抑えて、淹れてもらったコーヒーを申し訳程度飲み込み、それをすつと脇に寄せた。

「だから何も知らない、とそのときは答えた。今も、同じだ。蒼が

紅に変わったただけで、俺は何も知らない」

「そうですか……」

ひなたは残念そうに頭を垂れると、手配書を荷物に戻した。店主は、そんなひなたの顔をぐつと覗き込むと、にやりと笑った。

「お前、蒼髪だな。いったいお前から何を企んでやる？」

そう言われて、ひなたは隠す必要がないと察したのかすつと帽子を外した。帽子できちんと隠しきっていた蒼い髪がその姿を表す。

「カゲ……みかげにも同じことを聞いたんじゃないんですか？」

「紅髪は、この黒髪をぶつ殺すとほざいてたぞ」

ひなたは、そうですか、とつぶやくと、脇に寄せたコーヒーをぐいと飲み干した。

「似たようなものですかね」

口いっばいに苦味よりも酸味が広がった。そのせいでひなたは、この豆は随分古いな、などと余計なことを考えた。

というよりも、もしかやこの店主はわざとこのようなコーヒーを出したのではなからうか、という思いの方が強かったといえる。

自分の正体を見破っていた店主は、このお世辞にも美味しいとは言えないコーヒーを出すことで、自分を試していたのではなからうか。

裏の世界の情報屋においては、売買だけが情報を得る手段ではない。力づくで情報を奪う輩さえいるらしいが、ひなたはできればそんなことはしたくない。個人的な信頼関係の上に、両者の合意の上で、好意で情報を譲ってもらうのが最適だと思っていた。

だからこそ、彼はコーヒーを飲み干した。店主がわざとこれを淹れたのなら、これで明らかにこちら側に抱く印象は変わっただろう。さらに言えば、こんなにも美味しくないコーヒーを飲んだのだから、自分がここに来たということは黙っておいて欲しい、ということを暗に匂わせる行為のつもりだった。

そんなひなたの思惑を察してか知らずか、店主はこれまでと変わらず素っ気ない態度で口を開いた。

「……そうか。ま、こっちに火の粉が降りかからないようにしてくれよ。せっかく、こちとらのんびり生きてんだ」

「分かりました」

ひなたはポケットから数枚の小銭を取り出すと、それを机の上に置いて店主に背を向けた。その金額は、コーヒー代にしてはやや高く、ひなたにしてみれば、自分がここに来たことを秘密にしておいて欲しい、ということ暗に含ませた額だった。

「お前」

そのまま店を出ようとして、店主に呼び止められた。

「何でしょう？」

店主はじつとひなたを見つめ、それから頭を指差した。

「帽子、忘れてるぞ」

「あ、どうも」

ひなたはすつと帽子を被ると、またきちんと髪の毛を隠した。

「それでは失礼します」

「ああ」

ひなたが店を出たのを確認してから、店主は再び新聞を広げた。

それから、誰に言うでもなく、ぽつりとつぶやいた。

「生きていたのか……。どっちにしろ、あんなくそまずいもんを残さず飲み干されちゃ、下手に言いふらすわけにやいかねえな」

かくして、ひなたの思惑通り、コーヒー一杯で彼らの間に小さな

信頼関係 信頼というのは言い過ぎかもしれないが、少なくとも

当初よりは良好な関係 が築き上げられたのだった。

~~~~~

部屋中に鳴り響いたのは彼女のお腹の音だった。

「何か食いにいこうぜ」

ハム吉が呆れたように言うがユキナは寝返りを打つばかり。明らかに彼女は気落ちしていた。

「腹、減ってんだろ？」

そんな彼女に気を遣うようにハム吉は声をかけるが、ユキナの元気の無さは変わらない。

「そうだけど……」

「何だよ、お前」

「……」

ユキナはむくりと身体を起こすと、どこを見るでもなく視線を宙に向け、ぼつりとつぶやいた。

「……ひとりぼっちで寂しいね」

ハム吉は何も言わずにユキナのポケットに滑り込んだ。自分の言葉では彼女を元氣付けることはできなそうだと、思うと歯がゆかった。しかし、それを言葉に出すことはしない。

ハム吉は思う。ユキナを元氣付けられそうな人物には心当たりがある、と。しかも、つい最近知り合った男だ。ただ、彼にそれを頼もうと決断するのはあまりにも早計な気がした。もう少し時間と情報欲しい。よくよく吟味した上で、最終的に決断すべきだ。

多分まだ同じ街にいるはずだから、もし、何らかの“縁”があれば、彼とまた会うこともあるだろう。そのときは。

「行こうぜ、ユキナ」

ハム吉は思考を一旦中断してユキナを外へ促したのだった。

陽は落ちても街の喧騒は消えない。街中には、やはり多くの人があふれていた。数多の電灯が光り、夜とは思えないほどに明るい。あまりの灯の多さに、本来はあるはずの星はほとんど見えない。人工的な灯は、とても明るいから、だからこそ淋しい。

ユキナは小さくため息をはくと重い足取りで部屋を出た。ぱたん

と扉が閉じ、電気が消える。ユキナの形にくぼんだベッドが、ゆりりと元の形に戻っていく。かすかに残った彼女のぬくもりが無人の部屋に少しだけ人間味を残した。

一章『そして、彼は語り始める(3)』

「いただきます」

つい数日前までは誰かと一緒にいることが当たり前だと思っていた。さつきまでもひなたがいてくれた。

でも、今は1人……。

無論、ハム吉とは一緒だ。けれど、それは慰めにはならない。彼女は人のぬくもりを欲していたのだ。

ユキナにとってひとりぼっちでの食事は、彼女の記憶にある限りでは初めてのことだった。美味しいはずの料理も無機質な味に感じってしまう。機械的に食物を噛み砕き、嚥下し、胃に落としていく。

テーブルに運ばれた1人分の料理に手をつけながら、ユキナは暗い表情を浮かべたままだった。意識していないと思わず涙が零れそうで、彼女は必死に目の前の料理に集中した。

「ごちそうさま……」

並んだ料理をものの数分で食べ終えたユキナはそそくさと勘定を済ませる。お金を払って店を出ようとしたときに、ふと壁に貼られた1枚の手配書に視線が釘付けになった。

「どうかされましたか？」

それに気づいた店員がお釣りを手渡しながらユキナに訊ねる。ユキナは指をふるふると動かして、その手配書を指すと顔はそれを見たままで店員に聞いた。

「こ、この人のこと、何か知りませんか？」

「え？」

店員はユキナの視線を追い、そこにとある人物の手配書があることを認めると、申し訳なさそうに肩をすくめた。

「私はこの人が“大悪党”である、ということくらいしか存じませんが……」

「そうですか」

ユキナは小さく頭を下げて店を出た。やや冷たい風が吹き、ユキナの頬をなでていった。

「大悪党……」

ユキナは足早に宿に戻ると、ベッドに文字通り倒れこんだ。ユキナの頭にあのときの映像が思い起こされる。彼女が信じたくなくて押し込めてきた出来事が、事実として彼女に降りかかる。

そして、ごちゃまぜになった思いを詰め込んで、ぽつりと一言漏らすのだった。

「お兄ちゃん……」

~~~~~

「……」

ユキナが食事をとった場所。彼女は気づかなかったが、実は、ここに彼もいたのである。ひなたはユキナが“あの男”の手配書に興味を示したことに懸念を抱き、そっと彼女の後をつけた。

宿屋の前、ひなたは彼女の泊まる部屋をじつとにらみつけ、しばらくその場にたたずんでいた。彼には確信があった。自分がユキナをつけていたことが、きつと気づかれているであろう、ということについて。

行き交う人々が怪訝そうに彼に視線を向け、しかし“他人”とは関わり合いになりたくないのか、何の行動も起こさずに通り過ぎてゆく。大きな街になればなるほど、その傾向は顕著だった。小さな村では旅人は大歓迎されることがしばしばある。しかし、大都市で旅人が良い待遇を受けたなどという話は滅多に聞かない。

皮肉なもので、人が多ければ多いほど、他人との関係は薄っぺら

くなるようだった。

それから、何十分という時間が過ぎた。

そのままの姿勢でユキナの泊まる部屋の窓を睨み付けていたひなたは、部屋の電気が消えたのを確認すると、一息ついた。それから手ごろな小石を拾い上げると、それを窓に向かって投げつけた。

小さな音がして小石が窓にぶつかる。彼の予感が正しければ、気づくはずだ。

彼女が、ではない。彼が、だ。

何やら小さな影が幾度か失敗を繰り返しながら、どうにか窓の鍵を開け、それから身体全体を使って窓を押し開けた。

ハム吉がひなたをじっと見下ろした。

ひなたはそれを確認すると、すつと両手を広げた。飛び降りろ、という指示だ。ハム吉はこくりと頷くと、そこから飛び降りる。

ひなたは見事にハム吉を受け取ると、両手に乗せたまま口を開いた。単刀直入な問いであった。

「彼女はいつたい何者なんですか？」

「……」

ハム吉は、ふん、と鼻を鳴らすと、彼の手のひらの上に仁王立ちし、腕（前足）を組んだ。

「それを知ってどうする？」

「では、質問を変えます」

「……」

「あなたはいつたい何者なんですか？」

ひなたは挑戦的な視線を向けた。喋るだけでも異常ではあったが、そこらの人間に比べて遙かに莫大な情報をその頭に秘めているらしい小動物に疑念を抱いたのであった。自分の正体を知り、さらに尾行をも察したであろうところから見て、只者ではないことは確かだった。

「俺は、元政府の諜報部隊0230だ」

「それはいつたい？」

「簡単に言えば、情報収集のための作られた機械つてとこだな」

「……」

「お前も噂くらいは聞いたことがあんだろ？」

ひなたは小さく頷いた。事実、彼はそれについて幾らか聞いたことがあったのだ。

「はい、あります。政府はそういうものを大量に作って世界中に散らばらせているとかいないとか」

「そうだ。つまり、俺はこの世に溢れる賞金首や悪人の情報を集めたり、あるいは国の中心地から離れた街や村の状況を中枢に伝えたりにするために、各地に派遣された類のうちの1つってことだな」

それでひなたは合点がいった。自分の正体にすぐさま気づいたことも、やけに旅慣れしているのも、それで説明がつく。

彼の目の前にいる小動物は政府によって生み出された高性能な存在なのだ。

「……そんなあなたが、なぜ彼女と共にいたのですか？」

「拾われたんだよ」

ハム吉は苦しそうに顔を歪めると、ユキナの眠る部屋に視線を向けた。

「元、つていつただろ？俺は機械にはあるまじきものを持ってしまったから政府から切り離されたんだ」

「あるまじきもの？」

「ま、端的に言えば感情ってやつだな」

「感情、ですか？」

「そうだ。正確な情報を得るためには、一切の私情を挟んではいけない。それが政府のお偉いさんたちの意見だ。だからこそ、こんな諜報活動を俺みたいな機械にやらせている。それなのに俺は感情を持ってしまった。だから満場一致で廃棄処分に決まったよ。失敗作だって言われてな。まあ最初は壊されるのも仕方ねえか、とも思ってたんだが、俺だって一応“生きてる”わけだ。そう思うと、ここで大人しく処分を待つのは嫌だな、って思ってたな。それで脱走して、彷徨っていたところを運良く拾われたんだよ」

「そうでしたか」

ひなたはさらりと過去を語ったハム吉の頭を指の腹で軽くなでた。「俺はユキナに拾われた。ユキナは帰る場所のない俺を拾ってくれた恩人だ。だから、先のお前の質問に答えることで、万に一つ、億に一つ、兆に一つでもあいつが危険な目に遭う可能性が出てくるならば、俺は答えたくない」

ハム吉はそんなひなたの指を払うと、慥然とした態度で言い放った。ひなたは眉ひとつ動かさずに静かに微笑んだ。

「よく分かりました。ありがとうございます」

ひなたはもう一度ハム吉をなでると、彼を地面に下ろした。それから、背を向けて歩き始める。

「ひなた」

「何でしょう？」

振り返らずに、ひなたは足を止めた。

「俺がもし、他の機械の奴らと同じならば、お前を見た時点で確実にユキナとお前を近づけようとはしなかったはずだ。だが、俺には感情がある。自分で判断することができる。俺にはお前が言われていたほどに」

「罪は消えませんが」

ひなたはゆっくりと振り返る。電灯に照らされた彼の顔は笑ってはいたがハム吉には淋しそうにみえた。

「今の僕も過去の僕も、全部ひなたであることに変わりはありません」

ひなたはそれだけ言って頭を下げると、そのまま夜の街に消えていった。

ハム吉は彼の背中を見つめ、わずかな可能性に賭ける。今また話をしてみても、彼にはやはり目の前にいる男が世間の一般認識とは違う気がしてならなかったのだ。

一章『そして、彼は語り始める(4)』

翌朝。

ユキナが目覚めたとき、そこにハム吉の姿はなかった。開けっ放しになった窓を見てユキナの顔はみるみるうちに青ざめていく。

「ハム吉!？」

窓から身を乗り出すと、明るい日差しが彼女の頭に降り注いだ。昨日と同様にたくさんの人が点在しており、この中から小さなハム吉を発見することは困難に思えた。

「どこ、行っただら……」

しかし、ユキナは急いで着替えを終えると彼を捜すために勢いよく部屋を飛び出した。

人ごみを避けながら視線は下方に向けて、ユキナはハム吉を捜す。これだけの人間がいれば、どこかで踏み潰されていてもおかしくない。彼女は不安を隠すこともせず、ただひたすらにハム吉を捜して街を駆け回った。

そのとき、彼女の意識はハム吉の捜索にのみ向けられていた。だからこそ気づかなかった。街人が手にもつ新聞に、あの記事が載っていることに。

~~~~~

「……また来たのか」

「はい」

ひなたは昨日も訪れた、あのたいして美味しくないコーヒーを出

す店に再び足を踏み入れていた。

「なんだここは？」

「こういう街の外れ、と言いますか、明るい場所からはじき出された人が住んでいるところの方が僕の求める情報が手に入りやすいんですよ。簡単に言えば、表には表の情報網が、裏には裏の情報網があるってことです」

ひなたの肩に乗ったハム吉が、そんなもんか、とつぶやき、カウンターの上に飛び降りた。

「なんだこれ、ねずみか？」

「おう。そんなもんだ。いちいち説明するのも面倒くせえ」

店主が目を丸くして著しく態度の悪い小動物を見つめるが、ハム吉は気にも留めずに無然とした顔つきで座り込んだ。

「それで、今日はまた何のようだ？」

「はい」

ひなたはちらっとハム吉を見下ろし、それから店主に視線を戻す。「フブキ絡みの件です。実は昨日、彼の面影を有する少女を見かけたのです」

店主はひなたの顔を試すように見つめてから、鼻をならした。

「ふん」

そうして、棚の上に置いてあった新聞を放り投げた。それは今朝の新聞のようで、ざっと目を通したような皺がついていた。

「これは？」

「読んでみる」

ひなたは受け取ったそれをめくっていく。どこそこで事件があった。何とかという賞金首がつかまった。政府が何やらを発表した。などの記事の中、ある1つの記事がひなたの目に留まった。

「……」

そこには、とある一家惨殺事件が載っていた。事件現場は辺鄙なところ。名前すらない小さな村で、人口はほんのわずかしかない。被害にあったのはその村に住む3人家族であった。両親の死体は燃

やされた家の中から発見され、“一人娘”のものは見つかっていない。政府は目撃者の情報や事件現場の状態を統合して、犯人はフブキであると断定した。

「……」

ついで、写真が載っていた。行方不明の長女の写真だ。

「さて、どう思う？」

店主は湯気の立つコーヒーをひなたに差し出しながら訊ねた。ひなたは難しそうに顔を歪めると新聞を閉じた。

「つまり、この被害者たちがフブキの家族であり、僕がみかけた少女が彼の姉妹ではないか、ということですか？」

「これだけじゃ家族と断定することはできませんが、そいつらがフブキの関係者である可能性はあるな。小さな村だというのに、その一家だけ狙ったというのも変な話だ。あの男なら、村ごと消し去るだろうよ」

「何か理由があつてこの家だけを襲った、と」

「そうなるな。もし村そのものを完全に抹殺したいなら、村全体を焼き払ったほうが効率が良いんだろ？ あの家だけを狙った理由が何かあるはずだ」

「……そうですね」

「そりゃあ、フブキの家族だよ」

気だるそうにハム吉が言った。2人の視線が同時に小動物に向かった。ハム吉はちらつとひなたに視線を向け、鼻を鳴らした。

「新聞に載ったつづつことは、これ以上隠しても仕方ないってことだ。フブキは四人家族の長男だ。家族構成は、父・母・妹。政府は今後フブキ逮捕の鍵になるかもしれない、あるいは彼らが無用な被害を受けるかもしれない、と考え、フブキの家族に関しては非公表を貫き通し、独自に調査・観測を続けていた。だが、その努力も無駄に終わった。この事件で、フブキ確保の鍵がまた1つ消えたといえる」

「なんだ、ねずみ。お前、嫌に詳しいな。政府のペットかなんかか

？」

「元、な」

ハム吉はひなたに新聞記事を見せるように促し、ひなたはそれに従ってハム吉に見えるように広げてやった。

「ただ、これを気に政府は何らかの行動を起こすはずだ。保護を名目にして行方不明の妹を捕まえて、フブキをおびき出す餌にする、というところか。殺し損ねた人間を生かしておくほど、フブキは甘くない。きつと、またこいつを殺しに来る、というのが大前提にはなるがな」

ハム吉は写真をじつと見つめ、それからひなたに視線を向けた。

「で、お前はどう動く？」

「……」

ひなたは顎に手を当てて、小さく唸った。

「お前が見た少女つてのは、こいつのことなんだな？」

店主はそんな彼の様子を見て新聞の写真を指差した。ひなたは首肯し、コーヒーを飲み込む。

「貴重な手がかりだな」

店主が小さく笑い、新聞を乱暴に折りたたんだ。ハム吉が小さく舌打ちをして、ひなたの腹を小突く。

「本当はお前の様子をじっくり観察してからあいつのことを話すかどうか判断するつもりだったが、さっきも言ったようにこうなったらとやかく考えている暇はない。俺が知ってる情報を全部お前にぶちまける」

ひなたはハム吉を手のひらに乗せると、そっと肩に乗せた。

「ユキナはフブキの妹だ。俺が保証する。間違いなくお前が追ってるフブキの妹だ」

「……」

ひなたは小銭を置くと足早に店を出て行く。振り落とされないように、ひなたの肩にしがみつきながら、ハム吉が叫んだ。

「ユキナは信じていたんだ、ずっと。自分の両親が目の前で殺され

ても、な。あいつは兄貴が大好きなんだよ」

ひなたは走り出していた。ユキナの泊まる宿屋を目指して。

「両親を失い、兄を失い、ユキナは孤独の淵にいる。お前になら分かるだろ。孤独がどれほど激しい痛みを伴うか。だから、頼む。あいつを救ってやってくれ」

必死に叫ぶハム吉に対して、ひなたは冷静な口調を崩さない。

「同情はしますが、約束はできません。彼女は僕の仇の妹なんですよ」

「仇であると同時に親友でもあるんだろ？」

ひなたは苦々しげに顔を歪めた。こいつはどこまで知っているのか、という不気味さも込めて、彼は口を開く。

「あつた”です”」

「無理を承知で言っている。でも、昨晚も言った通り、ユキナは俺の恩人だ。俺の孤独を癒したのはあいつだ。だが、悔しいことに俺ではユキナを救えない。あいつには、自分を守ってくれる“兄”が必要なんだよ。ユキナが言うには、いや、お前も知ってるか。昔のフブキは今とは丸つきり違う存在だったんだろ？ とても優しくとても強くて、いつも自分を守ってくれた、って言ってた。だから、あいつはずっとずっと追い求めてるんだよ。一度ぶち壊された自分の世界を取り戻してくれる……自分が心の底から甘えられる存在をもう一度手に入れたいんだよ。優しい兄貴をなあ!!」

「それは僕の手で掴める量を越えています。フブキに頼むべきことです」

「わかんねえやつだな。俺はお前がその代わりになってくれと言っている」

「だから、僕は」

「御託はいい」

ハム吉は凜とした声で言い放った。

「俺はお前を信じている」

ひなたは、唇をかみ締め速度を上げた。別にハム吉が振り落とされても良い気持ちで駆けた。まるで風が吹き抜けていくように、鋭い速度で進んでいく。

「それは、なんともずるい一言ですね」

その言葉も風と共に掻き消えた。

一章『そして、彼は語り始める(5)』

「な、なんででしょう？」

ユキナの前に現れたのは身なりをきちんと整えた政府の役人だった。胸に光る勲章の数から見て、全くの下っ端ではなくある程度のお偉いさんだということは容易に想像がついた。

「ユキナさんだね」

短く切りそろえた髪が彼の清潔さを増す役割を担っている。あくまで自然な作り笑いが、ユキナを恐怖に駆り立てる。

「そ、そうですけど……」

おそろおそろといった風に頷くユキナを見て、役人はさらに笑みを深める。

「私は、だいちと言います」

「は、はあ」

「単刀直入に言うと、君の力を借りたいと思っている」

「ち、力？」

はい、と言っただいちが制服のポケットから新聞記事の切抜きを取り出して、彼女に示した。

「我々は君と同様にあなたのお兄さんを捜している」

「……え？」

彼が見せたのは、ユキナが最も思い出さたくない事実を示すものだった。実の兄による両親惨殺。彼女の身体はびくりと震えた。それを見てだいちが、静かに手を差し伸べる。

「政府はフブキに関して莫大な数の情報を有している。君に協力してもらえれば、きつとすぐにお兄さんを見つけ出すことができるはずだ」

「……ほ、本当ですか？」

「はい」

だいちが力強く頷いた。ユキナは、彼の手をとろうとゆっくりと

右手をあげ……

「あ、あの、1つ聞いてもいいですか？」

それを途中で止めた。

「なんだ？」

「私が兄を捜しているって、なぜ知ってるんですか？」

「……はい？」

「その記事には、私は“フブキが取り逃がした”と思われる生死不明の行方不明者になっていきますよね。それなら、私は兄から“逃げている”と考えるのが妥当だと思うのですが？」

「……」

「だいちは、こほん、とひとつ咳払いをすると、差し伸べた手を下ろした。政府の調べでは、世間知らずのお姫様、となっていたが、どうやらただの子どもではないようだ、と感じただいちは大仰に腕を広げた。

「我々の情報網を駆使すれば、君がいつたいどういう状況に陥っているかを調べるのはたやすいことなんだ」

ユキナはじつと彼の瞳を見つめた。少なくとも、彼女の目では彼を信じていいのかわかを判断することはできなかった。

「それに、例えばの話だが、もし実際は君が兄から逃げているのだとしたら、我々は君を“保護”したいと考える」

「保護、ですか？」

「はい。つまり、私としては、君がお兄さんを追っているのですが、お兄さんから逃げているのであっても、我々政府の下に来れば君にとって有益であると考えている。だから、こうして君の前に現れた」

「な、なるほど……」

ユキナは彼の言うことはもっともだと感じた。口車に乗せられている気がしなくてもなかったが、政府の力を使えば確かに兄を見つげ出すのは容易かもしれない。それに、何といっても今のひとりぼっちの状況を打破できるのなら、たったひとりで旅を続けていく

らいなら、そっちの方が良いような気がした。

「それでは、私と一緒に」

「は、はい」

今度こそ、2人の手が結ばれようとしたときだった。

「ユキナー!!」

大きな声が聞こえ、同時に両者が目をつむるほど激しい風が吹いた。

「な、何？」

ユキナは誰かにふわりと身体を抱かれ、数秒間ほど宙に浮いたかのような感覚を覚えた。

「君は……」

風がやんで、先に目を開けたのはだいちの方だった。目の前に自分の目標物であった少女を抱きかかえたためがねの蒼髪の男を見つけて、彼はため息をつき、手のひらで額を押さえた。

「まさか、こんなところで君に会うとは」

「同感です」

ひなたはめがねの奥底で暗く輝く瞳をだいちに向けた。

「あ、あれ？ え？」

ようやく目を開けたユキナは自分がひなたに抱きかかえられていることに気づいて頬を朱に染めると、じたばたと暴れ始めた。

ひなたはそんな彼女をそっと地面に下ろすと、勢い余って頭からとんでいった帽子を拾い上げ、めがねを外した。

「さて、状況の説明をお願いしたいところだが？」

「それも同感です」

「私はその彼女を迎えに来ただけだ」

「だいちにはユキナに視線を向け、それからすぐにひなたに戻した。ひなたは険しい目つきのまま、すっと刀の鞘に手をかけた。」

「それは、政府の意思ですか、それとも、あなたの意思ですか？」

「だいちには緊張感のない声で、ん〜と唸ると、天を見上げた。」

「なんとも言えないところだな。この件についての政府側の見解には納得していない部分もあるが、彼女をこちらの管理下におくことについては全面的に賛成だ」

「政府はユキナさんを“彼を捕らえる鍵”にするつもり、で良いんですか？」

「“鍵”ではない。“餌”だ」

小さく眉を動かしたひなたを見てだいちが嘆息した。

「君に受け入れられないことは分かっている」

そして、ひなたの背に隠れるようにして立っているユキナとひなたを見比べて、

「それで、君は何をしているんだ？」
と付け加えた。

ひなたは自分の置かれている状況についていけず困惑しているユキナを一瞥して、首をかしげた。

「よく分かりません」

「はい？」

「だいちには呆れたようにそう聞き返した。」

「よく分かりませんが、彼女が彼の妹であるならば、僕は彼女を彼の元に届けてあげたいと思います」

「フブキはもはや君のよく知る人間ではない」

「それは、きつと僕の方が痛いほどに分かっています」

「だろうな」

「だいちが肩をすくめると、やれやれといった風に首を横に振った。」

「今回は私の単独行動なので、ここでいったん退くでしょう。私も今は君と争いたくはない。命は大事だ」

「そうしてもらえると助かります」

だいちは踵を返して、それから一度だけ振り返った。薄い笑みを浮かべ、白い歯を口の隙間からのぞかせる。

「君だけは昔から変わっていないようで安心した。それに、なんていうかな。毎度のことながら、女性に苦勞しているようだな」

ひなたは何も答えず、小さく笑う彼の顔をじっと見つめ小さく頷いた。だいちは、ちらっとユキナに視線を向け、再び背を向けて歩き出す。

「君が彼女と一緒にいるのであれば、また出会うこともあるだろう。だいちはその言い残してそのまま人ごみの中に消えていった。辺りには騒ぎを聞きつけた野次馬たちが集まっている。

「あれって蒼風か？」

「あいつつてもう死んだんじゃないか？」

「私は牢獄に入ってるって聞いたわ」

「それよりも、あの小さい子、あのフブキの妹らしいわよ」

わざと聞こえるように言っているのかというくらいに、街人たちの声がひなたとユキナの耳に届く。

「ユキナさん」

「は、はい」

もはや変装をする意味はないと踏んだのか、メガネと帽子を手にもったまま、ひなたはユキナに近づいた。

「とりあえず、移動しましょう」

一章『そして、彼は語り始める(6)』

ひなたがユキナを引き連れて向かった場所は彼女が泊まる宿だった。先ほどの騒ぎの影響があるので人目につきやすい場所は避けたい、というのがその理由だった。

「あ、あの、ひなた？」

「どこから説明しましょうか」

不安げにベッドに腰掛けるユキナの傍に立ち、ひなたは困ったように腕をくんだ。

「とりあえず、お前の素性と、それからフブキとの関係の説明が必要な」

「そうですね」

「あとは個人的に気になる点だが、だいちとの関係も知りたい。こっちは素でびびった」

「分かりました。では、まずは前者から話すことにしましょう」

ひなたは荷物の中から3枚の手配書を取り出した。そして、その中の1枚をユキナの目の前に広げてみせる。

そこには、蒼い髪の男、すなわち、ひなたの顔があった。普段の彼からは想像もできないほどの険しい顔つき。誰がどう見ても犯罪者の顔だった。その下に書かれている賞金額は2億8000万S(Sはサニーと呼ばれる貨幣単位)。

例えば、現時点で賞金が懸けられている悪党たちの平均賞金額が約3000万Sであるといえ、その凄さがよく分かるだろうか。あるいは、今牢獄に入っている犯罪者たちを片っ端からかき集めたとして、1億を超える首はその一握りにすぎず、さらに2億ともなるとひとつまみもない、といったほうが良いだろうか。どちらにしろ、その額は彼がかなり危険視されている人物である、ということを示していた。

そもそも政府は賞金首にあまり高額な値段はつけることをよしと

しない。なぜならそのせいで民衆に大きな怯えを抱かせる可能性があるからだ。ちなみに、現時点で2億台の賞金首は数人いるが、3億を超える首はわずか2人しかいない。

「ご覧の通り、僕は賞金首です。数年前から額に変動はないと思います。当時は、これのせいでぼちぼち知名度もあつたのですが、ユキナさんはご存知ないようでしたので改めて自己紹介をさせていただきます。僕の名前はひなた。通称“蒼風”といいます」

「蒼風……」

ぼかんと口を開けてそう漏らしたユキナを見て、補足が必要だと判断したハム吉は、ひなたの言葉を継ぐ。

「今、お前の目の前にいる男は数年前、ぴたりと消息を絶つた大悪党だ。戦う姿が風のようなこととその髪の色から、蒼風という呼び名がついた。噂では、死んだとか牢獄に入れられているとか、足を洗つてどこか人知れず暮らしているとかわられていた。だが、政府側は明確な情報を呈示せず、この件はうやむやになっていたんだ」

それからハム吉はちらつとひなたに視線を向けた。後はお前が続ける、と言つ目だった。

「うやむやにしたのは、だいちの計らいだと思われます。その方が、いろいろと都合が良かったもので」

ひなたは言いながら2枚目の手配書を広げた。それは彼が例の喫茶店で情報を求めた紅い髪の男のものだった。賞金額は3億7000万\$。3億越えの1人だ。

「彼はみかげ。通称は“紅花”。僕の元相棒、というのが最も適切な表現でしょうか」

「元？」

ユキナが訊ねる。

「はい。とある事件がありました。僕らは道を違えました。それが数年前。僕らの消息が消えたときのことです」

「その、“とある事件”つてのがフブキに関わってんのか？」

「いえ。多分あなたの言う事件とは違うと思います。それはもう少し前のことになるはずです」

「ちよ、ちよっと待って」

「はい」

ユキナは立ち上がると、ひなたの服を掴んだ。実の兄の名前が彼らの会話中に出てきたことで、緊張感が高まったのかもしれない。た。

「お兄ちゃ……兄と知り合いなのは、さっきの政府の人との会話からなんとなく分かった。だから、その詳しい話を聞く前にひとつだけ聞きたいんだけど」

「なんででしょう？」

ユキナは唇をきゅっとかみ締めると、伏し目がちに口を開いた。

敢えて“兄”と言いなおしたのは、単なる照れ隠しなのか、それとも、ひなたとまだ打ち解けられていないからなのか。

「兄は……兄は、どんな人だった？」

その問いにひなたは言葉を詰まらせた。この返答は、非常に重要な意味を有している気がした。しかし、彼は下手にごまかすのは妥当ではないと判断し、真剣な面持ちで口を開くことにした。

「……正直に言います」

ユキナは頭を垂らしたまま小さく頷いた。ベッドで仁王立ちしているハム吉も軽く頷く。

「出会ったころ、彼はとても優しい人でした」

はっとした顔でユキナは顔を上げる。その表情は、安堵と不安の入り混じったものだった。

一章『そして、彼は語り始める(7)』

それは数年前の話になる。

その町の名前がまだ地図上にあつたころ。1人の旅人がふらりとそこにやってきた。

「こんにちは」

まるで墨で染めたかのように真っ黒の髪の毛を有し、お世辞にも綺麗とはいえない格好で現れた旅人は屈託のない笑顔を浮かべてぺこりと頭を下げた。

旅人はまだ少年だった。年齢は10代の半ばといったところで、顔にはあどけなさが残っていた。そして、それが功を奏したのか、彼はすぐに町の人々に受け入れられた。

特に同年代の2人の少年と彼は急激に仲良くなつていった。

「旅をするのってどんな感じだ？」

燃えるような紅髪の少年が活発そうな笑みを浮かべて旅の少年に訊ねた。

「うん。やっぱり自分の知らない世界をこの目で直に見ることが出来るってのは、おもしろいかな」

「そっかあ。やっぱり俺も早く町を出たいぜ」

「出ればいいじゃん」

「簡単に言うなよ。それなりの決意つてのが要るだろ」

「まあ……そうかもな」

旅の少年は小さく笑うと、もう1人の蒼髪の少年に視線を向けた。「ひなたも旅に出ようって考えてんの？」

「ん……そうだね。僕たちはその日に向けて鍛えてるからね」

「その木刀か」

「うん。カゲは銃を使ってるんだ」

カゲと呼ばれた紅髪の少年は自慢の銃を取り出すと誇らしげに掲

げて見せた。

「ふ〜ん。じゃ、ちょっとだけ稽古をつけてやるよ」

そんな旅の少年の挑戦的な瞳にカゲの中にある何かに火が点いた。
「偉そうに。返り討ちにしてやるよ、フブキ」

勝負はあっさりといった。

カゲが発した銃弾はフブキに掠ることさえなかった。腹部に強烈な打撃を受けたカゲは、うめき声を上げて地面に倒れこんだ。

「すっげー！」

感嘆の声を上げたのはひなただった。フブキは片手を挙げてそれに応えると、倒れたカゲの頭を軽く叩いた。

「その程度じゃ、旅に出たところでどうしようもないんじゃない？」

「うるせえよ」

咳き込みながら身体を起こしたカゲは、フブキをひと睨みして服についた汚れをはたく。

「次は僕の番だね」

ひなたが2人に近づいて木刀を構えた。フブキは小さく笑って、
そんな彼と対峙する。

「いいよ」

少年が倒れるのに2秒とかからなかった。

フブキに手も足も出なかった2人の少年は、それから数日の間、

彼から旅の話の話を聞いたり、武器の扱い方を習ったりして過ごすことになった。

初めて知る外の世界の出来事に彼らは興奮を隠せなかった。それと同時に、これまで以上に旅に出たい気持ちが強まっていった。もし、その後に“何も起こらなければ”住み慣れた町で、旅に出るか否かと迷いに迷っていた彼らの背中を押したのは間違いなくフブキとなっただろう。

さて、そういうこともあって、フブキの滞在期間はわずか3、4日というところであったにも関わらず、彼ら3人は希有の友人となったのである。

フブキの旅立ちの夜はすぐに訪れた。その日、3人はいつもの場所談笑していた。

「もう行っちゃうんだな」

「ま、一つの場所に長居すると、世界を見て回りたいという旅に出た意味が失われちゃうからな」

フブキは荷物をまとめると、それを脇に置いた。ひなたはそんな様子を見ながら、彼のコップにコーヒートを注いだ。

「本来なら、こころで酒でも飲んで別れたいところだが、後ではねると厄介だからな」

カゲは不服そうに唇を尖らせて、ひなたに自分のコップにもコーヒートを注ぐように促した。

「随分と厳しい家庭で育ったようだな」

「カゲんところの親は政府の役人だからね」

「うっわ。そんなお堅いとこの息子が放浪家になろうっていつのか」「うるせえな。あんな家で育ったからこそ、出て行きたくなるもん

なんだよ」

カゲは悪態をついて苦々しい顔を浮かべる。

「それは少し、分かる気がする」

ひなたが最後に自分のコップにコーヒーを注ぐ姿を見つめながら、フブキはぼつりとつぶやいた。

「うちもさ、故郷はど田舎だったけど、うつとうしいくらいに過保護に育てられたからな。思い切って旅に出たのも、ある意味、そういう環境で育ったっていう反動だったような気がする。家庭の環境って、なんだかんだで自分の未来に結構影響あるのかもな」

「ふん……」

故郷のことを思い出してわずかに表情に淋しさを滲ませたフブキに気を遣ったのか、カゲは敢えて興味なさそうにそう言っと、わざとらしいほどに明るい声でコップを掲げた。

「ま、とにかく、これでお別れだ。最後は景気よく乾杯といこうぜ！」

その声が続いて、フブキがコップを掲げた。そして、最後にひなたがコップを掲げ、コン、という小さな音が鳴った。

「乾杯っ！」

別れの日、3人は笑顔だった。またいつか、笑顔で再会できると信じていた。

このときは。

3人とも。

二章 『彼女は自分の意思を口にする(1)』

そこまで話し終わると、ひなたは拳を握り締め、ぎりつと奥歯をかみ締めた。

「再会の日は、すぐに訪れました」

彼の表情の変化にユキナは鼓動が早まるのを感じた。それ以上は聞きたくないかのように、耳を押さえて首を横に振る。

「望んでいた形とは違う再会でした。その日、僕らはいつものように町の外れで稽古をしていました。僕は剣術を、みかげは銃を。しばらく淡々と訓練を続けた後、そろそろ帰ろうということになり、ふと町の方に目を向けると、もうすっかり夜だというのに町が異様に明るいことに気づきました。僕らは、いったい何だろう、と思いつつ、妙な胸騒ぎを感じて町に戻りました」

ユキナは身体を震わせてひなたから離れると、へたへたと腰から崩れ落ちてベッドに座り込んだ。顔はやや青ざめていた。

「僕らが着いたときには町はもうなかったといえます。燃え盛る家と泣き喚く人々。僕は一目散に家に戻りましたが、そこにあるはずの家は形を変え、家族の姿は見当たりませんでした。それは、みかげも同様のようで、ふらふらとした足取りで彼は僕に近づいてきました。そのとき

「もう、いい」

機械的な声が部屋中に響き渡った。圧倒的なまでに巨大な拒絶の気持ちが進められていた。

「やめて」

「すみません……」

ユキナの様子を察したひなたは小さく息をはくと、壁に寄りかかった。彼自身も内から込み上げてくる感情を抑え切れていないらしかった。

「フブキの話はいったんここで止めよう。ユキナが限界だ」

ハム吉はがたがたと震えるユキナに視線を向けて、ひなたの足元に近寄った。

「だいちとの関係について話を移してくれ」

「はい。僕とみかげは故郷を失った後、1つの町を作りました。事故や事件など、いえ、時代が時代ですから、ほとんどは事件に巻き込まれた者たちでしたが……。とにかく様々な理由で家族を失った者たちが、もう一度誰かと共に暮らせるようにと作った町です。彼とは、そこで出会いました」

「アンフォールか」

ひなたは驚いたように口を開けると、音もなくこくりと頷いた。

「よくご存知で」

「当然だ。お前とみかげの出身地だぞ。政府側が無視するはずないだろ。定期的に政府の役人たちや俺みたいな諜報部隊が調査に行っているはずだ」

「町のみんなに迷惑をかけてないでしょうね」

ひなたがじとつとした目をハム吉に向けて問いかけると、ハム吉は大きく首を縦に振った。それは自信の表れというよりはむしろ、そうあつて欲しいという願いを含んだ頷きだった。

「それはまあ大丈夫だろうよ。一応政府は“正義の味方”だぜ？」

さすがに民間人を危険な目に遭わせるほど腐つてないだろ」

「そう……ですな」

ひなたは宙に視線を浮かべるとしばらく目を閉じた。数年前に旅立った第2の故郷を思い出しているらしかった。

「ということは、だ。だいちも何かに巻き込まれたってことか？」

「詳しくは知りませんが、僕らと似たようなものだと思います。昔から、政府に入って悪人を残らず捕まえるのが夢だと言っていましたから」

ひなたは静かに目を開けると、ぐるりと首を動かしてハム吉を見つめた。

「その悪人に、お前は入ってるのか？」

「どうでしょうね。現時点で、彼の最大の目標はフブキの確保の
ずです。その点において、僕やみかげも同一の目的を有している以
上、彼がそんな無駄な動きをするとは思えません」

「なるほどな。そうなるよ、やっぱりお前が鍵だな」

「と、言いますと？」

ハム吉は、ふん、と鼻を鳴らすと、ぺちぺちとひなたの頬を叩い
た。

「つまり、だいちが政府の役人という一般的に正義と思われている
立ち位置でフブキを追い、みかげは無法者という悪の立ち位置でフ
ブキを追っている。そして、お前はその間をうるちよろしてる感じ
だよな。まあどちらに転ぶか分からないっていうのが、怖いところ
か」

「そうですかね？ 僕は明らかにみかげ側の人間だと思えますが：

…」

「でも、みかげと違ってお前にはフブキを殺すつもりなんてないだ
ろ？」

しばらく会話から遠ざかっていたユキナが、その言葉にはつとし
た顔をした。泣きそうな瞳がひなたに向けられる。そんな顔をされ
ては否定の言葉を発することができはるはずもなく、

「相変わらず、ずるいですね、あなたは」

と嫌味をふんだんに込めてばやくのが精一杯だった。

ひなたはばやくと同時に手早くメガネをかけると蒼髪をすっぽり
と帽子の中に隠した。それから荷物の中から一枚の厚めの布を取り
出すと、それをユキナの頭に被せた。

「では、そんな僕の最後の葛藤を壊しに行きましょうか」
「へ？」

ユキナは頭に被せられた布に触れながら間の抜けた声をあげた。
ざわりとした感触がその手に伝わる。

「今度は表のやり方で情報を集めてみましょう。これだけ大きな街
です。きっと、何か分かるはずですよ」

「んん？」

ハム吉がよく分からないといった表情を浮かべ、首をかしげた。
しかし、ひなたはそんなことを気にも留めず、ユキナの手をとると
部屋の扉を開いた。

「さあ行きましょう。あの騒ぎが情報として伝わり終える前に」

二章 『彼女は自分の意思を口にする(2)』

彼らが向かったのは“情報屋”とでかでかと看板に書かれた店だった。

「なんで初めからここに来なかつたんだよ」

ハム吉は店の前に立つひなたに向かって、苛立ったように声を上げる。

「こつというのは表の方が面倒なんですよ。裏での情報交換なら、代価なしに情報を得られる場合もあります。まあ、命を落とす危険も高いですが……。しかし、表ではそうはいかない。力づくで得られる情報は皆無ですからね。ここでは情報と引き換えに、それ相応のお金か情報が必要になります。フブキの情報となるとかなり高額でしょう。何しろ、政府が隠蔽しているくらいの要人ですからね。きつと払いきれぬ額ではありません」

「言つとくが、うちの姫さまもたいして金もってないぞ」

ため息混じりに言うハム吉とは対照的に、ひなたは笑みを浮かべると人差し指を立てて口を開ける。

「大丈夫です。僕らには奥の手があるじゃないですか？」

「あ？」

首を傾げるハム吉をよそに、ひなたはユキナへと視線を移した。

「とにかく、ユキナさん。できるだけ、顔はあげないようにしてくださいね」

「うん」

頭から布を被ったユキナはこくと頷く。それを見てひなたはこつと笑うと、店の中に入った。10人をわずかに超えるくらいの従業員が店内を駆け回っていた。

「はいはい、いらつしゃいませ」

ひなたたちの対応に出てきたのは若い青年だった。ひなたはユキナの背中を押すと、彼女を前に突き出した。

「へ？ え？」

「あなたの聞きたいことを聞いてみてください」

「う、うん」

ユキナは俯いたまま、店内に響き渡るくらいの大きな声で言った。

「フ、フブキの情報をくださいっ！」

瞬間、店内は静寂に包まれた。青年はひきつった笑顔を浮かべて、うん、と唸った。

「そのレベルの情報になりますと、かなり高額になりますけど……」

「ちなみに、おいくらでしょうか」

青年はそう屈託なく言うひなたに視線を移すと、困ったように頬をかいた。

「そうですね……。最低でも300万Sくらいはいただきたいかとそれを聞いてユキナが思わず顔を上げそうになったので、ひなたは彼女の頭をそっと押さえた。300万Sとなると、車が1台買えるくらいの値段だ。情報一つにその値がつくことに彼女が驚くのも無理は無い。

「その額なら現金で払うことは不可能ですね。では、こちらの情報と交換ではどうでしょうか？」

それを聞いて、青年は嫌な笑みを浮かべた。

「しかしですね、お客様。300万Sに相当する情報となると……」

「蒼風」

「はい？」

青年はその表情のまま固まった。自分の聞き間違いかと思ったのだ。

「こちらは、蒼風の情報を提供しましょう」

「内容は？」

青年はそれに食いついたらしく、身を乗り出してささやくような声でひなたに訊ねる。

「そうですね。ひとまず彼の存否、それで足りければそれに加えて他の情報も、というのはどうでしょう」

「……信憑性は？」

「確かです」

青年は、ふむ、と考え込むような仕草を作った。それを見て、ひなたは咳払いをする。

「証拠はすぐにお見せできます。……が、ここでは少しまずいので、奥の部屋に行きませんか？」

ひなたの試すような視線を見て青年は頷くと、目の前に毅然と立つ“お客様”に失礼のないように深く頭を下げた。

「……分かりました」

「奥の手つて、これかよ」

部屋に通されたひなた一行はふかふかの椅子に腰掛けていた。殺風景な部屋であったが、壁の厚さはかなりのものであるらしく、全く外からの雑音が入ってこなかった。

2人の足に挟まれる形でしゃがみこんでいたハム吉のぼやきに対して、ひなたは呆気羅漢に答えた。

「なにせ本人ですからね」

「せっかく、お前の件は下火になったつていうのに……」

「仕方ありません。それに、宿を出る前にも少し触れましたが、先ほどの小さな騒ぎのことを考慮すると、まもなくかあるいはもう既

に何らかの情報がここに届けられている可能性は否定できません。つまり、この情報を高く売るなら今ほど絶好の機会はない、ということですよ」

ひなたがそう言うと、ユキナが申し訳なさそうに顔をあげ、ひなたを見つめた。

「ごめん、ひなた」

「はい？」

「なんか、いつぱい迷惑かけてる」

「気にしないでください。これも宿屋で言いましたが、僕の葛藤を断ち切るために必要なことなのですから」

「でもっ！」

ユキナが言葉をつむぐ前に扉が開いて、先ほどの青年が姿を現した。手にはいくつかの資料を持っている。

「お待たせしました」

「いえ」

青年はひなたたちの向かいに腰掛けると手を組んで、緊張した面持ちで無理やりに笑顔を作った。

「まずは、そちらの情報をうかがってもよろしいですか」

「分かりました」

言って、ひなたはメガネを外した。同時に青年の目が点になる。

続いて、彼が帽子を取り、例の蒼色が飛び出したときの青年の顔は形容するには言葉が足りないくらいの驚愕の表情に変貌した。それは思わずハム吉がにやりとしてしまうほどの変貌っぷりだった。

「あな、あ、あなた……は」

「初めまして、ひなた……いえ、蒼風といった方がよろしいでしょうか？」

「え？ い、生き、あれ？ な、何で？」

「そもそも、僕は政府につかまってなどいませんから」

「……ええ？」

青年は体中の力が抜けたかのようにだった。手からは書類が落ち、

ひなたが慌ててそれを受け止めた。

「あ、そ、そういえば、さきほど、なんだか妙な騒ぎがあったよう
な……」

「はい。それは僕です」

「へ、へえ……」

青年はもぬけの殻にでもなったかのようだった。だいちとひなたとの一件は、まだこの場所に正確に届いていないようだった。仮に届いていたとしても、単なる噂や与太話として片付けられていた可能性を否定することはできないが……。

とにかく、ひなたの言葉通り、蒼風の存否をここで明らかにすることは、今こそが絶好の機会だったというわけだ。

「それで、フブキの情報はいただけますか？」

「あ、は、はい……。も、もちろんです。えつとですね。こちらが有している情報によりますと」

青年が提示した情報を要約するところだ。フブキの居場所は不明どこかに居住しているわけではなく、転々と移動していることがその理由であった。ただ、ひなたやユキナの知っているように、フブキはかつて良識な旅人であったという。それが、何かをキツカケにして豹変し、今では最も危険な賞金首となっている。賞金額は7億2000万\$。2番手のみかけの倍以上の額から判断するに、政府がどこまでも彼を危険視していることが計り知れた。こんな額をつけることで、民間人が不安に思うことよりも、そうまでしてでも捕らえたい、という必死な思いが伝わってくる。

「それで、そのキツカケというのは、何か分かりますか？」

「そ、そうですね……。これはあくまで推測なのですが、彼は反政府組織に利用されているのではないかと」

「反政府組織？」

「はい。今の政府を倒そうという……簡単に言うと、革命軍ですね」「それに利用されている、というのは、つまり、何か弱みを握られているということでしょうか？」

「いえ。それにしても、豹変ぶりが凄まじすぎると思います」

青年は、ふう、と一息つくくと、ちらつとひなたに視線を向け、それからすぐにそらした。

「何か？」

「あ、えーつと、いえ、あくまで、あくまでですよ」

「はい」

「これは、僕の妄想に過ぎないんですけど、フブキは操られているんじゃないでしょうか？」

「操られている？」

「はい」

青年はすつと立ち上がると、ジェスチャーを含めて話を始めた。

それはまるで自分に陶醉しているかのような口調であった。

「政府が極秘に、人の心を奪う薬を開発している、と聞いたことがあるんです。反政府軍はそれを奪って、フブキに投与したんじゃないでしょうか？ それだと、急激な豹変にも説明がつく。彼は、その薬の実験体……」

そこまで言って、ひなたが微妙な表情をしていることに気づいたのか、青年は椅子に腰掛けた。

「すみません……。情報屋が想像で物を言っただけじゃありませんよね」

「いえ。それは非常に興味深い見解だと思います」

「でしょう！？ でも、誰も夢物語だとか何とか言っただけで取り合ってくれなくて……」

ひなたは青年に気づかれなないようにポケットからペンを取り出すと、それを椅子の上でじつとしていたハム吉に手渡した。それから手のひらを広げ、彼の前に差し出す。それを見てハム吉は彼の意図を察したのか身体全体を使ってペンを操り始めた。どうやら、ひなたの手のひらに何かを書いているらしい。

「もし、これが本当なら、僕としてはフブキを悪人と断定しているものか……」

ひなたがすつと手のひらを広げ視線を落とす。そこには「薬はあ

るはずだ」と物凄く乱雑な文字で書かれていた。それを見たひなたは満足そうに頷くと、すつと立ち上がった。

「どうやらこちらの情報よりも高額な情報をいただいたようです。感謝します。これはとっておいてください」

ひなたそう言って、彼の前に硬貨を数10枚ほど置いた。

「え？ あ、あの……」

困惑する青年を横目にひなたはユキナを立ち上がらせると、すたすたと出口に向かっていった。部屋から出て行く間際、彼はふと足を止めると青年の方を振り返って微笑を浮かべた。

「これから僕たちが、あなたの話が真実かどうかを確かめてきます」

部屋の扉が閉まり、1人残された青年はしばらくぽかんとしていたのだった。

二章 『彼女は自分の意思を口にする(3)』

宿に戻った2人と1匹は床に座り込んで密談を始めた。

「どう思われますか？」

「反政府軍だなんだっていうのは、あいつの妄想だと思う」

「しかし、あつても不思議ではないですよ。秘密裏に動いているかもしれませんし、政府側の人間が気づいていながらといって、革命軍が存在する可能性が全く無いとは言い切れないと思います」

「それはそうだが、俺の意見としては薬は政府側が使用したんだと思う。だからこそ、フブキを迅速に確保して事実を隠蔽するために奴の賞金額を一気に跳ね上げたんだ」

「なるほど……。それも一理ある意見ですね」

「ね、ねえ」

「ここしばらく会話についてこれていないユキナが、おずおずと手を挙げた。ひなたとハム吉は会話をやめ、彼女に視線を向けた。同時に1人と1匹に見つめられて、ユキナは照れたように下を向いて言葉を続けた。

「つまり、お兄ちゃんは実験体にされたってこと？」

「う……。そういう言い方をすると、あれだが……。あー、政府が薬を作っていたのは確かだし、結構な嚴重な警備体制を敷いていたから何者かに盗まれたとも考えがたい。だから政府側がフブキに試薬を投与したんだろうと思うわけだが。ん、ひなたはどうだ？」

「仮に反政府軍が存在しないならば、その意見に概ね同意ですね。たった1人で旅をしている人間は、格好の獲物と言えますからね。未成品の試薬を投与されたフブキが、それによって別の人間になつてしまった、と言うのは、かなりすっきりした見解だと思います」

「……」

「それに、それが事実ならかなり救われます。フブキを元に戻すこともできるかもしれません」

付け加えるように言われたひなたの言葉にユキナは文字通り飛び上がった。

「本当!?!」

「はい。言うほど簡単ではありませんが、元に戻す薬を作ればいいのではないのでしょうか」

「ま、そうだな。精神的にぶっ壊れたとか、自分の意思であんな風になっっちゃまったっていうよりは、随分救える見込みのある見解だな」

そう言って、ハム吉は伸びをした。ユキナは少し安心したのか、小さく息を吐いた。

「どちらにしても、一刻も早くフブキを探し出す必要がありますね。政府に見つかっても、みかげに見つかっても、きっとフブキは……」

「だ、だめだよ、そんなの!」

ユキナが叫んで、ひなたの服を掴んだ。

「早く、早く行こう、ひなた。お兄ちゃんを捜しに!」

「そうしたいのは山々ですが、まずはこの街を無事に出られるかどうか……」

ひなたは、ちらつと窓の外に目を向けた。

「え?」

ユキナもつられて外を見る。街の人にまぎれて、何人が制服姿が見えた。政府の役人だ。

「だいちとの件とさっきの情報屋との件で、ひなたがここにいて完全にばれたな」

「そうなりますね。かと言っていつまでもここにいるのも危険です」「全くだ」

ひなたはハム吉と早口で言葉を交わすと、立ち上がってユキナに顔を向けた。

「ユキナさん」

彼女の肩に手を置いて彼は真剣な顔で1つの作戦……とは言いがたい考えを告げる。

「僕が囹になりますので、その際に行ってください」

「え？」

「早く」

ひなたに背中を押されて、ユキナは部屋を出ていきそうになるが、どうにか踏ん張って足を止めると、勢いよく振り向いた。

「い、嫌！」

「はい？」

「ひなたと一緒に逃げる！」

「おい、こらユキナ」

ハム吉がひよこつと顔を出して、ユキナをたしなめる。

「今は我儘を言っていていい時間じゃねえ。我儘は助かってからにとっときな」

「いーやだ」

ハム吉の頬を引っ張りながらユキナは拗ねたような顔を見せた。

「だって私は、ひ」

そこまで言つて、ユキナは言葉を詰まらせた。ひなたはきよとんとした顔をして、ユキナを見つめ、ユキナは慌てて顔をそらした。

その頬が朱に染まる。ハム吉が拳を握り「言えっ！」と小さく叫ぶ。

「だ、だ……だって、私は、バイクの運転できないもん」

ハム吉はがつくりとうなだれ、ひなたは苦笑を浮かべた。前者と後者とが違う意味で彼女に呆れたことは想像に難くない。

「それでは、覚悟してくださいね」

「か、覚悟？」

「政府の役人の目の前で僕と一緒に逃走するということは、あなたはこちら側の人間と判断されるということです。フブキの妹であるということとただでさえ政府から注目されているのに、さらに僕の傍にいたということになれば、政府側はどんな手を使ってでもあなたを捕まえようとするでしょう。簡単な話、きつとあなたはすぐさま賞金首になります。下手すると、かなり高額の」

「っ……」

「命がいくつあっても足りない旅路になりますが、その覚悟はおありですか？」

ひなたのやけに真剣な瞳に見つめられて、ユキナは答えることができなかった。

「大丈夫だ」

そんな彼女の代わりにハム吉がはっきりと答えた。

「もしものときは、ひなたが守ってくれる、だろ？」

「あなたという人は……」

「人じゃねえけどな」

にやりと笑ったハム吉を見て、ひなたはため息をつくしかなかった。この状況で軽口を叩けるハム吉を見て、少し落ち着いた、という意味もそのため息には込められていた。

「そうですね。どちらにしろ、フブキを探し出す、という目的は一致していますし、あなたを1人にすると不安なのは疑いようがありません」

ひなたはユキナに顔を向け、それから姿勢を正して口を開いた。

「あなたの意思を聞かせてください」

「わ、私は……」

何者かが宿屋に駆け込んできた音がし、入口の辺りが急に騒がしくなる。足音の数は多い。いずれ、この部屋にやってくるであろう。

「ひなたと一緒にいたい」

それを聞いて、ひなたは小さく笑った。こうまではっきり言われると、少しくすぐったかった。しかし、彼はそんな思いを微塵も見せずに冷静に口を開いた。

「それでは、もう戦略も計画もありません。行きましょう」
ひなたたちが窓から部屋を飛び出したのと、政府の役人たちが部屋に飛び込んできたのは、ほぼ同時だった。

叫び声が聞こえたのは、ほんの一瞬だった。バイクのエンジン音がうるさく鳴り響いたせいで、ひなたたちの耳にはそれ以外の音は一切届かなくなった。ただ、暴走するバイクに轢かれまいと逃げ惑う街人の恐怖に怯える顔は嫌というほど見るようになった。声は聞こえなくとも、叫んでいることはよく分かる。そんな表情を後ろにバイクは駆け抜けていく。

どうやら、彼らを追ってくる政府の役人を率いているのはだいちのようだった。特にやる気を見せるわけでもなく、バイクが徐々に遠ざかっていくのを見ながら、あくびをひとつした。

それから彼はひなた一行を追うのをやめるように指示を出すと、大きく伸びをして翻した。彼の部下と思われる役人たちは不満そうではあったが、上司の指示では逆らうわけにもいかず、だいちの後に続いた。

それが、数年ぶりにひなたの賞金額が上がる日の前日の出来事であった。

余章『ユキナの場合』

「お兄、ちゃん？」

それは確かに兄だった。数年前、旅に出ると言って家を飛び出したつきり音沙汰のなかつた兄。昔は、自分と一緒によく遊んでくれ、自分に危険があつたら真っ先に駆けつけて助けてくれた兄。

しかし、今、目の前にいる兄はそのときとは明らかに別人だった。

両親の返り血を顔に浴びて、呆然としながら少女は彼を見上げていた。

表情のない顔。基本的に家庭内で大事に育てられた彼女は外の事情には疎かった。けれど、両親がこっそり話しているのを聞いて、なんとなく兄がおかしなことに巻き込まれていることには感じていた。

でも、それでも、まさかこんなことになるとは思わなかった。

「ねえ……お兄ちゃん？」

少女が震える声で話しかける。しかし男は表情を変えずに自らの両親を斬りつけた剣をしまった。そして、まるで少女のことなど眼中にないように行動を開始する。

「な、何をするの？」

男はまるでそこにあることが分かっていたかのように手馴れた手つきで引き出しを開けると、そこからマッチを取り出した。

少女の顔から血の気が引いていく。そんなことをされたら

どうなる？

「やめてえ！」

それは無常な叫びだった。しかし、男は迷うことなくマッチを擦ると、それを床に投げ捨てた。1本、また1本と火をつけていく。1つ1つの火は微弱だが、それでもこれだけ多量のマッチが投げ捨てられれば、家1件を燃やすのは容易だった。

燃え盛る家の中、少女は頭を抱えて動けなくなった。目の前の現実を理解しようとしても頭が追いつかない。この先、どうすればよいのが分からない。じつとしてはいけないだろうことはぼんやりと分かっている。けれど、動けない……。

その身体が不意に宙に舞った。彼女がなんでそうなったかを理解したのは、窓から外に放られる瞬間に、男が相変わらずの無表情で自分をじつと見つめていたときだった。

「お兄ちゃんっ！」

男が自分を外に投げたのだ。理由は分からない。助けてくれたのか、それとも別の理由があるのか。

地面に転がって、少女は燃え盛る家を呆然と見つめながら拳をぎゅつと握り締めた。

「おい」

不意に声が聞こえた。声の主は家の傍に止めてあった父親のバイクの座席に座り込んでいた。昔、兄と共にそれで遊んでいて怪我をしたことがあったことを思い出した。思えば、あのときからかもしれなかった。兄が必要以上に自分に気をかけてくれるようになったのは。

「ぼーっとしてる余裕はねえぞ。とにかくここから逃げねえと、ま

ずい

男は燃え盛る家から出てくると、再び、じっと少女を見つめた。そして、剣に手をかけ、そのままぴたりと動かなくなった。

「何だかしらねえが、ありや多分“葛藤”だろ？ あれが、お前の兄貴かどうかを判断するのは後回しだ。今は、あいつの意思をかって逃げるぞ」

「……っ！」

少女はぎりつと歯を噛みならすとバイクに飛び乗った。声の主の姿など、彼女の目には入らない。ただ無表情の兄だけに視線を向け、そして悔しそうに背けた。

「行けっ！ ユキナ！」

バイクが発進する。強い衝撃が身体に走ったが、振り落とされないように何とかハンドルを掴む。そして、それと同時に男が剣を引き抜いた。しかし、足は動かない。まるで意思と身体が切り離されているかのように、上半身だけが小さく暴れた。

そのおかしな状況はバイクの音が小さくなるころまで続いた。やがて、男は剣をしまうと燃えて崩れ落ちた我が家に視線を向け、それから少女が去っていた方向を見据えた。

これまで無表情だった男の顔が少し緩んだことに、もう遠くに走り去った少女は気づかなかった。

ユキナが、ひとりぼっちになった。

余章『ハム吉の場合』

「処分？」

「ああ。奴はもうだめだ」

「しつかり働く優秀な部類だったのに勿体無い」

「しかし、いらん感情をもつと正確性に影響を及ぼす」

「確かに」「同意だ」

「ならば、処分の方向で話を進めてよいのか？」

「そうだな」

「こればかりは仕方ない。そうするほかはない」

（ああ、俺は死ぬんだな）

政府の役人どもが、そんな話を聞いているのを聞いて、彼は淡々とそう思った。彼は政府の諜報部隊として作られた小動物型の機械。政府の駒として生きていくためには持たれると困る感情というものを持ち始めたために、廃棄処分とされることが先ほどの会議で決まったのだ。

そして、彼はそのことについて何の恐怖も抱かなかつた。生み出してくれた彼らが不必要と判断したのだ。もはやなす術はない。それがその瞬間の彼の判断だった。

処分が決まったために、今後新たな仕事を与えられることはない。残りの時間はこの政府本拠地で過ごすことになる。何の感慨もなく、彼は廊下を歩いていった。

と、そんな彼の耳に、ある男の声が響いてきた。別に理由はなか

つたが見つかるとまずいような気がして、彼はそつと陰に身を隠した。

「何を言っている？ 殺してはだめだ。いいか。生きたまま捕らえる。何？ そこを何とかするのが現場の仕事だ。私の部隊にいる以上、むやみに命をとるな。例え、どんな“化け物”が相手であろうと、決して殺すな。生きているものをこちらの判断で無粋に殺すのは、私の正義に反する」

無線か何かで会話をしながら足早に過ぎ去っていく男を見送って、彼は心の隅に小さな灯りがともるのを感じた。

(……生きる、か)

そこで初めて、彼はその選択肢に気づいた。自分の足で、自分の思うように生きたい。それは感情を有し始めた彼にとっては必然的な欲求であった。それはつまり、彼が機械とはかけ離れた存在になったことを示す証拠となったのである。

(それも、ありだよな)

彼は、すぐさま行動に移す。これまで生きてきた世界から飛び出すことに不安はあった。外の世界にはこれまでのように自分を守ってくれるものなどないだろう。自分のような小さな身体で、どこまで生きられるかは分からなかった。けれど、誰かの判断で殺されるのは嫌だった。

彼は先ほど通り過ぎていった最近物凄い速度で出世している若い役人に心の中でお礼を言い、外へ飛び出した。もはや、自分は政府の所有物ではない。それは、嬉しいことであると同時に、寂しいことでもあった。これまで仲間として共に過ごしてきた自分と同じような存在と、もう二度と交わることはない、と理解したからだ。政府のものでなくなった彼を外の世界が受け入れてくれるとは限らな

い。むしろ、人語を話す小動物など奇妙なだけで敬遠されることだろう。

しかし、彼はもう止まらない。止まらない。新しい世界へ、飛び出していく。自分の意思で。

ハム吉が、ひとりぼっちになった。

余章『だいちの場合』

「なんで、なんでだよ……」

少年はおぼつかない足取りで夜道を歩いていた。腹部に傷を負い、今にも気を失いそうだが気力を振り絞って足を進める。

先刻、彼の街は破壊された。信じられない話だが、たったひとりの男によって何もかもを失ったのだ。

~~~~~

ずっと正義の味方に憧れていた彼は果敢にも男に立ち向かった。そして気づかされた。

正義の味方が強いんじゃない。強い人が正義の味方になれるんだと。

少年はなすすべなく、吹っ飛ばされた。そのときに付けられた傷が腹部に残った。これまで感じたことのない痛みが走る。少年は自分にとどめを刺そうとする男の目を見て、身体の震えを止めることができなかった。

力のない自分が、正義の味方にはなれない。



この街を守りたいと思った少年は死を覚悟した。悔しくて、悔しくて、仕方がなかったけれど、もはやどうしようもなかった。

彼には両親がいない。生まれたときから、ひとりだった。けれど、そんな彼に街のみんなは優しくしてくれた。それが嬉しくて、彼は自分も将来は弱い人の味方に、正義の味方になりたいと思ったのだ。そして、それを叶えるときが来たのだと思った。だから、その男に向かつていったのだ。けれど、その思いは叶う間もなく散っていく。

男の剣が迫る。少年は目を閉じ、優しくしてくれた皆に感謝の言葉を唱えた。

しかし、痛みはやってこなかった。不思議に思っただけで目を開けると、目の前には自分を実の息子のように可愛がってくれた飲食店の店主がいた。

「に、げ……る」

店主の後ろには男が立っており、少年は全てを理解した。この人は自分の身体を盾にして助けてくれたのだ。少年はその光景を見て、さらに悔しくなった。もう守ってばかりは嫌だった。自分が、彼らを守るはずだったのに……。

そんな思いを身体から滲み出させながら、店主を切り裂こうとする男を睨みつける。

「力があるくせに、なんで正義ではなく悪を選んだんだよ！」

少年は怒り狂い、叫びながら男に飛び掛った。しかし、男はそれを優雅に交わすと剣を持っていない方の手で少年を掴み、そのまま脇に投げ捨てた。

「に……」

店主がもう一度、少年に向かって「逃げる」と言おうとし、「に」を発したところで息絶えた。「げろ」という言葉の代わりに彼の口からは血が飛び出す。男は店主が死んだことを確認すると、少年の方に顔を向けた。

少年はどうすべきか迷った。迷ったが結局選択肢はひとつしかないことに気づいた。ここで逃げるのは嫌だった。嫌だったけれど、自分の命を呈してまで救ってくれた店主のことを思うと、彼の言葉に従う外はなかった。

だから少年は逃げ出した。腹部からは血が流れている。もちろん痛かった。けれど、彼は走った。ここで死ぬわけにはいかなかった。逃げなければいけなかった。

~~~~~

「なんで……」

自分はどうしようもなく無力だった。正義の味方になりたい、なんて、馬鹿げた夢だった。少年は自嘲気味に薄く笑うと、悔し涙を

流してその場にばたりと倒れこんだ。

馬鹿げたことだとは思ったが、それでも彼はその夢を捨てることはできなかつた。むしろ、この一件が彼の思いをより強くしたといえた。たとえば、自分以外の人間全てが「くだらない夢だ」と笑つたとしても、自分はそれを目指すと決めた。

それが彼に優しくしてくれた、あの街の人たちへの恩返しになると信じて。

絶対に、自分の手であの男を捕まえてやる。

瞼が重い。少年は薄れゆく景色の中でそう思い、意識を失つた。

彼が目を覚ました後、初めて出会う人間が彼の夢を聞いても一切笑わなかつたことが、どれだけ彼を救い、彼の力になつたか。

そのときは彼を含めて誰も知らなかつた。

だいちが、ひとりぼっちになつた。

三章 『彼は1つの計画を企てる(1)』

「フブキの状況がある程度把握したとは言っても、別に居場所が分かったわけじゃないんだよな」

「そうですね。手当たり次第に捜すというのも骨が折れますし、いったいどうしましょうか」

「どうするも何も、やっぱり情報が足りないんだよな」

今、彼らがいるのは小さな森の中であった。街を飛び出して随分長いこと荒野の上でバイクを走らせた後、前方に森が見えたのを確認したひなたは迷うことなくそこに向かった。身を隠したいというのが一番の理由であったが、もしかすると川や湖といった水が確保できる場所があるかもしれない、というのも理由の一つであった。さすがに荒野のど真ん中で一夜を明かすのは危険すぎた。

そして、彼の予想通りその森には小さな滝があり、おかげで水を確保することができた。その場所の傍にテントを張ったひなたは、手際よく水を汲むと食事作りに取り掛かった。

驚くべきことに、彼の持っている荷物はそのほとんどが料理道具であった。「食こそが、人間において最も重要な事柄である」と言い切る彼は、道中、食事を最優先して物事を考える。お金が少ししかなければ、宿をとらずに食材を買うのは彼にとって当然の行為であった。それがたとえ一般の旅人にとっては信じられないくらいにバカな行為であったとしても。

さて、そんなひなたが作る料理は実に美味しかった。湯気の立つスープには、色とりどりの野菜が浮かんでおり、なんととってもその香りが食欲をそそった。先ほどの街で購入していたらしい魚は、網にのせて塩焼きにする。焚き火の音と魚の焼ける音が心地よく響いた。鍋で炊いたお米はふつくと炊きあがり、つやのある白さが際立つ。

「今日はいろいろあって疲れましたし、早めに休みましょう」

ユキナの器におかわりのスープを注ぎながら、ひなたが口を開いた。ユキナもハム吉もその意見には同意のようで、声をそろえて「そうだね」「そうだな」と答えた。

翌日、更なる事態が襲い掛かることを彼らはまだ知らない。

~~~~~

朝。

まず目覚めたのはひなたであった。1つしかないテントはユキナに使ってもらい、自分は大きめの木の下で寝袋を使って眠っていたひなたは、朝日の眩しさに身体を起こすことになった。

顔を洗うと思いのほか、さっぱりした。ひなたは頬を数回叩くと、念入りに刀の手入れをし、朝食作りにとりかかる。包丁の音が朝早い森の中に響き渡った。

「……」

と、突然ひなたはその手を止め、辺りに意識を集中させた。これといって違和感はない。水の落ちる音と、風の音、あるいは鳥の鳴き声くらいしか聞こえない。

しかし、ひなたにはそれが聞こえていた。

彼は包丁を置くと、上着のポケットの中から小形のナイフを取り

出した。息をひそめて近くの茂みに飛び込む。

ザッ、ザッ。

彼の耳に届いたのは、何者かの足音だった。集中して聞かなければ聞き取れないほどの小さな音だった。こんな風に足音を消して“獲物”に近づいてくるのは、略奪者か、あるいは……。

足音が徐々に近づくにつれて、ひなたは集中力を高めていく。勝負は一瞬。相手に気づかれる前に、こちらから仕掛ける。

ザッ、ザッ。

数十メートル付近まで近づいてきたのを確信したひなたは、心中で数を数えた。あと、3秒、2秒、1秒。

「！」

死角から飛び出してきたひなたのナイフをぎりぎりのところでかわした何者かは、しりもちをつく形になった。

「ちよ、ちよつと待った！」

緩急いれずに、その首にナイフを突き刺そうと腕を伸ばしたひなたに驚き、男は大声を上げて彼を制した。

「……何をやっているんですか？」

首にささる数センチ前ほどでぴたりと腕を止めたひなたは、自分が襲い掛かった人物の顔を見て呆気にとられた。

「また会ったな」

ズボンについた汚れをはたきながら立ち上がったのは、だいちであつた。相変わらずの微笑み具合である。

「何か用ですか？」

「水の音がしたもんで……」

「1人ですか？」

「はい」

ひなたはだいちを連れてテントの張つてある場所に歩を進めた。

それから、切り株に腰掛けるように勧めると、自分は朝食作りを再開した。

「昨日の件だがな、全く君も派手にやつてくれたものだ」

「僕はあれだけ派手にできて、久しぶりに興奮しましたよ」

だいちが苦笑を浮かべると、懐から2枚の紙を取り出した。ひなたの予想通り、それは手配書であつた。

「情報屋に自分を売るとは……。君らしいといえば君らしいが、これまでの私の苦労が水の泡になつたじゃないか」

「すみません……」

「とにかくこれで、君も3億越えの仲間入りだ。おめでとう、といふべきか？ そんなことはどうでもいいか。とにかく君の額に関しては数年ぶりの更新だつたということもあり、おかげさまで今朝から新聞屋は大盛況だ」

ひなたはそんないちの言葉を聞き流しながら、まず1枚目に目を通した。見慣れた写真の下には更新された賞金額が書かれていた。その額、3億\$。数年ぶりに2000万\$上がったことになる。

「3億越えは3人目になりますか？」

「そうだ。政府側もいよいよ追い詰められたつてことだ。君もご存知のように、現時点で、フブキ・みかげという高額賞金首が2人もいるもんで、これ以上の賞金首増大、賞金額上昇は、できるだけ避

けなければならぬ事態なんだよ。3億越えが同時期に3人も存在するなんて、我が政府始まって以来の“汚点”だよ」

「汚点、ですか」

「賞金首の数も歴代最高記録を更新中だし、これでは政府の無能さを露呈しているようなものだろ？」

「それは、すみません」

ひなたはさして悪びれた様子もなく謝ると、もう一枚に目を通した。

「そして、問題のもう一枚だ」

そこに写っていたのは、いつのまに撮影したのかユキナの顔写真であった。賞金額も書かれている。その桁は、一、十、百、千、万、十万……。

「彼女はまだ少女といっても良い年齢ですよ？ それに別に何か事件を起こしたわけでもない」

「私もそう主張したさ。だがな、上の奴らの意見は違う。一刻も早く、彼女を捕らえるためには、その額が適当な額であると言いつつた」

「それはそうかもしれませんが。確かにこの額ならば高過ぎず、安過ぎず……。政府に引き渡すために捕まえようと考える人が出てくるのに丁度良い額かもしれませぬ」

「嫌な考え方だけどな」

「そうですね」

記載された賞金額は、2,600万S。賞金首に懸けられている額の平均値とほぼ同等の額であった。しかも、その額がついているのはどこからどう見てもただの少女。お金に困った猛者どもが狙いにきても決しておかしくはない。

「それで、あなたが1人でここに来た本当の理由を聞かせてもらえませんか。さすがに、わざわざ手配書の件を伝えに来ただけではないでしょう？」

「まずは食事をいただくとしよう。久しぶりに君の手料理が食べた



い

「少し寒気のする言い方ですね、それ」

湯が沸き、ひなたはそれをポットに移した。フライパンの上に卵を落とし、塩・こしょうをばらばらと振り掛ける。卵は半熟に仕上げるのがひなたのこだわりであった。

「2、600万は結構やばい額だな」

「起きてたんですか」

「朝っぱらから騒がしかったからな」

ちゃっかりとだいちの隣に座ったハム吉はユキナの手配書をぱんぱんと叩きながら、つまらなさそうに舌打ちした。

「俺、コーヒー、ブラックで」

「生意気な小動物だな」

「うるせえよ」

だいちが眉をひそめ、ハム吉が煙たそうに手を振った。ひなたはハム吉用の小さなカップにコーヒーを注ぐと、それをそつと手渡してやる。

「どうぞ」

「ごーも」

ハム吉は香りを十分に楽しんでから、それを口に運んだ。幸せそうに鼻をひくひくと動かしてコップを脇に置く。

ひなたは皿に乗せた目玉焼きとサラダ。それからいくつかのパンをだいちに差し出し、自分も同じものを持って向かい側の切り株に腰掛けた。

だいちはひなたの作った料理を口に運んで満足げに頷くと、鋭い視線をひなたに向けた。

「では、本題に入るとしよう」

### 三章 『彼は1つの計画を企てる(2)』

「どうやらみかげが政府の本拠地付近に現れたようなんだ」

その一言のせいで、ひなたは思わずせっかく作った朝食を落とすてしまうところだった。

「……え？」

「そこで、私はいかにして彼を確保しようかと考えているわけだ」  
パンをかじりながら、だいちは淡々と続けた。コーヒをすすっていたハム吉も、その動きを止めてだいちに顔を向けた。

「単刀直入に言おう。君に協力してもらいたい」

「と、言いますと？」

不審げに視線を向けるひなたを見つめたまま、だいちは右手を懐に入れる。ひなたの眉がぴくりと動き、そして。

「いい匂いがするー」

ユキナがぼさぼさの髪のままテントから現れた。眠そうに目をこすりながら出てきた彼女は、まだ頭が覚醒していないのか、ふらふらした足取りでひなたの傍にやってきた。

「あ、おはようございます、ユキナさん。そちらで顔を洗ってきてください」

「うん」

ひなたの言葉に素直に従って、ユキナは顔を洗いに向かった。土気をそがれただいちは小さく笑うと朝食の続きに手をかけた。

ひなたもだいちから意識を外すと急いでユキナの朝食作りに取り

掛かった。

これは昨晚気づいたことだが、どうやらユキナは野菜が苦手らしい。特に色の濃い野菜が苦手のようだった。だからといって、ひなたは妥協などしない。例えユキナが嫌いだと喚いても、それを食べさせない、というわけにはいかなかった。好き嫌いを全て無くせ、とは言わない。けれど、せめて減らしてもらいたい。それがひとまずの彼の願いであった。なぜなら、好き嫌いが多くとその分だけ食の楽しみを失っているようで勿体無いと思うからだ。自分と共にいる以上、そこは譲れなかった。変なところで頑固な男なのである。

「君は彼女の世話係か何かになったのか？」

やけに真剣な面持ちで野菜を刻むひなたを見て、だいちはため息混じりにそう言った。

「……そういえば、僕はいったい何をやっているのでしょうかね」

ひなたはだいちに指摘されて初めて自分がユキナのために様々な苦勞を背負っていることに気づいた。これではまるで彼が“お姫様の従者”にでもなったかのようだ。

「君は昔から女性に甘いからな。時に例の」

「ひーなたー。今日のご飯は何？」

「ご覧になってください。もう準備はできていますから」

「分かった」

再び、彼女に間を壊されただいちは諦めたかのように朝食をほおばり、続くはずだった言葉と共に飲み込んだ。

「あれ？ あなたは確か昨日の……」

「だいちです」

「だいちさん」

ユキナはそこでようやくだいちの存在に気づいたのか、ぺこりと挨拶をした。だいちも会釈を返す。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

「ちよつと彼と話があったな」

「ふん」

ユキナはちらつとひなたを見て、それから箸で器用に嫌いな野菜を皿の隅に避けた。

「続きをうかがいましょうか」

そんなユキナの行動を尻目にひなたは自分のコップにコーヒーを注ぎ、それを口に運んだ。あの街の店主が淹れたものと違って、味も香りも申し分ない。

「彼女の前で言っても良いのか？」

「彼女に関する件なんですか？」

質問を質問で返されただいち綺麗に食べ終えた皿をひなたに手渡すと、首を横に振った。

「でしたら構いません」

ひなたは一気にコーヒを喉に流し込むと、だいちに向き直った。ユキナはそんな2人の様子に気をとられて、箸からレタスを落とすことになった。それが彼女の膝付近に当たって、地面に落ちる。

それと同時にだいちが懐から銃を抜きひなたの額に突きつけた。

ひなたは反射的に身体を後ろに倒してそれをかわしたが、だいちは逆にそれを利用して彼の額に空いた方の手をかけると地面に叩き伏せた。

「ひなたっ!!」

ユキナが叫び、倒れたひなたは間髪入れずに跳ね起き、刀を抜こうと腕を動かす。が、すぐさま銃声が響き、ひなたのわき腹付近の服が裂けた。身体には当たっていないが、それで彼の動きは止まることになった。

「みかげの確保に協力してもらいたい」

「それは、先ほど聞きましたが」

刀の鞘に手をかけた姿勢で、ひなたは睨みをきかせた。一方のだいちはそれに全く怯むことなく銃を彼に向けたまま低い声を発した。

「ひなた……いや、蒼風」

誰一人として、その場を動けない。そして、その間を彼の言葉だけが静かに駆け抜けた。

「君を公開処刑する」

#### 四章 『彼女は勇気を振り絞る(1)』

「……はい？」

と言ったか言わないかくらいの時間だった。だいちが銃の矛先をユキナのこめかみに移すと、それをきつく突きつける。

「君を公開処刑にすると言ったんだ」

その目は本気だった。ハム吉は啞然とした顔でだいちを見つめ、そのまま硬直を続けた。

「素直に従わなければ、引き金を引く」

ユキナが不安そうな瞳をひなたに向ける。その顔を見てすっかり諦めたのか、ひなたは刀を地面に置くと両手を挙げた。

「素直で結構」

だいちが銃をユキナから離すと手錠を取り出した。それを見てもひなたは何も言わずにただユキナに向かって微笑みかけるだけ。

「ちょ、だ、だいちさ　だいちっ!!」

しかし、ユキナは黙っていることができなかった。彼女はひなたとだいちの間に入り込み、その前に立ちちはだかる。朝食がのつていた皿が地面に落ちた。ひなたはこんな状況でも「もったいない」と思った自分を笑って、彼女に声をかける。

「ユキナさん」

彼女の頭にひなたは手を置いた。今にも泣き出しそうな顔で見上げられて、ひなたは胸が締め付けられそうになった。

「大丈夫ですから」

「で、でも……しよ、処刑って！」

ひなたはもう一度ユキナに微笑みかけて、それからハム吉に視線を動かした。ハム吉はそれに気づいて、ひなたに視線を合わせる。

そして、同時に小さく頷いた。

「手錠はやめましょう。抵抗する気はありません」  
「そうか」

意外にも、というか、やけに素直にだいちが手錠を引っ込めた。それからにこやかに微笑むと、まるでおどけているかのように両手を軽く挙げた。

「では、行こうか」

「はい」

「ひなたっ!」

ユキナはだいちの後に続いて歩いていくひなたの袖を引っ張った。思わず足を止めたひなたは振り返ってユキナの顔を見つめる。

「約束します」

「え?」

ひなたはユキナの目から零れる涙を指ですくうと、小さく笑い彼女の額に軽く触れた。

「僕は死にません。必ず戻ってきます」

いやに自信たっぷりにそう言うので、ユキナは思わず頷きそうになった。しかし、そんな根拠など一切ないことに気づいて、慌てて落ちかけた首を横に振る。

「……え? で、でも!」

「待っていてください」

そう言っつて、ひなたは再び後ろを向いた。ユキナの目には、もう彼の背中しか見えない。徐々に彼の背が遠ざかっていく。

そして、彼女は悟った。

自分には、彼を助ける力がない、と。

~~~~~

その一報が世に知れ渡ったのは、まさに、“あつ”という間だった。

生存が確認された蒼風ことひなたが、政府に逮捕され本拠地の下刑務所に拘留されることになった。しかも、それだけには止まらず、彼が数日後に公開処刑されることも決まったために、世の中は一瞬のうちに大騒ぎの渦に飲み込まれた。

そして、この一報を聞いて真つ先に動いた男がいた。

男は“偶然”にも本拠地の近くに来ていた。彼が狙う人物の情報を得ようと、本拠地に忍び込もうとしていたのである。そこにきて、ひなた逮捕の一報。男はまず畏を疑った。ひなたが政府の“とある役人”と仲が良いことはよく知っていたし、ひなたは自分を捕まえるための餌としてあてがわれているのではないかと思ったのだ。

だが、畏だとしても、それがいったい何だというのだろう。

よくよく考えてみなくても、彼にとってそれはどちらでも良いこ

とだった。さらに言えば、ひなたが処刑されるとしても別に特段興味のない出来事であった。ここで彼が死のうが知ったこっちゃない。頭ではそう思う。

しかし、男の足はすぐさま政府本拠地に向かうことになる。

男がひなたを救う義理はなかった。確かに義理はなかったのである。つまり、その行動は無意識のうちの、いわば本能のようなものなのであった。

四章 『彼女は勇気を振り絞る(2)』

光が一切差し込まない牢獄の中。ひなたは身体を拘束されることになかったために、床に胡坐をかいていた。うつらうつらとしていくらしく、その頭が定期的に揺れる。

こっつ、こっつ、こっつ。

足音。怖ろしいくらいに静かな牢獄中にその音が反響する。それはひなたの牢獄の前で止まり、続いてがちゃりと鍵を開ける音が聞こえた。

「どんな気分だ？」

「思っていたよりは快適ですね」

「そうか」

だいちには硬いベッドに腰掛けると、首をゆっくりと回した。その手を冷たい壁に当て、深くため息をついた。

「……さて、それでは本題に入ろうか」

「そうしていただけるとありがたいです」

ひなたは大きく伸びをして立ち上がると、腰を回して小さく唸った。刀やナイフ等を没収されたため普段より遥かに身体が軽い。彼は試しにその場で跳ねてみた。普段ないものがないというのは、嫌な不安感を覚えさせるものだった。あるはずの重さがなく、ひなたは不服そうに眉をしかめた。

「みかげが動き出した」

「早いですね」

「ああ。私の予想よりも遥かに早い」

「ここに来ますかね？」

「来る。間違いなく」

だいちには足を組んで、頬を人差し指でとんとんと叩いた。

「それで、手伝つてくれるんだよな？」

「その前に、ひとつ確認したいことがあります」

ひなたはだいちの肩に手を置いて鋭い視線を向けた。だいちはそれに動じることなく、柔らかく微笑んだ。

「どうぞ」

「フブキの変貌の理由は、いったい何ですか？」

乾いた声が監獄の中を駆け抜けた。だいちはひなたの表情を読み取り、軽く唇をかみ締めてから小さく頷いた。

「どうやらある程度予想はついているみたいだな。……それならばつきり言おう。他ならぬ君からの問いだ」

だいちはひなたを身体から話すと、人差し指を立てて言い切った。

「フブキは、政府がある薬の人体実験に使い、結果として暴走した」

ひなたは長く大きいため息をついた。情報屋の青年が語った反政府軍説であつた方が、気だけは楽になつたというものだ。

「政府はこのような大悪党を捕まえておく監獄において、手の付けられない奴らに手を焼いていた。そこで心をなくす薬を作るというあまりにも非人道的な計画を立て、その研究を数十年間続けた。薬の開発と動物実験を何年も続けた後、とうとう数年前に試作品を人間に投与することを決定したんだ」

ひなたは額に手を当てて目を閉じた。大方、先の予想はついた。

「被験者は囚人から選ぶことになった。できるだけ、年齢・性別・体格などがばらばらになるように選出した結果、その中の1人にフブキ選ばれたというわけだ」

「ちよつと待つてください」

話しの中に気になる点があり、ひなたは目を開けた。

「フブキは捕まっていたんですか？」

「ああ。詳しくは分からないが、どうやら何らかの事件に巻き込まれていたみたいだな。彼自身が犯行を行ったかどうかは定かではない。冤罪であった可能性も否定はしない。けれど、彼は“偶然”そこにいて、“偶然”被験者に選ばれた。ちなみに彼は当時、最年少の囚人だった」

ここで一旦、二人の間に沈黙が流れた。ひなたはうなだれたまま、床に座り込んだ。声を発する気にはならなかった。

「実験は燦々たるものだった。フブキ以外の被験者は死亡。唯一生き残ったフブキも精神を錯乱し、手を付けられない状態になった。その後、彼を取り押さえようと奮闘した研究者や政府役人はほぼ全員が殺され、フブキはそのまま逃走していった」

「それで政府はその事実を隠蔽し、フブキを凶悪犯としてその首に賞金を懸けた、と」

やるせなくそう言ったひなたは瞳をぎらぎらと光らせ、だいちに食って掛かった。

「つまりは、だ。全ての元凶は、お前らじゃねえか」

がらつと口調を変えたひなたは、だいちの胸倉を力いっぱい掴む。だいちはいたって冷静に首を縦に振った。

「そうなるな」

「そうなるな、じゃねえよ」

言い終わらないうちにひなたは彼の頬を思い切り殴りつけた。だいちベッドに倒れ、身体を強く打ちつけた。

「お前、それを知ってずっと黙ってたのか？」

「君に教える理由がない」

「何？」

「これを話せば、確実に君を敵に回すだろうことは決まりきっていたからな」

だいちは無然と起き上がるとひなたの肩をつかんだ。

「当たり前だろうが。それを聞いて僕がお前らに手を貸す理由はない」

「しかし、君は断らない」

だいちはそのままだひなたの頬を殴ると彼を床に押し倒した。

「君が断れば、フブキの妹は死ぬことになる」

「どこまでも外道だな」

ひなたは跳ね起きるとだいちの腹を蹴飛ばした。だいちはうめき声を上げて壁にぶち当たる。続けて、ひなたは彼の頭を掴んでそのままベッドに叩きつけた。ベッドが物凄い音を上げて真つ二つに折れた。

「お前の目指した正義は、そんなもんなのかよ！」

顔から血を流すだいちの頭を持ち上げて、ひなたは堪えきれない怒りを含めて言った。彼の言葉にだいちは目を伏せた。

あくまで冷静を貫いていただいちの瞳がその言葉によって小さくぶれ、苦しそくに顔を歪める。そして、搾り出すような声が独房内に響いた。

「……………それは、違う」

四章 『彼女は勇気を振り絞る(3)』

「私が……俺が目指す正義は、ここにはなかった!」

「あ?」

「上層部は腐ってる」

「だったら、何で」

「今の俺じゃ、何もできないんだよ!」

「だいちが叫んで、ひなたの襟元を強くつかんだ。ひなたはそんな彼の手首を掴んで、それを引き離す。」

「小さい部隊を動かせるくらいの権限しかない俺じゃ、何もできない。だから、俺はもつと偉くなる。俺が上に行つて、政府を変えてやる。そつからがスタートだと思つてる」

「何そんな悠長なこと言つてんだよ。政府の役人なんてとつとやめちまえば良いだろうが!」

「そうはいかない。だって、これが俺の夢なんだ。例え中枢がどれだけ腐つても、俺は腐らない。政府の役人となって悪党どもを残らず捕まえる。それが、俺の夢なんだ。何人も殺してきたお前みたいな悪党に説教される筋合いはない」

「確かに僕は悪党だ。カゲもそうだ! だから何だ? フブキの原因がお前らにあるなら、僕たちの中に悪を生み出したのは、全部正義を掲げた政府だろ?」

頭が熱した二人の喧嘩は止まらない。とうとう取っ組み合いになり、狭い監獄の中で二人の男が暴れまわる。

「お前は何も分かつてない。俺が何のために政府に入ったか。何でここでこんなに苦しんでるのか!」

「分かんねえよ。お前が“正義の味方”になりたかつたことは知つてるし、だからこそ僕は、お前が僕らと違う道を行くことを止めはしなかつた。でも、結局その政府に正義なんて」

ひなたの腹部に重い一撃が入つた。彼はうめき声を漏らすことも

できずに、壁にぶち当たった。だいちが肩で息をしながら彼に近づき、腰から崩れ落ちたひなたの顔を力いっぱい蹴飛ばした。血が、床を汚す。

「これは、恩返しのもりなんだよ」

「……は？」

拳を握り締めて身体を震わすだいちを見上げて、ひなたは間の抜けた声を上げた。その顔は腫れ上がっており、見ているこつちが痛いくらいだ。

「俺は、お前らに救われた。だから、俺はいつか必ずお前らの助けになりたいと思った」

ひなたは口を拭った。手の甲が赤に染まる。唇が切れたのか口の中が切れたのか分からないが、とにかくかなりの血が出ているらしい。

「そりゃ、もちろん、最初のうちは政府といえば絶対的に正義だと信じていたさ。お前らに語ったように、役人になって自分の信じた道だけ進めると思った。俺は確かに“正義の味方”になりたくて政府に入ったんだ。だけど、長くいればいるほど見えたくない部分つてのが見えてきた。正直、何度もやめたいと思った。理想と違う現実に耐え切れなくて、俺が政府に抱いていたものはただの幻想だということ突きつけられて……。でも、俺はやめなかった。もし、俺がお前らと出会っていなければ、きつとやめていたと思う。お前らのおかげで政府の役人として生きたいと思える理由がもうひとつできたんだよ。ただ単純に政府にいれば全てがうまくいくと思ってたわけじゃない。お前らが裏の世界で生きるなら、表の世界で生きる人材が必要だと思ったんだ。政府の地位や情報が、お前らの仇を討つ手助けになればよいと思った。最初の意思が消えるにつれて、その思いは一層強まった。俺が政府にいる理由は、お前らからもらった恩を返すためなんだよ。俺は、お前らの助けになりたい。今の俺にあるのはそれだけだ」

一気に放たれたそれを聞いて、ひなたはなんともいえない気持ち

になった。そこまで言われてだいちを責める資格が自分にはない。けれど、ふつふつとこみ上げてくる怒りがあることも否めない。

「もう充分、返してもらった」

しかし、沸きあがった怒りはだいちの姿を見て掻き消えた。ひなたは立ち上がると、彼の頭に手を載せた。

「お前が政府の人間だったおかげで、僕もカゲも、随分と助けられた」

だいちの頭をなで、それから、彼の頭を自らの胸に引き寄せる。政府の役人になってからは、いつも毅然としていた彼の泣き顔を、ひなたは見た。

「だから、もういい。それに、俺は言ったはずだ。お前の好きにすればよい、と。今、お前が苦しいと思うなら、やめちまえ。よくやったよ」

いつかのように、ひなたは彼の背中を軽くたたいてやった。だいちの口から嗚咽が漏れる。

「そこまで言われて、お前の頼みを断れるわけないだろ」

だいちは、ずっとひなたから離れると袖で乱暴に涙を拭いた。ひなたは血だらけの顔に笑みを浮かべた。

「カゲはお前の恩に仇を返す形になってしまった。どっちにしろ、僕もカゲに用がある。ここは、お前の正義に従おう」

外は、真夜中。さらにここは監獄。闇の中の、そのまた闇の中。ボロボロの身体で向かい合う二人の耳に、静寂が

訪れなかった。

いきなりうるさい音が鳴り響いた。どうやら警報機が鳴り響いたようだ。どたどたという足音が聞こえて、何者かがやってくる音がした。

「だいちさん！ いますかっ！？ 侵入者です！」

やってきたのはだいちの部下のようだった。だいちは、やれやれ、といった風に肩をすくめると、ひなたの独房から出ようとする。

「だいち」

それをひなたが呼び止め、だいちが振り返る。ひなたはにやっと笑って口を開いた。

「もしも、うちのお姫様ならば手を出さないでくださいよ」

元の口調に戻ったひなたを呆けたように見て、だいちは力を抜いて笑った。

「私は私の正義に従うのみだ」

「僕は、あなたを信じていますから」

間髪いれずにそう言ったひなたの顔を呆けたように見つめてから、だいちは苦笑いを浮かべた。

「なんだ、そのずるい一言は」

「あなたのところの“小動物”からの請負です」

小動物、という単語を聞いてだいちは頭に、あのハムスターを思い浮かべた。

「やはり、あれは政府の……」

人語を話す小動物など、政府には山ほどいた。中には廃棄されたものや脱走したものもいると聞く。何かの拍子に、ひなたやユキナといった人間たちと一緒にいても不思議ではない。

「とりあえず、いつてくる」

「お気をつけて」

ガシャン、という音がして、ひなたの独房の扉がしまった。

鍵は、かかっていない。

四章 『彼女は勇気を振り絞る(4)』

時は少し遡る。

「で、どうする？」

だいちとひなたが去った後、取り残されたユキナは放心状態で座り込んでいた。ハム吉の問いにもしばらく答えずに空を仰いだ後、感情のない声で静かに言った。

「どうするって、私には何もできないよ」

「ま、そうだな」

ハム吉には彼女を慰める気などないようで、びしっとそう言い切ると切り株の上に寝転がった。

「気が変わったら、呼んでくれ」

そう告げてハム吉は寝息を立て始めた。こんな状況で能天気にも眠っていられる神経を疑うが、ユキナはそんな思いを打ち消して、顔を膝の間に埋めた。

「……気が変わったらって」

自分ではどうしようもない。それ以外の結論は出せなかった。いっただったか、ハム吉に言われた通りだと思った。バイクに乗れないだけならまだしも、と思う。旅に出ているというのに、自分は戦う術を何一つ持っていないかった。体術なんて使ったこともないし、ナイフや銃といった武器なんて触ったことすらない。そもそも、料理すらしたことがないため刃物どころか包丁でさえ握ったことがないのだ。

彼女は自分の手のひらを広げてみた。ひなたと違って、なんて小さな手だろう。これでは、つかめる物もたかが知れている気がした。彼は自分の手を掴んでくれた。でも、自分は……。

そこまで考えて、ユキナは自分がみじめで仕方がなくなった。さらに、またも自分が“ひとりぼっち”になったという事実が彼女を追い詰めていた。

「ひなた……」

返事は、ない。それでも、彼女は何かの呪文のようにその名前を呼び続けた。そうすることで何かが変わるわけではない。そんなことは、彼女も重々承知していた。

「おい、お姫様よ」

唐突に声をかけられた。肘を突いた横暴な姿勢で眠っていたはずのハム吉がユキナをじっと見つめていた。

「うじうじ悩んでる暇があったら動けよ。いいか、ユキナ。お前は確かにお姫様だが、何もできないわけじゃない。何もやってこなかっただけだ」

ハム吉はゆっくりと起き上がると胸を張って立ち上がった。身体は小さいが存在感だけは圧倒的だ。

「お前はあの街を出るときになんて言った？」

街を出たとき……。そのときのことを思い出して、ユキナは口を開いた。

「ひなたと……一緒に、いたい」

それを聞いてハム吉がにやっと笑った。

「お前が“行く”と一言言えば、俺はどこへでも付き合っぜ」

それがとどめになった。ユキナはすっと立ち上がると、ハム吉の額を小突いた。

「行く」

「よしてきた」

と、今にも駆け出しそうになったユキナを見て、ハム吉が慌てて声を掛ける。

「ちょ、ちよっと待て！」

「何？ 悩んでる暇なんてないって言ったのはハム吉だよ」

「そりゃそうだが、何の策もなしに言ってもつかまるだけだ」

「じゃ、どうすればいいの？」

じっとしていられなくてうずうずしているユキナを前にハム吉は首を左右に振って、ため息をつく。

「いいか、ユキナ。重要なのは作戦だ。俺の案を聞け」

かくして、1人の少女と1匹の小動物による、ひなた奪還計画が進められたのである。

~~~~~

「状況は？」

駆け足気味に進みながら、だいちが部下に訊ねた。見た目はそれほど焦っているようには見えない。

「はっ。侵入者は1名とのことです」

「1人が……」

「はい。それも例の少女のようで  
なるほど」

ひなたの言うとおり“姫”がやってきたようだ、とだいちは思った。と同時に、彼の言葉を思い出す。

『もしも、うちのお姫様ならば手を出さないでくださいよ』

だいちには苦笑を浮かべ、怪我をさせずに捕らえるのが良いだろうが、それとも、うまく逃がすべきか、などと考えながら現場へと向かう。その手には、一丁の拳銃。

「とにかく、私が着くまでは彼女に危害を加えないように……そうだな。適当に泳がせておくように指示を出していてくれ」

「了解しました」

#### 四章 『彼女は勇気を振り絞る(5)』

「……」

おかしい、とは思っていた。元々この政府本拠地で暮らしていたらしいハム吉の指示で、侵入は容易にできた。けれどその後、すぐに警報機が鳴ったことから自分が侵入していることは完璧に気づかれているはずだ。しかし、それにしては自分を追ってくる人間が少ない気がした。しかも、発見されても発砲もされなければ、取り押さえられもしない。どこかに連絡を入れ、目の前から消えていく。

これは、いったいどういうことなのだろう……。

「むっ」

前方から足音が聞こえユキナは壁の後ろに身を隠した。自分はナイフも銃も使えない。唯一持っている武器といえば、ハム吉がこしらえてくれた“これ”だけだ。ユキナは腰に吊るしたそれに軽く触れると、祈るように彼の名前をつぶやいた。

「ひなた……」

足音がユキナの隠れる壁の前方で止まった。音の数から推測するに、そこにいるのは数人といったところだ。飛び出すと同時に、これを投げつけよう。ユキナはそう決断した。

「ユキナさん、かな？」

が、それを実行する前に声がした。最近、どこかで聞いたような声だった。

「出てこないなら、こっちから行っても良いか？」

思い当たった。この声は、だいちだ。自分を保護すると言い、そして、ひなたを処刑すると言った、あの男だ。ユキナはきつく唇をかみ締めると、意を決して飛び出した。

「こんばんは」

言いながら、だいちは驚いた。少しは武装してきているかと予想していたのだが、彼女は全くの丸腰だったのだ。いや、正確には腰

の辺りに妙なものを用意しているのには気づいていたが、それが彼らを脅かすほどのものではないことを理解していたために、だいちが彼女が丸腰だ、と判断したのだ。

それよりも、だいちにとつて印象的だったのは、彼女の足はがくがくと震えており、抵抗できないので捕まえてください、と言っているようにしか思えなかったことだ。

だいちが緊張を解くと構えていた拳銃をゆっくりとおろした。

「ひなたは、どこだ？」

ユキナは勇気を振り絞つて、そう発した。声は震えていた。それはユキナ自身はもちろんのこと、彼女の前に立つだいち及びその数名の部下たちも気づいていた。

彼女は明らかに恐怖で震えていた。

「それは教えられない」

だいちが首を横に振り、一歩足を踏み出した。そして腕を伸ばして彼女を掴もうとした、そのとき、

「ユキナっ！ 行けっ！」

遙か後方から大音量の叫び声が聞こえた。それを合図にユキナが何かを地面に投げつけた。

その何かが地面にぶつかった瞬間、辺りを白いもやが包み込んだ。「やはり煙玉か」

だいちに至つて冷静にそう言うと、煙の中を移動していく影を目で追った。部下たちは動揺を隠せないらしく、辺りをきよるきよるとしている。

「この程度では私を撒くことなど……」

だいちがすぐさまユキナの後を追おうとしたときだった。どこからか、何かのうめき声のようなものが聞こえた。いや、うめき声というのは少しおかしな表現かもしれない。何十人も人間の声が轟いたのである。



「これは、まさか」

だいちは無言でユキナを追う足を止め、その声に集中した。何か  
がここで暴れまわっているようだ。そして、ハム吉が姿を現した方  
向にいったい何があったかに思い当たり悪態をついた。

「やられましたね」

だいちは無言で手に、部下に指示を与えると自分はユキナの後を  
追った。

煙はようやくやく消え始めていた。

~~~~~

「確か、この監獄は脱獄の危険性を考えて、最も脱走が困難と思
われる最下部から順に重要な凶悪犯を拘留しているはずだ。という
ことは、だ。ひなたを本気で公開処刑にする気なら、多分」

「一番下にいるってこと!？」

「ああ、そうなるだろう」

「それじゃあ行ってみよう」

階段を駆け下りながらユキナとハム吉は会話を続けた。煙玉くら
いでしのげる相手とは思っていない。

だから、とにかく足を止めるわけにはいかなかった。家の中で大
事に育てられたユキナは体力に自信などなかったが、それでも懸命
に駆けた。足は既にちぎれそうだった。

「あれ? ここで階段がなくなってるけど」

「別の場所につきがあるはずだ。階段の場所を分散することで、脱
走者や俺たちみたいな侵入者を迷わせたんだろ。ちっ、なめんな

よ。いいか、とにかく俺の言葉に従え。その通路を突っ切れ！」

ハム吉の指示でユキナは通路に飛び出した。細い通路で、横に部屋などない。階段と階段とをつなぐただの通路のようだった。

前方の左に開けた場所があるようだった。あの空間の大きさからいって、そこに階段がある可能性が高いと思ったユキナは、スピードを緩めずに、一気に左に、

「さすがは元政府の諜報部隊。油断していた。まだまだ未熟だと痛感したよ」

いつの間に追い抜いたのか、階段の前に立っていただいちにユキナは思い切りぶつかって後ろに跳ね跳んだ。

「隠し通路くらいある」

驚いた顔のユキナと腹立たしそうに顔をしかめるハム吉を交互に見てから、だいちはそう言った。そして、にこやかな微笑みをその顔に貼り付けたまま拳銃を向ける。

「ど、どどどどどうしよう？ ハム吉！」

「落ち着け、とにかく落ち着け！」

ユキナは動転してハム吉の頭をばんばんと叩く。一方のハム吉はあくまで冷静に今の状況を分析していた。とにかく、時間が欲しい。考える時間が欲しかった。

「その顔、どうした？」

そこで、ひとつの問いかけをした。だいちの顔が腫れていることに純粹に疑問をもっていたこともあって、ハム吉は時間稼ぎのためにそれを訊ねたのだ。

しかしハム吉の思惑は裏切られる。だいちは薄く笑って、それを無視した。

「悠長に話している時間がないことは理解しているな？ 全く、ただでさえ忙しいのに無駄な仕事を増やしてくれたもんだ」

ハム吉は舌打ちしたい気になったが、わざわざ蒸し返すこともせず、相手の神経を逆なでするような声で言う。からかうような、蔑むような声。

「脱獄囚のやつらはうまくやってんのか？」

「そうだな。どうやら随分とてこずらされているようだ」

先ほど聞こえた声は脱獄囚たちの声だったのだ。この地下刑務所に侵入したユキナとハム吉は、まず二手に分かれた。ハム吉は何箇所にも分散された監獄のうちのいくつかの鍵を開けてやり、囚人たちを脱走させたのだ。監獄の鍵のありかについては、元政府の諜報部員であるハム吉はもちろん知っていたし、その身体の大きさから看守に気づかれずに鍵を奪うこともたやすかった。

計画では、その混乱に乗じてひなたを救出できれば万々歳だったのだが、やはり、そううまくはいかないようだ。

「とにかく、今の私の仕事は君たちを確保することなので、覚悟してもらおうでしょう」

「くそっ」

言った瞬間、銃声が鳴りハム吉の身体が吹っ飛んだ。ユキナの目に、それはスローモーションのように写る。宙を舞ったハム吉は、そのまま後方の壁にぶち当たり地面に落ちた。

「え？」

ユキナは目を見開いてハム吉に近づく。ぴくりとも動かないハム吉を見下ろして、唇わなわなと震わせた。

「何、した？」

冷たい声がだいちの耳に飛び込んだ。彼を見据えたその瞳は、先ほどまでの少女のものとは明らかに異なっていた。その奥底にある熱い光に、だいちは唾を飲んだ。

「うああああああああ！」

その叫び声は空気を奮わせた。そのせいで引き金を引くのが1秒ほど遅れた。そのわずかな時間でユキナががむしゃらに放った拳がだいちの頬をかすめた。ぴりっとした痛みが走り、続け様に銃声が鳴った。

どさりと床に倒れるユキナを見て、だいちは頬に手を触れた。血が出ているということはないようだった。それからユキナをひよいと担ぐと、ハム吉を自分のポケットの中に入れる。

「だいちさん、だいちさん」

と、無線から声が聞こえた。脱獄囚を捕獲している部隊からの連絡のようだった。

「どうした？」

「こちらは大方片付きました。そちらはどうですか？」

「こっちも今終わった。この子の処理が終わり次第、そっちと合流する。君たちは残りの脱走囚の捕獲に全力を注いでくれ」

分かりました。という声が聞こえて、無線は途切れた。だいちは、はぁ、とため息をつくと、困ったように首を横にひねった。

「さて、どうしたもんか……」

五章 『彼女は彼の名を呼び続ける(1)』

昨夜の喧騒が嘘であるかのような静かな朝だった。いつの間に眠っていたのか、ひなたは硬いベッドの上で目を覚ました。昨晩だいちに殴られた場所が痛むが、それは仕方がない。お互い様、といったところだろう。

あれからだいちの姿は見えていない。侵入者がいつたい誰で、どうなったのか。それから、みかげの動きはどうなのか。

気になることはいろいろあつたが、とにかく今はじっとしているべきだと思った。だいちが鍵を開けておいてくれていたし、こちらから動こうと思えばいつでも動けた。だからその余裕ともいえるひなたは大きくあくびをすると、軽く身体を動かし始めた。

しばらく身体を動かしてうつすらと汗をかき始めたころ、足音が近づいてくるのに気づいた。ひなたは運動をやめるとベッドに落ちるように腰掛ける。

足音の主は予想通りというべきか彼しかいないだろうというべきか、だいちであり、彼は開口一番ひなたに助力を求めた。

「出番だな」

「みかげが来たんですか？」

「まもなく、だと思う。とにかく、公開処刑場に向かうでしょう」

ひなたはすつと立ち上がると、だいちの肩に手を置いた。その瞳は嘘やごまかしは許さない、と言っている。

「侵入者はどうなりました？」

「ご安心を、とだけ言っておく」

疑るようになだいちの顔を見つめたひなたは何も言わずに独房の外に出た。今、この件について彼に何か言ったところで無意味であると思つたからだ。ひとまず、みかげの確保が最優先だ、とだいちの顔は物語っていた。

「では、行こうか。困つたものなんだが、物好きな見物人がたくさ

んいる」

「光荣ですね」

ひなたの公開処刑まであと数時間。

何の“問題”も“策略”もなければ、まもなく3億の首が飛ぶ。

~~~~~

処刑場はやや高い場所に設置されており、そこからの景色は圧巻だった。政府の役人や民間人も大勢集まっている。ひなたはその光景を見て、公開処刑というのをお祭りか何かと勘違いしているんじゃないか、と両手を縛られ首を固定された体勢のまま考えた。

処刑人はだいち。どうやら刀で首をすばっと切り落としてくれるらしい。すばつといけば良いが、そうでなければ無駄に痛いこと請け合いなやり方だった。

「見覚えのある刀ですね」

ひなたがそう言うのも最もで、だいちが握っている刀はひなたの愛刀であった。だからこそ、だいちはそれを聞いて小さく笑った。

「自分の刀で最後を迎えるというのが一番かと思ひまして。それに君の刀はよく手入れされていますし」

ひなたは苦笑いを浮かべた。確かに、これで斬られれば先ほど頭に浮かんだような心配はいらないと思えた。

それは綺麗に首が飛ぶことだろう。

処刑場の中心にいるひなたはそう考えた後、首を動かせる範囲で

辺りを見回した。横にはだいちが立っていて、後方には役人が2人ほどいるらしい。周りは見物人が近づかないように役人が取り囲んでいるが、彼らは見物人の警備というよりはひなたが暴れたり逃げ出したりしないように警備しているといった感じだった。これだけ嚴重ならば、死刑囚はここに来れば死を覚悟するだろうな、とひなたは思った。

「これより、蒼風、もとい、ひなたの公開処刑を実施する」

鼓膜をつんざくような大歓声が鳴り響いた。これを見ると、自分が世間にどう認識されているのかがよく分かり、ひなたは仕方がないこととは言え寂しそうな顔になった。

「最期に何か言い残したことはないか？」

だいちが意味ありげな視線を向けた。その額につつすらと汗が浮かんでいるのを見て、ひなたは意図を理解した。

みかげがまだ現れていないのだ。

このままでは、ひなたを本当に処刑することになってしまう。今はみかげが来るまでの時間稼ぎ、と言うわけだ。

「おい、だいち。何を悠長なことを言っておる。さっさとやれ」

そう言ったのは、処刑場の傍に設けられた特別席でひなたの処刑の様子を観察している老人だった。その周りには、ひなたを取り囲んでいる以上の人数の役人がいた。どうやら彼を嚴重に警護しているらしい。ひなたはそんな彼の顔に見覚えがあった。記憶が正しければ現在の政府の頂点に立つ男のはずだ。自分の処刑はそんな大物

が見に来るくらい価値があるのか、と思い、ひなたは含み笑いをした。

「しかし総裁。悪人とはいえ、人間です。最期するときくらい、ある程度の時間を与えても問題はないかと思いますが……」

だいちが努めてゆっくりとそう言った。あからさまな時間稼ぎだ。ひなたはその滑稽な“芝居”に思わず噴出しそうになるのを何とか堪える。そして、自分のやるべきことを理解し、気合を入れ直した。「だがな……」

「黙れ、じじい」

ひなたは、できるだけ悪役っぽく重い声で老人に睨みをきかせた。しかし、老人はひるみもせず、ぎろりとひなたをにらみ返す。総裁ともなれば、やはりいくつもの至難や修羅場を越えているのだろう。ちよつとやそつとでは動じない、といった心情が彼の身体中からあふれ出しているように見えた。

「言葉遣いには気をつけろよ、ガキが」  
「けっ」

ひなたは目玉をぎろりと動かして、見物人を凝視した。見物人の中には悲鳴をあげるものや後ずさるものもいた。

「では改めて、何か言いたいことはないか？」

だいちの問いに、ひなたは長く、長く息をはいて前方を見据えた。彼の髪を風が揺らす。風の音が聞こえる。

何かが近づいてくるのを知らせてくれる。



ひなたはだいちに視線を向けた。だいちもひなたの目を見た。そして、ひなたは腹の底から大声をはき出した。

「死にたくなきゃ、この場から逃げろっ！」

それは、いったい誰に向けた言葉だったのだろうか。その迫力に、本当に逃げ出そうとした人間もいたが、だいちが刀を上には振り上げたのを見てそれを思いとどまる。

「みかげっ!!」

ひなたは叫んだ。刀が振り下ろされる。歓声上がり、歴史的瞬間を目の当たりに

「ひなたあ!!」

する前に歓声が悲鳴に変わった。銃声は何発も鳴り響き、見物人の何人かが倒れ、だいちが振り下ろそうとした刀を小さなナイフが受け止めた。

「やっぱり罠か……こりゃ？」

だいちとひなたの表情を見て、みかげは心底嬉しそうに笑った。だいちは手際よくひなたの捕縛を解くと、彼に刀を投げ渡した。

「久しぶりだな」

いきなりの“極悪人”の登場に見物人は逃げ出したり喚いたり大忙しだった。呆けていた総裁も勢い良く立ち上がると、だいちに向かつて声を張り上げた。

「何をやっとするか、貴様は！」

そう言った矢先に一発の銃声が轟く。それは総裁の額に当たり、彼は後ろにはたりと倒れた。

「少し黙っていてください、総裁」

撃つたのはだいちだった。みかげは愉快そうに笑うと見物人の渦に飛び込んでいく。

「麻醉銃、ですか」

「そうだ。まずは舞台を整えないとまずい。みかげも止めないとな」

「そうですね。では、みかげは僕が引き受けます。あなたは皆さんを安全な場所へ」

「分かった」

ひなたはみかげの後を追い、だいちが総裁に一応頭を下げる方向を見た。しかし、総裁はいち早く移動させられたらしく、既にそこに姿はなかったため、彼は総裁に会うのを諦めて部下たちに指示を出しに向かう。部下たちは急な展開に困惑を隠せないらしく、焦った声でだいちに声をかけた。

「どういうことですか、だいちさん。これは、いったい……」

「理由は後で話す。とにかく今は、この場をひなたとみかげ、それ

から私だけにしてもらいたい」

「え？ し、しかし」

「早くしなければ、無駄な血が流れることになるぞ」

指示を受けた部下たちは、しぶしぶながらも見物人を安全な場所に向かわせるために動き始めた。既にあちこちで悲鳴が上がっている。

「さて……」

見物人の間でひなたとみかげが戦っている姿を確認しただいちは、とにかく民間人を保護するために行動を開始した。

みかげがいきなり発砲してきたのは、ある程度予想の範囲内だった。できれば、一滴の血も流さずにみかげを捕らえられれば良いと思っていたが、やはりそれは無謀というものだった。誰かの犠牲の上に成り立つ正義というのは、だいちの目指すものではなかった。

しかし、現実には幾らかの犠牲は止むを得ない。理想ばかり語る子ども時代はとづくに通過した。だが、現時点で数人の犠牲者が出たことに対してはどうしても悔しさを隠し切れなかった。ただ、今はどうこう言っている状況ではない。だいちは、みかげに撃たれた者が死んでいないことを祈りつつ、混乱の渦に飛び込んでいった。「やはり理想は幻想に過ぎないか……。全く理想どおりに動かすのは難しい」

そうつぶやいた彼の声を聞いたものは、誰もいなかった。

## 五章 『彼女は彼の名を呼び続ける(2)』

「おい、起きろ、ユキナ」

「んん……」

彼女が目覚めたのは、とある部屋だった。部屋というよりは倉庫だろうか、たくさんの箱や道具、あるいは古い武器といった類のものが乱雑に置かれている。上の方に1つの小さな窓がついており、それがあるお陰で真っ暗というわけではなかった。

ハム吉は丁寧に寝かせられたユキナの頬を叩き反応があることを確認すると安堵のため息をついた。

「あれ……？ ハム、吉？ 私たち撃たれたんじゃ？」

「どうやらあれは麻酔銃だったようだな」

「麻酔銃？」

「ああ。だいちの野郎が何考えてんのかはわかんねえが、ぼーっとしている場合じゃなさそうだぜ？」

そう言っただけでハム吉は窓を指差した。ユキナは、くらくらする頭を抱えて立ち上がると、窓に歩を進めた。しかし、身長が足らずに外を見ることができない。背伸びをしてもだめだと悟ったユキナは近くの箱を積み重ねて簡易の階段を作ると、それにのぼり外の様子をうかがった。

「誰、あれ？」

外の光景を見てユキナは目を丸くした。そこには、ひなたとそれから髪を真っ赤に染めた男がいた。

「あれがみかげだ。手配書は見ただろ？」

「あ、あれがそうなの？」

「ああ」

「へえ……」

ユキナの見限り、どうやらひなたとみかげが戦っているらしい。いったい、公開処刑はどうなったのだろうか。そう思って、

だいちの姿を捜すが、どこにも見当たらない。それどころか、その場には2人以外の人間が誰もいないように見えた。

「ま、お前が見たとおり、ひなたはまだ無事だ。なんで奴らが戦つてるのかはなんとも言えないが、とりあえずどうする?」

ハム吉の問いかけには答えず、ユキナは箱の階段を飛び降りた。

それから、倉庫に置かれた武器の物色を開始する。錆びたナイフや、銃。短刀や長刀もあつた。

「お前、何する気だよ」

「行く」

「何ができる?」

「わかんない」

ユキナの目に留まつたのは真つ白な柄を持つ短刀だった。ここにあるのは場違いなくらいに丁寧に手入れされているようで、ほころびもない。この短刀だけが倉庫の中で異質のものといえた。

「断言してもいい。あんなところに行ったら、お前死ぬぞ」

「死なない」

「おい、ユキナ」

短刀を両手に抱えて、すつと立ち上がったユキナは瞳を燃やしてハム吉を見下ろした。

「行く」

そのまま倉庫を飛び出たところで、何者かに襟首を掴まれた。きやつ、と女の子らしい悲鳴を挙げて、ユキナは後方に倒れた。

「どこへ行くつもりだ?」

「……だいち」

そこに立っていたのはだいちであった。ユキナは苦虫を噛み潰したような顔をして立ち上がると、彼の脇を通り過ぎようとする。そして、再び彼に襟首を掴まれた。

「その手を離せよ」

「そついうわけにはいかない」

ハム吉が倉庫から出てきて、だいちの足元に立った。彼はそれを

一瞥すると、ユキナが強く握っている短刀を奪い取る。彼女の口から、あ、という声が漏れた。

「君を傷つけるわけにはいかないので、ご同行願いたい」

「どういうことだ？」

だいちを睨んだまま口をつぐんだユキナに代わってハム吉が訊ねた。

「君たちの安全は保証する。それが、彼との約束だ」

~~~~~

「要は、負けた方が死ぬってことだな」

「簡単に言えば、そうなりますかね」

政府側の迅速な行動で、今、2人の周りには誰1人いなくなった。とは言っても、かなり離れた場所から、ライフルで狙われていることには気づいていたし、下手すれば2人まとめて捕らえられる危険性があることも重々承知していた。

「ま、何でもいいや。俺は死ぬ気ねえし。手前に負ける気もねえし」

みかげは言って煙草に火をつけた。紅色の髪に、鋭い瞳。彼の拳銃で打ち抜かれると、身体から血しぶきが花のように咲き乱れると報道機関が表現したことから、彼は通称“紅花”と呼ばれている。世間では残虐な殺戮者として知れ渡っており、もし、フブキが同時に存在しなければ、彼の名は最大の恐怖をもって人類の脳裏に焼きついたことだろう。

「僕もできれば死にたくありませんし、ここで捕まるわけにもいきませんので、全力でいきます」

「言ってる。つつか、手前、フブキをぶっ殺す決心はついたのかよ」

嫌な笑いを浮かべながら、みかげが訊ねる。ひなたは刀を構えた姿勢のまま、じりつと彼に近づいた。

「フブキは殺しません。僕は彼を救います」

「だから手前はバカなんだよ。あいつを殺さず生かして捕まえることなんてできると思ってるのかよ」

「それは……」

正直、それはできないだろう、というのがひなたの見解だった。変わってしまったフブキの姿を生で見たのは故郷を失ったときだけだったが、あのときの絶対的な恐怖は今でも彼の身体中に染み付いて消えることはない。あの男を捕らえるなど夢のまた夢のそのまた夢のような気がした。

しかし、ひなたには1つの選択肢があった。

口を閉ざしたひなたを見て、みかげは薄い笑みを浮かべて言葉を発した。

「ほらみる。いいか、ひなた。手前はここ数年、殺しをやってないらしいがな。これだけは言っておく。全てを救うのは無理だぜ」

「そんなことは分かっています」

「分かっただねえよ、手前は。手前は誰1人殺さずに、いや、もしくは、“手前だけが死んで”他の“全て”を生かす道しか選べない奴になっちまった」

みかげはつまらなさそうに煙草をはき捨てた。そして、銃を構える。一見、すきだらけに見えた。しかし、ひなたは踏み込まない。なぜなら、ひなたはみかげのことを熟知しているからだ。この距離では、ひなたは負ける。みかげは自身の持つ圧倒的な身体能力のおかげで、ここまで悪名を轟かせたのだ。他の武器の扱いも巧いと聞いているし、下手に踏み込んで銃以外の何かでやられる可能性は高い。

「手前は、あの男を捕らえるために死ぬ気か？」

「……」

返事をしないひなたを見て、みかげはじれったそうに髪をかきむ

すると、怒鳴りちらすように声を上げた。

「つまんねえ野郎だなあ！！」

その声はひなたの身体を突き抜けた。自分の命を賭ければ、もしかしたら……というのがひなたの選べる唯一の選択肢であった。それでも、もしかしたら、というわずかな望みしかないのであるが、ひなたにしてみればフブキを殺すよりは随分ましな意見だと信じている。

「甘すぎるぜ、ひなた。あの男は死ぬべきなんだよ。“俺の手”で殺すべきなんだよ。手前はそう思わないのかよ。目の前で全てを奪った野郎だぜ！？」

「でも僕たちは、あのとき確かに友人だ」

ひなたの肩を鋭い何かが貫いた。みかげが発砲したのだ。

「関係ねえよ」

みかげは蔑むような視線をひなたに向け、舌打ちをした。

「そんなこと、今更……な」

“あのとき”から、何も変わっていないかった。一度、道を違えた以上、再び交わることはない。もはや元通りになる術はない。自分たちは違う生き物なのだ。

そう悟ったひなたは肩の痛みも忘れて瞳に力を込める。

「あなたがあの男を殺すというのなら、あなたにはここで捕まってもらいます」

「気持ち悪い言葉遣いはやめろよな」

みかげはそうはき捨て体勢を低くした。“楽しい会話”の時間はもう終わりだ。

「行くぞ、ひなた」
「いつでも来いよ、カゲ」

五章 『彼女は彼の名を呼び続ける(3)』

「いいか。どちらかが倒れるまでは決して発砲するな」

だいちは見物人を退避させた後、ひなたとみかげを遠くから囲みこんでいる部下たちにそう指示を出した。

「それから、怪我人を大至急医務室に」

そして、みかげの発砲により怪我をした人間を医務室まで運ばせた。どうやら死者はでていないらしく、だいちが胸をなでおろした。見物人を避難させるまで、ひなたがみかげの注目を集めてくれたおかげだということは痛いほどに分かっており、だいちが心の中で深く感謝せずにはいられなかった。

「私はちよつと所用があるので、しばらくこの場を離れる。いいかもう一度言う。どちらかが倒れるまでは何があっても決して発砲するな」

部下たちが神妙な面持ちで頷くのを確認して、だいちはある場所に向かった。

「この借りを返すには、やはり彼女をきちんと守るしかないってことか」

向かう先は、倉庫。先ほどユキナとハム吉を運んで寝かせた場所だ。彼女たちが目を覚ます前に行かなければ、何をしでかすか分からない。

万が一でも、ひなたとみかげの対決の場に現れてしまったら彼にあわせる顔がない。だいちが、やや足早気味に倉庫に向かったのだった。

~~~~~

さて、そうして再度出会っただいちとユキナたちであったが、彼らとはある場所に移動していた。そこは、ひなたとみかげのいる場所からかなり離れた場所であった。だいちは双眼鏡をユキナに手渡し、それからきつく言い渡した。

「これ以上は近づかないでくれ。君を危険な目に遭わせたくない」「よお、だいち」

双眼鏡を覗き込むユキナの肩の上でハム吉が口を開いた。

「何だ。えー……ハム五郎君」

「ハム吉だ」

「失礼」

わざと言ったのかそれとも本気で間違えたのか分からないほど真面目な顔でだいちは軽く頭を下げた。

「つまり、これはあれか。ひなたの処刑うんぬんは、みかげ確保の作戦の一環だった、と」

「簡潔に言えば、そうなる」

「だったら、さ」

戦闘の様子を見ながら、ユキナが言う。

「ひなたの安全は保証されてるわけ？」

その問いに、だいちはすぐさま答えられなかった。

保証はされて、いない。だいちとしても、ひなたを死なせる気はない。ある程度までみかげを追い詰めてくれれば、その機を生かして彼を捕縛する予定だ。しかし、逆にひなたが追い詰められたとき、だいちが彼を守るために何ができるだろうか。この距離からみかげに発砲したところで、簡単に避けられてしまうだろうかとは彼をよく知るだいちにとって確実な事実であった。

要するに、だいちがひなたがみかげに勝つ、ということ的前提としているのである。

「その沈黙はいただけねえな」

ハム吉が言い、その声に反応してユキナが双眼鏡から目を離す。  
「ひなたが死んだら、私はあんたを殺す」

だいちが薄く笑うと、先ほど倉庫前でユキナの手から奪い取った短刀を彼女の傍らに置いた。そして、彼女に背中を向けると部下たちが待機している場所へ歩を進める。

「ぎりぎりまでは我慢していただきたい」

軽く右手を挙げて去っていくだいちを穴が開くほど睨み付けてから、ユキナは貴重品でも扱うかのように短刀を手に握ると、再び双眼鏡を覗き込んだ。

「我慢なんかできるわけねえだろ」

ハム吉のつぶやきはユキナの耳に届いたのだろうか。それは、彼女にしか分からない。

~~~~~

刀と銃では、圧倒的に銃が有利といえた。事実、みかげの攻撃はひなたの身体を何度か蝕んだが、ひなたの攻撃はみかげにかすりもしなかった。

「ちっ」

顔を歪めて舌打ちをしたひなたは、空いている手にナイフを持つと、みかげから距離をとるため後方に飛んだ。着地と同時にみかげが発砲し、ひなたの右足首をえぐる。それによってバランスを崩したひなたは刀を地面に突き刺すことでなんとか身体を支えるが、次に視界に飛び込んできたのは、銃をしまい両手を空にしたみかげが自分に掴みかかってくる映像だった。ひなたは刀から手を離すと、無我夢中でナイフを奮った。

確かに、手ごたえはあった。

「で？」

ひなたの奮ったナイフはみかげの右腕に刺さっていた。が、彼は全く微動だにせず、傷ついていない左手でひなたの首を掴んで軽々と持ち上げた。ひなたより少しだけ身長が低かったみかげだが、ひなたが宙に浮いたことで彼を見上げる格好になる。苦痛に歪むひなたの顔を樂しげに見上げるその様は、まさに、殺人狂と呼ばれるにふさわしい光景であった。

「弱すぎだろ、手前。この数年、何やってたんだ？」

みかげは地面に突き刺さったままのひなたの刀を抜くと、それをひなたの首筋に突きつけた。ひなたの喉から言葉にならない声が漏れる。

首筋に赤い点ができた。切っ先がひなたの首に小さな穴を開け、そこから血が滴り落ちる。刀にそれが伝わり、地面に染みを作った。ひなたは自分の首をしめつけるみかげの手を右手で掴むと、左手で彼の顔を掴みにかかった。

「くだらない抵抗だな」

しかし、その左手に激痛が走る。みかげが噛み付いたのだ。あまりの痛さにひなたは悲鳴を上げた。そのまま食いちぎられるかとも思ったが、何本かの指から血があふれ出しているだけで、5本ともくつついたままだった。

「じゃ、そろそろ死のうか」

刀がひなたの首に刺さっていく。ずぶずぶ、と。深く深く……。

「あ？」

が、その手は不意に止まることになる。乾いた音が鳴って、みかげの頭上を弾丸が通り抜けていったのだ。弾丸がかすめたせいで切れた紅い髪が散り、みかげは殺意を込めて弾丸の飛んできた方向を見据えた。

あまりにも遠すぎてよく分からないが、弾丸が飛んできたことから察するに、そこに誰かがいるのは確かであった。誰が撃つたのかは分からないが、勝負の邪魔をされたことに苛立ったみかげは、ひなたを地面に叩きつけ、その顔を踏みつけてから弾丸が飛んできた方向に駆け出した。右手にはひなたの刀を握ったままだった。

地面に倒れこんだひなたには立ち上がる気力さえ残っていないかった。拳を握り、自分の弱さに悔しさを覚えた。かつては互角の強さだった。こうも一方的にやられたことなど、彼の記憶にも、もちろんみかげの記憶にもないはずだ。

ひなたは、目を閉じると、静かに謝った。

みかげを捕らえる手助けができないことを、だいちに。そして、大丈夫だと言ったくせに、それが守れないであろうことを、ユキナに……。

五章 『彼女は彼の名を呼び続ける（4）』

「あの人は、全く……」

銃声を聞いて、だいちはずばやく駆け出した。みかげを撃つたのは方向からしても間違いない。総裁である。政府の重鎮が集まる“最も安全”な場所。防弾ガラスの隙間から放たれた弾丸は、みかげの髪を数本貫いただけだった。

みかげのスピードは凄まじかった。どう考えてもだいちがたどり着くよりも前にみかげが着く。そして、総裁たち重鎮は一瞬のうちにして殺されるだろう。政府の役人など、基本的に悪党どもと戦うことを業とする人間だ。いつ死んでもおかしくない中で生きているしかも、今回はこちらから先にみかげに攻撃を加えたのだ。殺されたとしても仕方がない。しかし、みかげは自分が呼び込んだのである。これで死なれると後味が悪い気もした。

だいちの正義に従えば、やはり自分が何もせず誰かが死んでいくのを見ているだけというのは、心のどこかが許さなかった。

信じられないことに防弾ガラスを拳でつきやぶったみかげは、ライフルを構えたまま立ち尽くした総裁をぎろりと睨んだ。

「化け物が！」

防弾ガラスを突き破るなど常人では考えられない。化け物という表現は、確かに的を射ていた。しかし、それはみかげの神経を逆なでする結果となる。

「だ・れ・が、化け物だと？」

みかげは思い切りひなたの刀を奮った。しかし、彼の手に伝わってきたのは、肉体を裂く感触ではなく、何か硬いものにぶつかる感触だった。

「ああ？」

「君の相手は私が引き受けよう」

ぎりぎりのところで、みかげの攻撃を受け止めたのは、だいちの小刀だった。みかげは忌々しそうにだいちを睨むと、唾を吐き捨てた。

それから、何かに感づいたのかぐるりと後ろを振り向く。

「おい。ありゃあ、なんだ？」

だいちもそれを確認すると、目を大きく見開いた。心中で舌打ちし、小刀を握る手に力を込める。

「貴様には関係ないことだ」

~~~~~

「ひなたあ!!」

ひなたが地面に崩れ落ち、信じられない速度でみかげがその場を離れた後、ユキナは無我夢中で飛び出した。ハム吉が振り落とされないように必死に彼女の服の裾を掴む。旗のようにばたばたと揺れながら、ハム吉は、これはやばいと感じていた。

「ひなた、ひなたっ!!」

短刀を投げ出すように地面に放ると、目を閉じて全く動かないひなたの傍にしゃがみこんで彼の身体を揺さぶりながら、ユキナは涙を零した。彼の首と左手からは血があふれ出しており、だいちに殴られた顔や初めにみかげに撃たれた肩を含めたその他の場所にも数多の傷がついていた。

「落ち着け、ユキナ。呼吸はしてる。死んでない!!」

ハム吉が叫ぶが、ユキナには聞こえていない。何度も彼の名を呼



び、彼の頬を叩き、そして、泣いた。

「ユキナ。落ち着けて。おい！ ころ！」

ハム吉はユキナの肩に駆け上り、その耳に直接声を注ぎ込んだ。それで、ようやく我に返ったのか、ユキナは泣き顔のままハム吉に焦点を合わせた。

「とにかく、この場に止まるのはまずい。急いで」

先は言葉にならなかった。いつの間に近づいてきたのか、ユキナを見下ろす影がハム吉にも覆いかぶさった。

「あ……え……」

「あ？ 手前、どつかで見た面だな」

みかげはユキナの顔をまじまじと見つめ、んぐ、と唸った。ユキナは恐怖のあまり口をぱくぱくと動かし、首を横に振る。

「名前は？」

「……………へ？」

いきなりの問いに、ユキナは返事ができない。みかげが握る刀から血が滴っているのも、彼女の恐怖を煽る。

「名前を答える」

「ゆ……」

「ゆ？」

「ユキ、ナ」

言った瞬間、鬼の形相をしたみかげに胸倉をつかまれた。それからかなりの至近距離で顔を見つめられる。ハム吉が肩から落ち、地面にぶつかって、ふぎゃ、と鳴いた。

「あの野郎の妹か」

「……………へ？ ええ？」

「苛々させる女だな。はっきり物を喋れ。伝わんねえだろ」

言いながら、みかげは刀を振り上げた。そのままユキナの首を突き刺す体勢に入る。

「た、たす……」

目の前に刃が迫った。そして、彼女は最期の言葉として、無意識

のうちにその名を呼んだ。これまでの声の震えが嘘であったかのよう  
うに、はつきりと大きく高らかに。その場にいた全員にしっかりと  
聞こえるように。

「ひなたあー!!」

~~~~~

みかげの首がゆっくりと彼に向いた。ユキナを突き刺そうとした
刀の切っ先は、短刀によって止められた。

その柄は白。

握る手は赤。

苦しそうに歪んだ顔と、それとは対照的に強い輝きを有した瞳を
もつ男の髪の色は、蒼。

「手前……」

「離せ」

「あ？」

「その人から、手を離せ」

みかげは、ふん、と鼻を鳴らすとユキナを掴んでいた手を離す。
彼女の身体は地面に落ちる。危うくハム吉を踏み潰すところだった
が、彼はそれを器用に交わした。

「手前、どういっつもりだよ？」

「僕は、この人をフブキに会わせる」

「はあ？」

おぼつかない足取りで、みかげの前に立ちはだかったひなたは、短剣の切っ先をみかげに突きつけた。

「ひとりぼっちには、させない」

みかげはそれを聞いて、唇の端を歪めると刀を地面に突き刺した。「バカが」

そして、ひなたの顔を力いっぱい殴る。彼の身体は面白いように弾き飛んだ。しかし、ひなたはほとんど言うことのきかない身体を無理やり起こすと、どこにそんな力が残っているのか、短剣を手にユキナを庇うようにしてみかげと対峙する。

「……よく見やがれよ。こいつの方がよっぽど“化け物”だぜ」

みかげは言いながら嬉しそうに笑った。ひなたの瞳は、ぎらぎらとした暗い光を有している。それは、みかげのよく知る、かつて悪党として名を轟かせたときのひなたの瞳だった。

その瞳をじつくりと見たみかげは殺気と笑みを消してひなたの顔に人差し指を突きつけて口を開いた。

「初めからそれくらい集中しとけば良いんだよ」

それから、みかげは後ろを振り返った。彼が斬りつけたせいで、胸を斜めに赤く染めただいちが倒れそうになりながらも銃をこちらに向けゆつくりと近づいてくる。

「いいか、ひなた。よく聞け」

とうとうひなたが膝から崩れ落ちる。しかし、その瞳は死んでいない。たとえ、その足が、腕が動かなかろうと短剣の照準をみかげから離しはしない。

「畏を張るなんて真似しなくても、俺は逃げねえよ。新聞でも何でもいい。みかげ出て来い、とでも広告しやがれ。いつでも相手してやる」

みかげが覚束ない足取りで向かってきただいちの射程距離の範囲内に入った。瞬間、みかげは宙を舞い、そして一気に距離を開けた。だいちが引き金に手をかけたとき、既に彼の姿はその場になかった。

まず、だいちが前に倒れた。拳銃は彼の手から離れ、かちやりと音を立てて地面にぶつかつた。

ついで、ひなたが倒れた。短刀は彼の手から離れると、地上を転がって地面に突き刺さつたままのひなたの刀に当たつて小さく音を立て、刀の背に身を隠すようにして止まつた。

連日のひなたとユキナに関わる騒動は、こうして一旦の幕を降ろしたのだつた。

余章『フブキの場合』

「なんだ、これ？」

自分の身体が動かないことに気づいたときには、もう遅かった。

周りには手術衣を着た連中があり、自分は手術台らしきところに乗せられている。

「おい、なんだよ、これ！」

自分の声が出ていないことに気づいたのは、そのときだった。必死にもがいてみたが身体はぴくりとも動かない。麻酔でも撃たれているのだろうか。

「では、始める」

そう言った男を彼は睨みつけた。正確には、睨みつけたつもりだった。顔の筋肉は動かず、ぼーっとした顔で彼は男を見たに過ぎなかった。

この場の代表者と思しき清潔感に包まれた男を見て、彼はその顔をどこかで見たような、そんな懐かしい感覚にとらわれた。

「どこかで、会った？」

彼はぼんやりした頭でそう考えたが、どうしても思い出すことができなかった。もし彼が、この男とこの場ではなく、別のところで会ったならすぐに気づいたかもしれない。そうすれば、もっと“良し出会い”になったかもしれない。

「どうでもいいか……」

それが、彼が正常であったときの最後の思考だった。

その後のことは、よく分からない。

彼は、身体の底から浮かび上がる衝動を抑えきれずに、破壊行動を開始した。逃げ喚く人々、泣き叫び人々。それを見ても、彼の心は何も感じなかった。

しかし、無となった彼の心に何かが引つかかる。自分には、とても大切なものがあつた気がした。彼がそれを思い出すのは、もう少し先の話で、そのせいでその大切なものを傷つける結果になるのも、もう少し先のことだった。

本来ならば、すぐに思い出せることだっただろう。しかし、それを思い出せなくなったのは、あの男の姿を見つけたからだ。

彼は自分が監禁されていた建物から脱走する途中、手術室で見た男を見つける。手術衣を脱ぎ軽装になった男を見て気づいた。

この男がいつたい何者であるかを。

そう思った瞬間、彼の足はとある場所へ向かっていた。対する男も何かに気づいたのか、一目散に駆け出した。

あやふやな記憶を辿り、信じられない速度で走る彼。

確かな記憶を辿り、懸命に車を走らせる男。

同じ目的地に向け2人の男が動き出す。先に到着するのは、どちらになるのか。それは、まもなく判明する。

フブキが、ひとりぼっちになった。

余章 『みなみの場合』

「嫌っ！ やっぱり嫌よっ！ この子を置いていくなんて!!」

ヒステリックな女性の声が闇夜にこだまする。それをたしなめるように女性の傍に立った男性が彼女の腕をつかんだ。

「もう、そうするしかないだろ……この子の幸せを願うなら、な」

男性は、そう言って足元に視線を向ける。そこには毛布に包まれた、何も知らずに眠りこけているまだ幼い少女がいた。

「そう、かもしれないけど……」

「この子まで死なせるわけにはいかない」

男性は険しい顔つきで言うと、踵を返した。女性は躊躇いがちに何度か少女の方を振り返って、やがて諦めたようにして男性の後をついていく。

男性はそんな女性の方を振り返ると、厳しい口調で告げた。

「お前は、この子と一緒に逃げても良い」

~~~~~

そこは、ごくごく小さな村だった。自然が豊かで村全体を覆い隠すように草木が茂り、村人は平穏な生活を送っていた。

しかし、それが一夜を境にして変わることになる。



その夜、村はものの数時間のうちに壊滅した。まさに、跡形もなく。そんな風にして燃え盛る家々の間を1組の夫婦が走っていた。

「ど、どうするの、あなた!？」

「この子を助けるっ!」

夫と思われる男性の腕の中には娘と思しき少女が抱えられており、妻であろう女性はその後を必死に追いかける。

「助けるって!？」

「村の外に隠す」

「え？」

女性は絶句し、男性の背中に問いかける。

「隠すって……?」

「僕は、このまま村を見捨てていくことはできない。けれど、この子を見殺しにしたくもない。選択肢はひとつだ」

「で、でも……」

たとえ、女性がどんな言葉をかけようとも男性の決意は変わらない。彼の背中がそれを物語り、女性は実際にその子を置いていく瞬間まで、一言も発することはなかった。

~~~~~

「本当に良かったのか？」

男性は娘を村の外れ、生い茂る草木の陰に隠して、村に戻る途中で女性に問いかけた。女性は、ふるふると首を横に振ると決意を込めて言う。

「私はあなたと一緒にいきます」

それを聞いて女性に静かな笑顔を向けた男性は、その顔のまま地面に倒れた。

「え……？」

女性が目の前で起こった状況を理解するよりも早く、声が聞こえた。

「みいつけた」

それは、女性にとって恐怖の声以外の何者でもなかった。先刻、村を襲った男が顔に笑いを貼り付けて現れたのだった。

「仕方ねえよな。仕方ねえ。この村は俺を侮辱した。俺の顔を見て逃げ出すのは良い。そりゃまあ当然の反応だからな。むしろそこまでは俺も気分が良かった。でもな、その後がだめだ。ああ、だめだ。誰が“化け物”だった？ 化け物って言うのは、“あいつ”みたいなことを言うんだよ。俺をあいつと同じだとも思ってるのか？

あ？ よく見る。俺は“人間”だ。ただの、普通の、ありきたりな、どこにでもいる人間。……分かるか？ 分かんねえか？ もう何も分かんねえって顔してやがるな。んな顔しても無駄だ。もう俺のスイッチは入っちゃってんだよ。もう止められねえ。この村を壊して壊して壊して、壊しつくすまでは止まらねえ。いや、ぶっ壊しても止まるかは分かんねえが。まあ、そのときはそのときだ。なあ？ 何とか言えよ。俺ばっかりしゃべってたって、つまんねえだろ。最期の言葉でも聞かせてくれよ。なあ？」

男は早口にまくしたてながら、女性にじりじりと近づいていく。そこで、女性は気づいた。ここは娘を置いてきた場所からそんなに離れていない。できるだけ、この“化け物”を遠くに引き付けなくては……。

その考えが頭に思い浮かんだ瞬間、女性は駆け出していた。できるだけ、できるだけ遠くに……。

~~~~~

少女は朝日と鳥のさえずりで目を覚ました。昨夜の騒ぎでは全く目を覚まさなかったのは、単なる偶然か、それとも、何かがそうしたのか。それは分からないが、とにかく、彼女は悪夢のような一晩を生き残った。

「ん……お母さん？」

確かに自分の部屋で眠っていたはずの自分が、なぜこんなところにいるのだろう。少女はそう思い、寝ぼけた頭で歩を進める。村へ向かって。

「お父さん？」

両親のことを捜しながら少女は進む。何も知らない、ということが救いになる場合がある、というのを少女は痛感する。

眠気を吹き飛ばす光景が、そこに広がっていた。

「……何、これ？」

少女が目にしたのは、もはやただの荒地だった。家も人もない。何も無い。少女は呆然と立ち尽くすと、目の前の現実に打ちのめされた。

何も考えれない。何も分からない。少女は、しばらくその場から動けなかった。

1人の少女が、ひとりぼっちになった。

## 余章『さくらの場合』

「ごめんなさい」

それが生まれてきてから最もたくさん彼女が発した言葉であった。

「ごめんなさい」

今日も言う。昨日も言った。多分、明日も言う。数えるのも疲れた。謝るうが、謝らなからうが、殴られるのは決まっていた。それでも彼女は謝った。悪いことをした覚えはない。その謝罪は、罪悪感からではなく、完全に恐怖からくるものだった。

つまり、彼女は虐待を受けていた。

母は彼女が幼いときに死んだ。残された彼女と父親は、どうしようもなく相容れなかった。父親は事あるごとに彼女を殴った。それはたとえば、雨が降った、寝起きが悪かった、といったくだらないことだった。

早いうちから彼女は悟っていた。自分の父親は狂っている、と。しかし、それでも自分の肉親には違いない。いつかはきっと優しく笑ってくれる。そう信じて、彼女は今日も謝り続ける。

「ごめんなさい」

しかし、神は無情だった。

その日、父親は特に虫の居所が悪かった。朝から布団にくるまって震えていた彼女は、額に汗をかき嫌な予感を覚えずにはいられなかった。

そして、それは的中する。父親はいきなり彼女を捕まえると、思い切り壁に投げつけた。そのせいで口が切れたのか、血の味がする。父親はどうやら酒を飲んでいるらしかった。

「ごめんなさい」

少女の口から機械的にそう漏れると同時に父親は歪んだ笑いを浮かべた。父親は苛立ちを隠さずに彼女の頬を殴った。続けざまに腹を蹴った。まるで、自分の優位を確かめるように彼女を傷つけていく。

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「ごめんなさい……さ、い」

殴られる度、蹴られる度に彼女は謝った。それが父親の怒りをさらに買う結果になった。父親は「うるせえんだよ！」とはき捨てるのと、台所に向かっていった。

ひとまず終わった、と彼女が思ったのも束の間、父親はいやらしい笑顔を浮かべながらその手に包丁を持って戻ってきた。

そして、それは起こった。父親がいきなりその包丁を突きつけてきたのだ。

(ごめんなさい )

頭ではそう思いながら、彼女は初めて父親に反発した。もしかするとそれは“人間”としての本能だったのかもしれない。彼女は床を転がって父親をかわした。酔っ払っていた父親はよろめいて倒れ、包丁が手から離れる。そのまま四つんばいになった父親を見て、彼女の頭は一瞬にして冷めた。

まるで別の自分が存在して、それが外から今の自分を見ているように錯覚した。

彼女は父親が落とした包丁を拾い上げる。父親はまだ起き上がらない。冷め切った頭はこれを実行してしまえば、ずっと願ってやまなかった、いつかは自分に優しく笑いかけてくれるという些細な願いが消えうせてしまっただろうなどと自嘲的に笑っている。

彼女は、父親の背中に包丁を突き刺した。

~~~~~

そこから彼女の記憶は真っ暗になった。

数分前のことさえ思い出せなくなった彼女は、ふと気づくとある綺麗な花が咲き誇る木の下に腰掛けていた。

自分の名前も、どうしてここにいるのかも、“何がきっかけ”で記憶を失ったのかも、全て分からない彼女はある願い事をする。

それはもはやただの偶然であったかもしれないが、彼女が記憶を失って初めて願ったことは皮肉にも記憶喪失となる前の願いと非常によく似ていた。

いつか、自分に優しく笑いかけてくれる人が現れますように……と。

1人の少女が、ひとりぼっちになった。

第六章 『彼女はただひたすらに彼を想う(1)』

目が覚めたとき、いやに身体が重いことに気づいて彼は愕然とした。それほどまでに重傷だったのかと思い、手を動かそうとする。

「あれ？」

思いのほか簡単に動かせたことに驚きつつ、自分の身体が何故重いのかを知った。誰かの頭が自分の身体に覆いかぶさっていたのだ。見違はずもない。それは、すやすやと眠るユキナであった。

「お目覚めか」

柵の上に乗って、何かの種をかじっていたハム吉がほっとしたような顔で言った。

「ここはどこですか？」

「病院」

なるほど。自分が病院のベッドに寝かされているということは、ここにいるユキナは自分を見舞ってくれたということだ。ひなたは彼女を起こさないようにそっと身体を起こした。痛みを感じるのは、首と左手くらいであった。ぼんやりした頭で彼は、だいちとみかげはいったいどうなったのだろう、と考え、それを声に出した。

「あの、みかげとだいちはいったいどうなったのでしょうか？」

その問いかけにハム吉は微妙な表情を作り、探るような声を出した。

「覚えてないのか？」

「はい……。みかげに殺されそうになって、地面に倒され、それから誰かが自分の名前を呼びながら近づいてきた、というところまでは覚えていますが、その後のことは……」

ひなたは困ったように頬をかいた。その顔から判断するに、どうやら彼は本当に覚えていないらしい。ハム吉はため息をつく、彼の記憶が抜けている部分ができるだけ詳細に説明した。聞きながらひなたは小難しい顔つきになっていく。

「つまり、みかげは僕もだいちも、それからユキナさんも殺さずにその場を立ち去った、と」

「そうなるな。やたら嬉しげに笑ってたぜ」

「そうですね……」

そのとき、んん、という小さな声が聞こえ、ひなたはそちらに視線を向けた。ユキナが目をこすりながらむくりと起き上がる。そして、微笑むひなたに気づいて、泣いているのか笑っているのか分からない顔を作った。

「ひなたあ……」

「はい」

ユキナはそのままひなたの胸に顔をうずめた。彼はそんな彼女の背中を優しく叩いてやる。ハム吉曰く、彼女はみかげに倒された自分を心配して、危険を省みずに傍に駆け寄ってくれたらしい。

あのとき自分の名前を呼んでいたのは、ユキナだったのだ。

「ご心配をおかけしました」

「もう、いいよ」

ひなたにとつて、それは純粋に嬉しい行為であった。みかげとは違う道でフブキを追い始めることを決め“あの町”を出たときからずっとひとりで過ごしてきた彼にとつて、自分の名前を呼んでもらうなど随分と長いこと経験していない出来事であった。

ひなたは彼女の小さな背中を抱きしめながら、思う。孤独の辛さは人より分かっている方だと信じている。だからこそ、ユキナの気持ちもよく分かるし、放っておくこともできない。数日前までは赤の他人であったことに違いはないし、そこまで深く思い入れを持つべき特段の理由も見当たらない。強いて言えば、かつて友人であったフブキの妹であるから、といったくらいだろうか。しかし、それは言い換えれば仇の妹でもある、ということだ。そんな人物に義理立てするなど、他人からしてみればもしかすると考えられない行為

なのかもしれない。

それでも、ひなたは決意する。

ひとりぼっちは嫌だ。なりたくないし、させたくもない。ここで彼女を置いて自分だけでフブキを捜しに行くのは、どうしてもできない。たとえ、自分という存在が傍にいて彼女に迷惑をかけるようにも……。

それに彼女は言ってくれたではないか。『ひなたと一緒にいたい』と。それで充分ではないか。自分のせいで彼女に危険が及ぶのならば、自分が彼女を守れば良いだけの話だ。

自分が昔からそうだった。アンフォルを作ろうと思いついた理由。それはただ単純に、ひとりぼっちの者を無くそう、と思っただけだ。あの町を作ったおかげで、救われた人がいたはずだと、少なくとも自分だけは信じている。だったら。

「ユキナさん」

ひなたは彼女の背中の上から声をかけた。

彼女に出会って事情を聞いたときから、既に決まっていたことなのだろう。自分は彼女を放って置くことなどできやしない。

それを言葉として、初めて彼女に伝えるのだ。

「あなたのお兄様を見つけて、あなたがひとりぼっちでなくなるまで、僕があなたをお守りします」

「……え？」

言ったからには、やるしかない。みかげよりも、そして政府の人

間よりも早くフブキを見つけ、そして殺さずに捕らえて元のフブキに戻す。

簡単そうだが至難の業だ。仇を討とうと考えていたときに比べて、かなり難易度は上がった。うまくいく可能性は、ひとつまみほどもないかもしれない。しかし、もう迷いはない。

自分の腕の中にあるぬくもりを忘れたくはない。

「だから安心してください」

ユキナはひなたの胸から身体を離すと呆けたような顔をした。それから、こくと頷いた。

「うん」

ハム吉が柔らかく笑い、満足げに頷いた。これで、ユキナは自分をひとりぼっちだと思うことはないだろう。それだけで彼は十分に満足だったのだ。

第六章 『彼女はただひたすらに彼を想う(2)』

「前にも言ったはずだが……」

そんな2人の様子を呆れたように見つめながら、だいちがつぶやいた。

「いたんですか？」

「ああ。ずっと。君らの、なんというか、愛すべき光景をじっと見ていた」

今、その存在に気づいたのか、ひなたが首を横に向けた。この病室には2つのベッドがあり、隣にだいちが転がっていたのだ。ユキナはだいちの言葉に顔をみるみるうちに赤くさせると、そそくさとひなたから身体を離れた。それを見て、ハム吉はふきだすが、それに気づかないほどにユキナは動転していた。

そんな彼女を見て、だいちは楽しそうに笑った。

「君は、本当に女性で苦労するな」

「男性相手でも苦労してます」

「そうだった」

だいちは声を出して笑い、それから静かに笑みを消した。

「私個人の意見としては、フブキを殺す気はない。しかし、今回の件で私の降格が議論されているようだし、もともと私の発言力など吹けば消し飛ぶ程度のものだ。つまり政府の動向としては依然と同様、見つけ次第、生死を問わず確保して世間から抹消、ということになる」

ユキナが小さく悲鳴をあげ、ひなたの服の裾をぎゅっと掴んだ。

「そうならないように何とかするのが僕の役目です」

「何とか、か。下手に希望を見せることは、はっきりと絶望を示すよりも遥かに残酷だぞ？」

「ごもつともです」

ひなたは苦笑いを浮かべて、ユキナの頭をやや乱暴になでた。そ

れから、だいちと2人にしてくれるように頼んで、ユキナとハム吉に外に出てもらった。病室の外の気配を窺って、ユキナが完全に離れていったことを確認すると、ひなたはため息をついた。

「せめて彼女の前では理想を語っても良いでしょう」

「そうかもしれないが、最終的に傷つくのは彼女じゃないか」

ひなたを眩しそうに見つめて、だいちはごろりと仰向けに寝転がった。

「君が夢想家でないことはよく知っている。むしろ、現実的な方だろう。常に最悪の事態を想定しているし、だからこそアンフォールに“彼女たち”を……おっと、話が逸れたな。君はそれだけじゃなく、自分の力量もよく知っている。だから、彼女を励ますために、彼女を元気付けるために、先ほどのようなことを言ったというのも重々承知している」

ひなたも彼に倣って仰向けに寝転がった。無駄に白い天井が彼の視界いっぱい広がる。

「敢えて聞く。フブキを生きたまま捕らえ、その後、彼を元に戻すことができる可能性は、どれくらいだと考える？」

その問いに、ひなたは充分過ぎるほどの間をとって答えた。

「ほぼ0%、でしょうか」

「同意見だ」

だいちは即答し、言葉を続けた。

「君の考えていることを勝手に推測して、言わせてもらう」

「なんででしょう？」

「君が死んでも、きっと彼女は苦しむ。その点はきちんと頭に入れておいてもらいたい」

「約束はできません」

ひなたは言ってから、次に来るであろう言葉を予想してにやっと笑った。

「私は君を信じている」

果たして、その言葉がひなたの耳に届いた。だいちも笑いながら言ったらしく静かな笑みが漏れるのが聞こえた。ひなたは堪えきれずに声を出して笑い、首に痛みが走った。

「ずるいですね」

まるでそう言うのが決まりであるかのように言ってから、ひなたは続ける。

「とにかく僕は、あの子を“ひとりぼっちにさせない”ために動きます。それ以上のことは僕にはできませんから」

それを聞いて、だいちは呆れたように首を横に振った。

「そんなに多くを背負うと、いつか潰れるぞ」

「そのときはそのときです。僕もあなたと同じように、自分の正義に従うだけです」

だいちの首だけをひなたに向けた。彼は天井を見つめたままで、だいちの方に顔を向けることはなかった。最も、首は固定されておりだいちの方を向くためには、身体ごと動かさなければならなかったのだが。

「それはそれとして、ここは政府の病院ということをお忘れなよ」

「あ、そうでしたか」

ひなたはのん気にもそう答えた。別段、焦っている風にも見えな

い。
「先ほども言ったが、私はきつと降格だ。だから、もうひとつだけ政府側の人間としてはあつてはならないことをしようと考えている」

「お世話になります」

「……そもそも、それをするために無理を言つて君と同じ病室にしてもらったようなものだからな。大変だったんだぞ。君を見張るた

め、の一点張りで同室にしてもらつたというのは「

「至れり尽くせりとは、こういったことを言うのでしょうか」

「この借りは、後日きちんと返していただくでしょう」

だいちが身体の向きを変えて目を瞑った。そのまま眠りにつこうという体勢だ。ひなたは目だけを動かして自分の刀のある場所を確認した。と、その刀に寄りかかるようにして置かれた短剣に目がいった。元々は綺麗な真つ白だったのであるう柄が血で汚れている。

（あれが、先ほどハム吉が説明してくれた中に出てきた、僕が使ったというユキナさんの短剣か。僕の血で汚してしまつて、申し訳ないことをした）

借りを作つた相手はだいちだけではないな、と思い、ひなたは苦笑を浮かべた。

（それにしても、確かあの短剣は……）

そこまで考えて、ひなたは首を横に振った。どういつ経緯があつたにしろ、あの短剣は今やユキナのものとなつたのだ。自分の身体が動くようになったら、まずはユキナに短剣の扱い方を教えよう、と決意し、彼はだいちの方に身体を向けた。彼の背中が見える。

「必ず」

随分と遅い返事になつたが、だいちはさして気にした風でもなく、さらつと応えた。

「出来れば、みかげの身柄をお願いしたいところです」

「か、必ず……」

だいちが笑う気配を感じ、ひなたも頬を緩めた。だいちがゆるりと身体の方角を変え、2人は向き合う形になつた。

「数日は安静にしていた方が良いでしょう。私の退院が5日後ということになつているから、君の脱走は4日後の夜中ということだ」

「はい」

「それから、あの短剣だが……」

だいちが先ほどまでひなたが思いを巡らせていた短剣に視線を向けた。

「こつすることにした。というより、こつちの方が良い気がした」
「分かりました。あなたが良いのなら僕に口出しできることではありませんか」

「すまん。せつかく」
「構いません」

ひなたは小さく笑い、そこで2人の会話は途切れた。

しばらくして、もう一度小さな謝罪の声と共に隣から寝息が聞こえ、ひなたも静かに目を閉じた。次に目を開けたときにはユキナは病室に戻ってきているだろうか。夢の中に入り込む直前、ひなたはふとそんなことを考えていた。

第六章 『彼女はただひたすらに彼を想う』(3) 『

4日後。

男はベッドから音も立てずに起き上がった。まだ身体は痛むが、歩けないほどではない。包帯や薬も数日分は手に入れたので、なんとかなると言い聞かせる。今日を逃せば機会はない。今が絶好の機会なのだ。

「それでは、お元気で」

隣のベッドから声が聞こえた。

「はい。だいちも」

「ええ」

そうして、だいちはうそ臭く寝息を立て始めた。自分は眠っていた、と苦しい言い訳をするらしい彼は、それ以降一言も言葉を発しなかった。

病室の窓をそつと開けると、風が吹き込んできた。さほど冷たくはない。飛び降りるには彼の病室がある階は高すぎた。そこで、ひなたは外に出て壁伝いに下に下りていく。人間業とは思えない行為だが、彼はひよひよいと降りていく。5階分の壁を下り終えて地面に着地すると、そこでは見慣れたバイクと小さな影が待っていた。

「お待ちせしました」

「うん。待った」

「手厳しいですね」

ひなたはユキナの代わりにバイクに手をかけるとそれに乗った。病院の周りは政府の役人たちが交代で番をしているらしい。ここからは強行突破である。いつかのように作戦は、ない。

「だいちの立場を考えても、これ以上は手伝っていただくわけにはいきません」

「うん」「ああ」

ユキナがひなたの後ろに座り、ハム吉が彼女のポケットに入り込む。

「ですから、全速力で突っ切ります。よろしいですね？」

「任せる」「任せた」

「忘れ物は、ございませんか？」

ひなたの腰には一振りの刀が、そして、ユキナの腰には例の短剣が。荷物の中には包帯と薬を加えた。忘れ物は、ない。

「行きましょう」

エンジン音が夜の病院に響き渡った。それに反応して、辺りがざわめき始める。そんなことはお構いなしに、ひなたはバイクを発進させた。

猛スピードで走るバイクは番人をおつという間に追い抜いていく。途中、何人かを跳ね飛ばしながらバイクは進む。追っ手は、こない。

彼らは“無事”に逃走を成功させた。

~~~~~

「本当にあれでよろしかったんですか？」

とある病室の闇の中、1人の男の声がした。

「ああ。どうせ罰を受けるならとことん、だ」

眠っていたはずの男が、空になった隣のベッドに視線を向けながら言う。

「ここで彼を捕まえてしまうよりも、彼の力を使って他の“化け物

たち”を捕らえる方が都合が良い」

「それはそうですが……。上手く行きますか？」

月に照らされただいちの顔が、部下の目に映る。薄く笑っただいちの顔は、自信に溢れていたといっても過言ではない。

「もちろん、こちらでも最善を尽くす。とにかく私は彼に賭けた。それだけだ」

「……」

「彼を逃がしたことで君らにも何らかの罰が下るかもしれないが、そのときは私が全ての責任を負うことで解決してやる。安心しろ」

だいちはそう言っただいふと起き上がると、柵からロープを取り出しながら付け加えた。

「むしろ、私も含めて君たち全員が昇格するような結末を迎えさせてやる」

神妙な面持ちで聞いていた部下は、表情を緩ませると深く頭を下げた。

「我々はあなたの部下ですから。あなたの指示に従うだけです」

それを聞いて笑みを浮かべただいちは、取り出したロープを部下に手渡しながら言った。

「さて、ここからだ重要だ。予定通り“舞台”を整えよう。“演技”の稽古は充分か？」

事実として、だいち側の策略の中で、ひなたたちは“無事”に逃走を成功させたのであった。

~~~~~

さて、そんなだいちの思惑を知らぬ一行は依然として猛スピードでバイクを走らせていた。

「どこに向かう気だ？」

強い風をユキナのポケットで避けながらハム吉が問う。

「アンフォールへ帰ります」

「は？」

ひなたの返答にハム吉が答えた。ユキナはひなたにしがみつくの
に必死で、口を開くこともままならない。

「かなり腕のいい医者があります。僕の怪我の件もありますし、うま
くいけばフブキを元に戻す薬についても知恵を借りられるかもしれ
ません」

「なるほど」

「ただ……」

ひなたはそこで一旦、言葉を区切った。微妙な沈黙が間に流れた。

「帰るのか」

その独り言は、誰にも聞こえなかった。言葉はその場に取り残さ
れ、バイクは前へ進んでいく。

ひなたの2つ目の故郷、アンフォールへ向けて。

第六章 『彼女はただひたすらに彼を想う(4)』

時は、遡ること数日。場所は、アンフォル。

この小さな町に家はそう多くない。しかも、ほとんどは同じくらいの大きさの家が立ち並んでいるといった状況だ。

現在、この地に住む最年長の人間は20歳に届くかどうか、というくらいの女性だった。そして、自動的に彼女がこの町の長でもあった。元々は、ある男が長として存在していたのだが、数年前に出て行ってから彼女が代理として行っている。

朝食を取り終え、食後に紅茶を飲みながら彼女は新聞を開いた。流れるような美しい髪が、その動作に合わせて小さく揺れた。それから、一面に大々的に書かれた記事に目が留まり、まるで時間が止まったかのように彼女の動きがぴたりと止まる。一方で、机に置かれた紅茶から湯気が立ち上り、相変わらず時は進んでいることを教えた。

「何、これ？」

凜とした声だった。

この日、一面に載った記事は“蒼風の公開処刑決定”を伝える一報であった。

彼女は、その記事を隅々まで読んだ。二度も三度も。昨日の新聞にて、ひなたの賞金額が数年ぶりに上がったことは知っていた。正体をひた隠しにしていた彼の身に何かあったのではないか、と不安

で仕方がなかった彼女にとって、今日のこの記事の内容は衝撃以外の何物でもなかった。

ただ唯一の救いがあった。それは、ひなたを捕まえ、そして処刑を担当するという政府の役人が、だいちであるということだった。

だいちは、かつて自分と同じ町の住民だった。自分と同じようにひなたに救われた人間の1人だ。彼がひなたを処刑するとはどうしても思えなかった。

「大丈夫、だよね」

彼女はそう独り言ちると、紅茶を口に含んだ。喉は、すっかり乾ききっていた。

翌日。

彼女は顔を洗うことも髪を梳かすこともせず、すぐさま新聞を開いた。その記事は連日の衝撃をさらに増した。

この日、一面に載った記事は“蒼風の政府所有病院への留置”を伝える一報であった。

記事によると、政府本拠地、ひなたの公開処刑場にみかげが現れたとのことだった。処刑直前に現れたみかげはあろうことか処刑を担当しただいちを斬りつけ、ひなたを救い出した。しかし勇敢な政府役人は彼らに向かって攻撃をしかけ、惜しくもみかげには逃げられたが、ひなたには大怪我を負わせて捕らえることに成功したらしい。

事実とは大きく捻じ曲がっていたが、彼女にはそれを疑うための情報が少なすぎた。ただなんとなく、みかげがひなたを救うことに違和感を覚えたくらいだった。

「事実はどうあれ、ひなたが怪我をしたことは確かのような」

不安そうな顔を浮かべたまま、そうつぶやいた彼女は新聞を閉じると、洗面所へ向かった。鏡に映る自分の顔は、かつて、ひなたに出会う前の自分によく似ていた。それに腹が立って、彼女は鏡に乱暴に水をかけた。

翌日。

連日の衝撃で、少しばかり睡眠不足に陥った彼女は今日も真つ先に新聞を開いた。そして、これまでとは違う反応を見せる。

彼女は安堵のため息をついたのだ。

この日、一面に載った記事は“蒼風の脱走”を伝える一報であった。

記事によると、蒼風は昨夜未明、病院から脱走したらしい。同室で見張っていた政府役人は蒼風によって拘束され身動きがとれない状態にあった。外を見張っていた役人たちも、彼の運転するバイクによって引き倒されたという話だ。

そして、彼女にとって気になる文面が続く。どうやら、ひなたは今1人ではないらしかつた。彼と共にバイクに乗っていたのは1人の少女だったらしい（彼女について政府は明言を意図的に避けてい

る節があつた)。彼女はこの少女についてある人物の姿を思い浮かべ、もう一度、安堵のため息をついた。

(無事に会えたのかしら……)

彼女は過去を懐かしむように目を閉じると、小さく微笑んだ。それは久しぶりの笑顔であつた。

その後、彼女に更なる衝撃が訪れるのに、さほど時間はかからなかつた。

第六章 『彼女はただひたすらに彼を想う(5)』

「ね、ねえ、ひなた。こんな森の中に町なんてあるの!？」

道が整備されていないのか、がたがたと揺れるバイクの上でユキナが叫んだ。

「あります」

ひなたは冷静に前方を見据えながらバイクを操っていく。道なき道を迷うことなく進むひなたは後ろの少女を安心させるように声を発した。

「もうすぐですよ」

「う、うん。分かった」

強く目を瞑り、ひなたをぎゅっと抱きしめているユキナは、それだけ言っただけで黙りこくった。ただでさえかなりの速度を出しているのに、この道の悪さだ。端的に言っただけで彼女は怖かったのだ。

~~~~~

しばらくバイクを走らせた後、ひなたの目が何かを捕らえた。それは見覚えのある町の片鱗だった。森の中に開かれた場所があり、彼はその前でバイクを止めると目を細めた。

「なんだ、ここは？　ここだけ周りと比べてやけに綺麗というかなんと言っか……」

ハム吉の言うように、ここは異様だった。周りは木々や草で多い尽くされていたが、まるでこの場だけそれらが上空に吸い取られたかのように、まっさらの土地になっていた。よく見れば、ここを囲

む木々には幾多の傷がついている。

「ここは僕たちの修行場、ですかね？」

「ほー」

ハム吉は興味深そうに首を動かし、ユキナもじつとその場を見つめた。ひなたの頭に様々な記憶が蘇る。

みかげと共に、ここを作ったときのこと。

彼女を負ぶつて、ここを歩いて町に向かったこと。

だいちと共に、ここで談笑したこと。

彼女と、出会ったこと。

そして、みかげと喧嘩別れをしたこと。

「ここでは、いろいろなことがありました」

ひなたはぽつりとそう言うと、ユキナの方に向かい直った。

「参りましょう。町はすぐそこです」

~~~~~

そこは辺鄙な町だった。が、ユキナは妙に懐かしい感覚にとらわれた。自分の生まれ育った町も結構な田舎だった。その雰囲気のことよく似ていたのだ。

町人はひなたの姿を捕らえると一斉に近寄ってきた。

「おお、ひなた！」

「生きてたかつ！」

「また派手にやっってるみたいだなあ」

「この娘は誰？」

「何これ、可愛いつ！」

矢継ぎ早に言われ、ひなたは困惑の表情を浮かべた。彼の頭をばんばんはたく者もいれば、ユキナの頭をなでる者、ハム吉を掴み上げ愛でる者もいた。

しかし、そんな喧騒もある1人の子どもの言葉で一気に終息することになった。

「さくらさんが、待っています」

その子は他の子よりも年上であるらしかった。落ち着いた声でひなたに告げる。ひなたは頷くとバイクを彼に任せて歩き出した。ユキナが慌てて後を追い、ハム吉も彼女の肩に飛び乗った。

「さくらさん？」

「はい。それが、この町の医者の名です」

~~~~~

さて、場所は変わってさくら宅。

彼女はそのとき洗濯をしていた。今日は良い天気洗濯日和であると朝から思っていた彼女は、うきうきしながら洗濯物を干していた。

と、突然とてつもなくうるさいバイクの音が彼女の耳に伝わった。それから町の人たちの騒ぎ声。

さくらは、それらを総合してひとつの結論をたたき出した。もし、この希望的観測が正しければ自分から出向く必要はない。

彼女は自然とわくわくし始めていた。いや、ドキドキといった方が正しいかもしれない。とにかく彼女は鼓動が早まるのを感じていた。

しばらくして、来訪者を告げる鈴の音がなった。さくらは急いで玄関へ向かう。途中、慌てすぎて転びそうになったのは秘密だ。絶対に秘密だ。玄関先にたち、そこに備え付けてあった姿見を覗き込みながら髪を手で整え、大きく深呼吸をし、姿勢を正す。そして。

「……………」

互いに言葉は出なかった。会いたくて仕方がなかった人物が目の前にいて、さくらは現実世界から吹き飛ばされた感覚に陥る。一方のひなたは、さくらの顔を見て顔を緩ませた。

「お」

最初に発したのはさくらだった。しかし、後の言葉は続かない。

実は彼女には前々から決めていたことがあった。本当は真つ先に“それ”をするはずだった。けれど、そんな考えは瞬間的に消し飛んだ。自然と彼女の瞳から涙が零れ、さくらは彼の胸に飛び込んだ。ふわりと髪がゆれ、彼女の身体がひなたの腕の中におさまる。

ひなたは一瞬驚いた顔をしたが、彼女を優しく包み込んでその頭をなでた。服を掴んで泣きじやくる彼女は昔と何も変わっていない気がした。

「ただいま、さくら」

それを聞いて、さくらが顔をあげる。涙で濡れた顔で口をぱくぱくと動かす。彼女の言いたいことはよく分かった。

だから、ひなたは笑顔で頷く。

「うん。ただいま」

もう一度言って、ひなたは彼女の涙を拭ってやった。さくらはひなたの胸に強く顔を押し付けて、随分と聞き取りづらい声で彼に伝えた。

「お、おか……おか、え、り。ひ、なた」

ユキナの呆然とした顔を残して2人はきつく抱きしめあったのだ。  
った。

## 七章 『彼女たちは語り合う(1)』

アンフォール唯一の診療所に住み、唯一の医者である彼女の名はさくらといった。名前をつけたのはひなたである。

彼女は自分の親を知らない。いや“親”というのは随分と狭い表現の仕方かもしれない。実際は、ひなたが初めてさくらを見つけたとき、彼女は親も故郷も、その他自分に関する一切の記憶を持っていなかった。

~~~~~

それは、とても暖かい日のことだった。みかげとは別にフブキの情報を集めに行っていたひなたは数週間ぶりに帰郷しようと思い、偶然そこを通りかかった。

女の子の泣き声が聞こえ、ひなたは足を止める。自分と同じ年か、もしかすると少し年下にみえる少女が大きな木の下で泣きじゃくっていたのだ。服はぼろぼろで身体は傷だらけだった。

ひなたは迷うことなく彼女の元に歩み寄った。

「どうしたの？」

彼の問いに彼女は顔を上げた。泣きはらした目が彼を見つめる。その顔からは怯えしか感じ取れなかった。

「ひとりぼっち？」

ひなたは彼女を安心させようと笑顔になったが、それでも彼女の恐怖を取り除くことはできなかった。

「ん……。名前は？」

「う……」

そこで彼女は初めて反応を見せた。しかし、言葉は続かない。口は動くが、それは音を発しなかったのだ。ひなたは首をかしげて彼女の隣に座り込んだ。

「僕は、ひなた」

彼は自分の名を告げることにした。彼女は目をぱちくりさせながらひなたを見つめる。そして口だけ、ひ・な・た、と動かした。音はない。けれど、何かを思い出すかのように、その言葉に何か特別な意味でもあるかのように、何度か、ひ・な・た、と首を傾げながら口を動かした。

「そう。ひなた」

ひなたはそんなことを気にも留めずに、またにかりと笑った。白い歯が見え、彼女も幾分か落ち着いて見えた。……のだが、

「う、ごめんなさい」

ようやく聞き取れる声が出た。が、なぜ彼女が今謝罪の言葉を口にするのかをすぐに理解することはできなかった。ひなたが首を捻ったのも束の間、彼女の顔は再び怯えの色に染まった。原因は彼女の震える指が教えてくれた。彼女はひなたの腰部分を指差したのだ。

「あ」

今度はひなたが声を失う番だった。彼女はひなたが刀を持っていることに気づき、そのせいでがたがたと震えだしたのだ。これはまじい、と思ったひなたは急いで刀を外すと、荷物の中に無理やり詰め込んだ。柄の部分は入りきらず、それだけ飛び出す形になったが、自分は武器を持っていないし、彼女を襲う気はないことを示すためには、とにかく身体から武器の類を遠ざけるべきだと感じたのだ。

「ごめん、なさい。ごめんな」

「大丈夫。僕は別に君に危害を与える気はないよ」

謝り続ける彼女を安心させようと、ひなたは自分が丸腰であることを示してにっこりと笑った。

その顔を見て、彼女は「ごめんなさい」以外の言葉を初めて発した。

「……ほんと？」

「もちろん」

依然として、その表情は硬かったが、とにかく泣き止んだらしい彼女はひなたの顔をじっと観察するように見つめた。

「あ、あのさ。それで、名前は？」

あまりにも強く凝視されたことで照れてしまったのかひなたは彼女から目をそらすと、ややぶつきらばうにそう言った。彼女はその問いにきよとんとした顔を作り、指を唇に当てた。

「……分かんない」

「え？」

「……何も、覚えてない」

思わぬ返答に、ひなたは視線を彼女の元に戻した。そして、ひなたは気づく。当の彼女の顔は憂いに満ちていた。

（記憶喪失？ それとも、何か思い出したくないことでも）

そこまで考えて、ひなたはもう一度彼女の姿を見た。髪の毛は埃だらけ、服は何かに襲われたかのようにぼろぼろ。そして、無数の怪我。

ひなたは何かに襲われ、恐怖のあまりこれまでの記憶を忘れてしまった、あるいは、思い出したくない過去を自らで無理やり消したのではないかと推測した。そして、事実、後者の想像がほぼ当たりであったのだが、彼がそれを知るのは随分と先のことになる。

「じゃ、僕があげるよ」

「え？」

ひなたが言ったと同時に、桃色の花びらが彼女の鼻の頭にのつかった。彼らが背をもたれている木には満開の花が咲いていたのだ。ひなたは知識として知っていたが、ここまで綺麗に咲き誇っているのを実際にその目で見たのは初めてだった。

「さくら」

そうして、彼はその花の名前を告げた。木々の合間をぬって日の光が差し込んでくる。それが彼女の鼻に乗るさくらの花びらを照らし、次の瞬間、風がそれを吹き飛ばした。おまけに、頭上に咲いている花が風によって散っていき、その花びらが舞うのに合わせて彼女の髪の毛が揺れる。

ひなたの目はその“絶景”に釘付けになった。

彼女の長い髪の毛とさくらの花びらが日に照らされ、この世のものとは思えないほどに美しい景色を生み出したのだ。ひなたは今見ている光景ほど美しいものに出会うことは二度とないのではないかと錯覚するほどに心を揺さぶられた。

しばらくして風がやみ、ひなたは彼女の顔を見つめて告げる。優しい微笑みを加えて。

「君は、さくらだ」

「さくら」

さくら、と名付けられた少女は、その言葉を繰り返して、無表情のまま首を縦に振った。そして、微笑むひなたをじっと見つめ、一瞬だけ泣きそうな顔になり、それから再び感情の読めない顔になった。それはまるで、自分が何故泣きそうになったのか理解できない、というような表情の変化だった。

「さくら」

先ほどの奇妙な表情の変化を隠すように、もう一度、言う。今の彼女の表情からは判断のしようがなかったが、ひなたは気に入って

くれたものだと思じて、すっと立ち上がった。
そして、自分を見上げる彼女の顔を見つめ、次の言葉を発しよう
とし、

くう。

間の抜けた音によって、それは妨げられた。ひなたは呆れたように
笑い、それを見てさくらは頬を朱に染めた。

「お腹、すいてるの？」

「ん」

ひなたは荷物の中から水筒と金属の箱のようなものを取り出した。
そして、コップに水槽の中身であるお茶を注ぎ、金属の箱から、彼
が握ったのであろうおにぎりを取り出すと、それを彼女に手渡した。

「食べていいよ」

「でも」

さくらが申し訳なさそうにして受け取らないので、ひなたは無理
やりにそれを彼女の手に持たせた。

「いいから、早く食べて」

「う、うん」

さくらは、まじまじとお握りを見つめてから、それを一口かじっ
た。

「美味しい」

それが、ひなたが見たさくらの初めての笑顔であった。えへへ、という擬音がびたりと当てはまるような、そんな愛くるしい笑顔だった。ひなたはそれを見ている自分の鼓動が早まるのを感じた。その笑顔に魅入られたのだ。

余談であるが、その後ひなたが食にこだわる旅人になる理由は、ここにあった。誰かが“美味しい”と言い、笑顔になることに、ひなたは喜びを見出したのだ。

「良かった」

「ありがとう」

あつという間にお握りを食べ終え、お茶も飲み干したさくらは小さく頭を下げたお礼を言った。

「いいよ、別に」

「ありがとう」

ひなたは何度もお礼を言う彼女を制して、そっと手を差し出した。さくらは首をかしげ、その意味を考えている。

「一緒に行かない？」

その問いの意味を理解していないかのように、彼女はさらに深く首をかしげた。

「言い方を変えるね」

ひなたはさくらの手を掴むと、彼女を立ち上がらせた。しかし足に力が入らないのか、彼女は思わず倒れそうになる。危ない、と思えようとした。そう、支えようとしたのだ。形として抱き合う形になったのは、意図的ではなかった。不可抗力だ。それが、さくらをぎゅっと抱きしめて、顔を真っ赤にしたひなたの頭を駆け巡った精一杯の言い訳だった。

「一緒に行こう、さくら」

そして、そのままの姿勢でひなたは言った。さくらは、ん、と小さく声を漏らすと、彼の胸に顔をうずめて頷いた。

「うん、ひなた。……ありがとう」

こうして、アンフォールに人口がまた1人増えた。

ひなたが背負ってきた少女は、あっという間に、その町になくってはならない存在となる。いつの間にか、そういうことになっていた。度々出かけて行っては、たいてい怪我をして帰ってくるひなたやみかげといった他の町人の面倒を見ているうちに、彼女はその技術を磨いていったのだ。

はじめは、ひなたに対する恩返しのためで怪我の治療を始めたのかもしれない。しかし、どういった理由があったにせよ、彼女が努力をしたことに違いはない。

要するに、彼女は医者としての技術を独力でゆっくりと、しかし確実に身に付けていったのだった。

七章 『彼女たちは語り合う(2)』

「こちらは、ユキナさんとハム吉です」

「は、初めまして」

「おっす」

ひなたが連れてきた女の子と小動物を優しく見つめ、さくらは自分の名前を名乗って頭を下げる。

「初めまして、さくらです」

そして、喋る小動物を前にして興味深そうにじつと見つめた。

「本では読んだことがあったけど、本当にいるのね。人語を操る動物って」

へえ、とか、ふん、とか言いながらハム吉をしきりに見つめるさくらに対して、ハム吉が問う。

「あまり驚かないんだな」

「ん？ だって、あたしの目の前であなたは実際に喋っているんだもの。疑う理由がないじゃない？ 自分の目で見て、自分の耳で聞いたことを信じないわけにはいかないわ」

ハム吉は思わず吹き出すと、そのままごろごろと床を転がった。

「面白い。その答えは、面白い」

突然笑い出した小動物を見て、さくらは首をかしげた。自分はこのハムスターをここまで笑わせるようなことを言っただろうか、と。「や、そんな顔するな。変なことは言ってない。ただ、ひなたと似たようなことを言うな、と思ってな」

さくらはそれを聞いてくすくすと笑い、なるほどね、と声に出した。

「そういうことね。だって、あたしはひなたに育てられたようなものだもの。似てもくるわよ」

「ほお。その辺は興味ある話題だな。でも、今はとにかくあれだ」

さくらはハム吉が顎でしゃくった方に視線を動かした。そこは玄

関先であり、彼女の目が疲労困憊の顔つきで座り込んでいるひなたをとらえる。

「あら。どうかしたの？」

「あ、怪我してるの。それで、ここまでずっと運転してて……」

「そうなの？」

ユキナの言葉にさくらは急いでひなたに近づくと、彼の身体を持ち上げようとし、

「ごめん。手伝ってくれる？」

と、ユキナに助けを求めた。ユキナはそれにすぐに応じると、2人で何とか居間までひなたを運んだ。さくらは奥の部屋から医療道具をいくつか持ってくると、ひなたの前に座り込む。

服を脱がせて、包帯を取る。乱暴に巻かれたそれを見るに、どうやら自分で適当にやったらしかった。呆れ顔で包帯をほどいていたさくらは彼の怪我を目の当たりにして、小さく、あ、と声を漏らした。

「今回はまたひどい怪我ね」

ひなたの首と左手の生々しい怪我を見ながら、さくらはため息をついた。ひなたは苦笑いを浮かべるばかりで、言い訳すら見当たらない。

「でも、無事で良かったわ。随分心配したのよ」

「ごめん」

殊勝に謝るひなたと、彼を治療するさくらを一瞥して、何もすることのないユキナは手持ち無沙汰で机に顎を寄せ、だらしとしている。

「それで、ユキナちゃん、だっけ？ フブキの妹さんを連れて、どうするつもりなの？」

さくらの問いにひなたは微妙な顔つきになった。突然、自分の名前と兄の名前が飛び出したユキナはさくらたちの方に顔を向ける。

「ひとまず、ユキナさんをフブキに会わせようと思ってる」

「何か解決策が見つかったの？」

「見つかった、というか、これから決まる、というか……」

齒切れの悪い物言いに、さくらは小さく笑みを浮かべると、ひなたの頬をつねった。

「はつきりしなさい」

「ふ、ふあい」

ユキナの目に、ひなたは意外なほど情けない男に写った。自分からしてみればしつかり者の兄のように見えていたひなたは、さくらの前では弟のような立ち位置である。しかも、自分に対しては敬語を使い紳士的であったのに対して、さくらにはくだけた口調だというのにも気にかかる。何だかひなたとの距離を感じたのであった。

一方のハム吉はひなたの新たな一面を愉快に感じたらしく、にやにやと笑っている。そんなハム吉の薄ら笑いを知ってか知らずか、ひなたは真面目な顔で口を開いた。

「さくらに頼みがある」

「あたしに？」

「うん」

そこで、ひなたは自分の計画を彼女に話し始めた。無論、ユキナも初めて聞くものであり、彼女も興味津々の顔で彼の言葉に耳を傾けた。

彼の話を要約すると、こうだ。フブキは殺さずに捕らえる。フブキが変わってしまったのは薬のせいだから、元に戻す薬を作ればきつと昔のフブキに戻ってくれる。政府に身柄を引き渡せば、証拠隠蔽のためということでも永久に監獄内で生活するか処刑されるかになると思う。そういった理由から、政府側に薬の開発を任せることはできない。そこで、その薬を作る役目をさくらに担ってほしい。

「と、いう計画かな？」

「……そうね。なんにしても、そのフブキが飲んだという薬の成分が分からないとどうしようもないわね」

「それについては、まあ、きつと何とかなると思う」

ひなたの自信ありげな顔つきに、さくらはある人物の顔を頭に浮

かべて言う。

「だいちな」

「うん」

さくらの言葉にひなたは深く頷くと、

「それで……手伝ってもらえるかな？」
と訊ねた。

しかし、彼の問いに対する答えはすぐには返ってこなかった。それっきり何も言わずに淡々とひなたの手当てをしていたさくらは、それを手早く終えるとユキナに近づいていき、彼女の頭に手をのせた。驚くユキナをよそに、その頭をくしゃくしゃにする。ついで、ハム吉の頭に指を乗せ、なでるようにそれを動かした。

「いいわよ」

そして、くるりとひなたに向き直ってそう言い切った。

「本当に？」 「ほんとっ!？」 「マジか!？」

三者三様に驚きの言葉を述べ、さくらはふふっと笑った。ちなみに、上から、ひなた、ユキナ、ハム吉である。

「ただし、条件があるわ」

「何？」 「え？」 「あ？」

さくらはひなたに近づき、彼曰くとても意地悪な、それでいて凄まじく無邪気な顔で彼の額に指をつきつけた。

「あたしも一緒に連れてって」

ひなた自身、それを彼女の口から聞くのは2度目のことだった。

七章 『彼女たちは語り合う』(3) 『

それは、彼が旅立ってすぐのことだった。

朝、さくらは目覚めると何かが胸に引っかかっているような、なんだか釈然としない気分にとらわれていた。

そして、その気持ちは机の上に置かれた手紙を見て、確信に変わる。いや、それは手紙といえるような代物ではなかった。

ただ、一言。

みなみを頼む。

とだけ、書かれていた。

正直、予感があった。みかげが町を出ていったことは知っていたし、それが彼に何らかの影響を与えたことは確かだった。

今でも鮮明に覚えていることがある。

それが、ひなたの差し出してくれた手と、彼の笑顔だった。

“ひとりぼっち”という病から自分を救ってくれた人。

思えば、多分あのときから、さくらは。

気づけば、自然と足が動き出していた。手紙を握り締め、走り出す。まだ間に合う。絶対に間に合う。



彼女が彼を見つけたのは、町の入口（出口ともいえた）だった。あと少し遅ければ、間に合わなかったかもしれない。

さくらは額に浮かんだ汗を拭いながら、

「待って！」

と、ひなたの後ろ姿に叫び声を投げかけた。ひなたはその声に反応して後ろを振り返る。さくらは彼の顔を見て察した。自分では多分、彼を止めることはできないだろう、と。

「何か用？」

想像以上に冷たい声が、さくらに投げかけられた。しかし、彼女はこのままひなたと別れるわけにはいかなかった。別れるつもりもなかった。

ひなたは無言のまま、彼女の言葉を待っている。さくらは意を決して口を開いた。

「なんで……？」

口を開くと同時に涙が零れそうになり、さくらはそれを必死に堪えた。

「なんで、黙って行っちゃうの!？」

ひなたは、気まずそうにさくらから視線をそらした。そして、何かを考えるようにじっと一点を見つめた。そんな態度にじれったくなっただのか、さくらが叫ぶ。

「答えなさいよ!！」

ひなたは、ゆっくりとさくらの顔に視線を戻した。先ほどまでの思いつめた表情は消え、幾分か柔らかさを取り戻していた。

「あなたと会えば、決心が鈍る」

さくらにとつて、その答えは予想外のものだった。しかも、嬉しいものだった。

「僕はあなたと一緒にいたい。でも……」

堪えきれずに、さくらの頬を涙が伝う。ひなたの顔は苦渋に満ちていた。

「でも、僕は行かないといけない」

彼は覚悟を決めたのだ。さくらもみなみも、さらに故郷をも捨てて、彼を追うことを……。

「……………つて」

とても小さな声だったために、ひなたは最初それが聞き取れなかった。

「あたしも一緒に連れてつて!!」

2回目はしつかりと聞こえた。耳から脳にそのまま届いたのではないかというくらいに、ひなたの頭にじかにその声は沁みこんだ。

もう涙は止まらなかった。止める気もなかった。さくらはそのままひなたの元に駆け寄り、彼の胸に飛び込んだ。

ひなたは困惑気味に彼女をそつと抱きしめる。

「またあたしを、ひとりぼっちにしないで……」

それは、さくらの切実な願いであり、ひなたには彼女の気持ちがよく分かった。

「あなたはひとりぼっちじゃないですよ」

だから、ひなたはできうる限りの優しい声でそう言った。その顔は、すっかり普段のひなたの顔に戻っていた。

「みなみもいるし、仲間もいる」

「でも！」

さくらはひなたを抱きしめる腕の力を弱めない。

「でも……あなたはいいい」

ひなたはさくらを抱きしめたまま彼女の目を見つめて、にこりと笑った。

「全てが終わったら、あなたを迎えに戻ってきます」

その屈託のない笑顔は彼の心からの笑顔だった。

「本当？」

上目遣いに、さくらが訊ねる。

「僕はできない約束はしません」

ひなたはそう言つと、もう一度さくらを強く抱きしめた。

「だから約束します。全てが終わったら僕はあなたを迎えに帰ってきます。必ず」

そうして、さくらから身体を離すと彼女の頭を軽くなで、後ろを向いた。ゆっくりと歩を進めるひなた。

「ひなた！」

その背中をさくらが呼び止める。しかし、彼の足は止まらない。

「行ってらっしゃい！！！」

ひなたは右手を挙げて応える。

さくらは、だんだんと小さくなっていく彼の背中が完全に見えなくなるまで見送った。彼女たちは決して長い付き合いではないが、浅い付き合いでもない。

つまり、彼女は気づいてしまったのだ。彼がしてくれた約束とは正反対の、彼の意志に。

最初、彼が振り返ったときのあの表情が、それを如実に物語っていた。

フブキやみかけを追うということはそういうことだ。

きっと、ひなたは自分が死ぬ（正確には殺される）可能性を考慮に入れて、自分やみなみを置いていくことに決めたのだろう。

一度、ひとりぼっちを経験した者の目の前で、自分が死ぬわけにはいかない。

自分の死で、またひとりぼっちにしてしまっではいけない。

だから、君らとはここで別れる。

ここにいれば、ひとりぼっちじゃないから。

さくらは彼にそう言われた気がして、これ以上彼に縋れなくなつたのだ。彼の約束を“信じる”しかなかったのだ。

彼女はつぶやく。この約束が決して破られないように。ひなたが自分を二度と“ひとりぼっち”にするはずなどない、と信じて。

「絶対に帰ってきてね……」

と。

七章 『彼女たちは語り合う(4)』

その日の夜。

眠りが浅かったのか、不意に目を覚ましたユキナは居間の方から光が漏れているのに気づき、のそりと起き上がると足音を忍ばせて部屋を出た。

廊下をひたひたと歩いて居間を覗く。そこにいたのはさくらだった。机の上に肘をつき、ぼーっとしているように見えた。ひなたはいない。彼女はひとり、ぽつんと座っていた。何をすることもなく、ただそこに座っていた。

それがユキナには異様な光景に思えた。

「入ってきたら？」

突然そう言われてユキナは身体をびくりと震わせた。さくらはこちらに視線を向けるでもなく、しかし、確実にユキナに向かってそう言った。そのまま逃げるのも何だか妙なので、ユキナは居間に入ることにした。そして、やや俯き加減の姿勢でさくらの正面に座った。

「眠れないの？」

「あ、いえ。目が冴えちゃって」

「そう」

さくらの髪をかきあげる仕草にユキナは自然と釘付けになった。

綺麗な人だな、という感想を抱き、ひなたは………というところまで考えて、首を強く横に振った。

「どうしたの？」

「何でも、ないです」

「そう」

さくらは立ち上がると台所へ向かっていた。ユキナはその背中を見送って居間をぐるりと見回した。家具は少ない。食器や衣類もそ

れほど多くない。随分と長いこと、ひとりぼっちで暮らしてきたのだろうか。そんな疑問が頭に浮かび、それはそのまま口から飛び出した。

「さくらさんは、ずっと1人で暮らしていたんですか？」

「ん？」

戻ってきたさくらは手に2つのカップを持っていた。どうやらホットミルクのようだった。ユキナは礼を言つと、それを受け取って息を吹きかけた。熱いのは苦手だ。

「そうね。ほとんど1人だったかしらね。でも、ひなたがいた頃はたまに彼が泊まっていたこともあったのよ」

「……」

さくらはミルクを一口飲み、ふう、と息をついた。ユキナも口をつけるが、まだ熱くて、ちょっとしか口に含むことができなかつた。「それから、ほんの少しの間だったけど、あなたと同じくらいの子と一緒に暮らしていた時期もあったわ」

さくらは遠くを見つめるようにして言った。

「その子は、今？」

「分からないの」

ユキナの問いにさくらは即答した。その顔は不安でいっぱいといった表情だった。

「ユキナちゃんにどこまで話してもいいのか、正直よく分からないの。でも、いずれは言わなくちゃいけないことかもしれないし……」
しばし逡巡の時間を置いたさくらであつたが、ユキナがごくごくと飲めるくらいにホットミルクが冷めたころ、ゆっくりと口を開いた。

「ひなたが出ていってすぐにね、その子は彼を追って町を出たの」

「え？」

「だからね。ひなたが女の子を連れて脱走したっていう記事を読んだとき、あの子と無事に会えたのかしら、って思ったわ。違つたみたいだけど」

さくらは悪戯つぽく笑って、小さく舌を出した。付け加えた一言が余計だったことを恥じるような仕草だった。

「……そのことを、ひなたは？」

「気づいてはいるんじゃないかしらね」

さくらはカップを両手で包んで、それを覗き込むような姿勢になった。

「ここに彼女がいない時点で疑問には思っているんじゃないかしら。まだ、きちんと説明したわけではないんだけど」

「そうですか」

ユキナはなんとも言えない気持ちになった。

自分がフブキを捜しているのと同じように、誰かがひなたを捜している。誰かが誰かを捜すということは、世界中の至るところで行われていることだろう。しかし、捜し人を実際に見つけ出せる可能性はいくらくらいなのだろう。その子がひなたを見つけ出せれば、自分も少しは希望をもらえるだろうか。

「ユキナちゃんはお兄さんを見つけて、元に戻して、それからどうしたいの？」

「え？」

唐突な問いにユキナは固まった。兄を見つけて、元に戻して、それから……。

「一緒に暮らしたい？」

「それは、そうです」

「だったら、ひなたは？」

「え？」

答えは、いくら考えても出そうになかった。もし、もしもだ。全てが上手く解決し、昔のフブキがユキナの前に帰ってきたとしよう。そうしたら、ユキナは確実にフブキと一緒に暮らしたいと願うだろう。だが、そうなるとひなたはどうなる。出会ってから、それほど長い時間を共に過ごしたわけではないが、ユキナにとって、ひなたと別れることになるなどありえない事態といえた。

「あのね、ユキナちゃん」

「な、なんですか」

その声に、かなりの真剣さがこもっていることに気づいてユキナは姿勢を正した。さくらはそんな神妙な態度とは裏腹に、何でもないことであるかのようにさらっと言った。

「ひなたがフブキと戦うことになったら、きっとどつちかが死ぬわ」

それを想像しなかったわけではない。むしろ、ひなたとだいちの会話を聞いていると、そうなるのが必然であるようだった。

だからこそ、ユキナはそれについてできるだけ考えないようにしてきたのだった。しかし、目の前の女性はそれを許さない。彼女は乾いた声ではつきりと言いつつ切った。

「特に、ひなたはユキナちゃんのために死ぬ気かもしれないわ」

七章 『彼女たちは語り合う(5)』

「……」

「あの人は、それくらいしでかすわよ」

そう言うさくらにユキナは挑戦的な瞳を向けた。そして、強い意志を持って口を開く。

「ひなたは死なせません」

その声は先ほどまでの少女が発したものとは思えないほど力のあるものであった。さくらは少し驚き、目を細めた。

「死なせません」

「そんなに上手くいくかしら？」

「分かりません」

ユキナは目をそらさずに続ける。さくらはミルクを飲むと、続きを促すように視線を送った。

「これまで、私はひなたや……兄に守ってもらってばかりでした。

そして、多分これからも、守ってもらえばかりになると思います。

私は弱いから。でも、だからって守ってばかりじゃいけないことはよく分かっています。だから、だから私は

「そういうのは良くないと思うわ」

さくらはきつぱり言って、ユキナの額をこづいた。すると、これまで硬い表情だったユキナの顔が徐々に緩んでいく。

「あなた、思いつめると突っ走るタイプみたいね。ん〜ん。やるべきはやるタイプって言った方がいいのかしら？ ただのか弱い女の子ってわけでもなさそう」

「そ、そうですか？」

「なんていうのかしらね。ひなたと一緒にいる時点で普通の女の子だとは思っていなかったわ。あの人は女運が悪いつていうのかしらね。一癖も二癖もある子にからまれやすいのよね。人が良いからかしら」

さくらは、ふふつと笑って言った。ユキナは反応に困って愛想笑いを浮かべた。と、突然さくらは笑みを消して、ぐいと身体を乗り出してきた。

「ユキナちゃんが考えていることは最後の手段にしなさい。いい？命を賭ける、っていうのは、そんなに簡単なものじゃないわ。それにね、ひなたはあなたを守りたくて戦うわけじゃない？ それなのに、あなたに守られて助かるなんて辛すぎると思うの」

「で、でも、私だってひなたに守られて、それでひなたが死んじゃったら……」

「バカね」

「な、何ですか？」

さくらは笑顔になる。その笑顔は100人いれば99人は見惚れるであろう笑顔だった。

「守られるのは、女の特権でしょ？」

ユキナは、まさに鳩が豆鉄砲を食らった状態になった。ぽかんと口を開け、目も大きく見開いた。

「へ？」

「っていうのは、冗談でね。ん〜、なんて言うのかしら。そもそも、ひなたに守ってもらえるなんて、とても贅沢な悩みだと思うのよね」

「え？ えーつと……え？」

さくらはユキナの頬を思い切り引っ張った。ユキナは、いたたと小さく漏らして頬をさする。

「今のは忘れてちょうだい」

「え？ あ、は、はい」

注意深く見れば、さくらの頬はやや朱に染まっていたのだが、ユキナはそれには気づかなかった。頬をさするのに気がいつていた、というのがその主な理由である。

「ユキナちゃん、ひなたを守って、あなたが怪我をしたら、きつとひなたは悲しむわ。それが理由じゃ不服かしら？」

「い、いえ……」

有無を言わせぬさくらの声の響きにユキナは頷くしかなかった。でも、とユキナは思い、腰の短剣に手を当てた。もしものときは……。

「そろそろ寝ましようか？」

さくらはそんなユキナの表情に気づかない振りをして2人分の力ツプを持って立ち上がった。ユキナは、はい、と答えて一足先に寝室として借りている部屋に戻った。扉を閉め、ベッドに向かう。その途中、ふと気づいたことがあった。

急な訪問にも関わらず、ここは随分と綺麗に片付けられていた。もしかすると、この部屋はさくらと一緒に暮らしていたという少女が使っていた部屋なのではなからうか。

そう考えたせいで、やや複雑な心境で布団に潜り込んだユキナであったが、連日に渡る騒動による疲労に、ホットミルクで身体が温まったことも合わさって、あつという間に寝息を立て始めたのだった。

~~~~~

「僕を捜しに、ね……」

そう独り言ちたひなたはベッドに倒れこむようにして寝転がった。

彼女には自分の剣術をきつちりと教え込んだはずだ。料理の腕には難点があつたが、そう簡単に死にはしないだろう。そう言い聞かせながらも、ひなたは胸の奥に沈んだ錘のような不安を取り除くことはできなかつた。

「縁があれば、また会えるだろう」

無理やりにそう結論付けたひなたは、目をきつく閉じ、そのまま思考を閉ざすように眠りについた。

夜が更けていく。

~~~~~

それから幾日か時がながれることになる。

その間、例の脱走劇により、ひなたとユキナの賞金額は若干あがつたという情報を得たが、そんなことは彼らにとってさして気に留めるような事項ではなかつた。さらに、みかげがまたどこぞの街を襲つたという記事や、政府側がフブキ・みかげ・ひなたの捕獲に向けて特別部隊を編成した記事なども新聞に載つたが、それもそのまま彼らの心を揺り動かす力を有してはいなかつた。

つまり、彼らは無駄に心を乱されること無く久しぶりに平穏な数日を過ごしたのであつた。

さて、さくらの治療により、ひなたの傷がある程度の治りを見せたところで、彼らはアンフォールを出ることにした。

さすがにバイクで3人と1匹を運ぶのは不可能だということ、ひなたたちはさくら宅の車を利用してもらうことにした。アンフオールは狭くて道の悪い場所を抜けたところにあるため、その道を何度も通った経験のある車はどう控えめに言ってもぼろぼろのずただった。そもそもこの車は外からひなたが持ち込んだものであり、彼曰く、初めからこのような風体だったと言うが、どこまでが真実であるかは彼のみぞ知ることである。

「では、参りましょうか」
「うん」

助手席にさくらが座り、後部座席にユキナとハム吉が飛び乗って出発の準備が整った。ひなたの旅荷物にさくらの医療道具、それからユキナが家から持ち出した荷物をトランクと座席に分けて置いて、あと1人くらいは余裕で乗れそうだった。

「あてはあるの？」

さくらが問い、ひなたが困ったように苦笑いを浮かべる。

「フブキの場所を特定するのは厳しいだろうから、ひとまずはみかげの動きを追うか？」

ハム吉がひなたの肩に前足を乗せて言い、さくらがそちらに視線を移す。

「でも、みかげの居場所なんて分かるの？」

「ああ。臭いがする」

「そんな能力があるのなら初めに行ってくださいよ」

ひなたがため息をつきながら言い、ハム吉は大声を上げて笑った。

「すまん、嘘だ」

「はい？」

「あのときに政府の本拠地にいたこと、それから、数日前に新聞に載っていたみかげの襲撃事件の位置から計算して、奴が今いるであろう場所を推測すればいい」

ハム吉は、いつもとは違う知的な表情を見せ、ふふん、と笑った。「それは、本当にできるんですか？」

「もちろんだ。俺が誰だか忘れたか」

ハム吉の自信満々な視線にひなたは苦笑を浮かべて首肯した。

「信じましょう」

ひなたはエンジンをかけ車を発進させる。

「では、ナビは任せます」

「おう」

そして、ひなた一行は進む。新たな波乱の中へと。

がら後ろを振り返る。顔も服も泥だらけになったが、そんなものに構っていられなかった。

震える手で刀を抜き、なんとか構える。しかし、立ち上がることはできない。腰をついた姿勢のまま、少女は必死の抵抗として刀を構えた。

自分の目で見た事実が信じられない、と思ったのは久しぶりのことだった。

彼女が最後に信じられない人だと思ったのは、風のように走ることができる男だった。しかし、今日の前にいる男はそれすらを軽く凌駕していた。まるで光の速度かと思うくらいの一瞬間のうちに自分に接近してきた男は、やはり無表情のまま小さなナイフを握っていた。そして、そのまま速度を緩めることなく彼女の首をかつきろうとつつこんでくる。

「ひー！」

そんな少女の叫び声は、かき消されることになった。ナイフを弾き飛ばす金属特有の音が鳴り響いたからだ。

少女は自分を救ってくれた男に視線を動かす。それは彼女が求めた人物ではなかった。むしろ、会いたくない人物であった。

「悪かったな。あいつじゃなくて」

紅い髪を有する男だった。彼は、にやっと笑うと、とんとんと

自分の肩を刀で叩く。少女の記憶によれば彼は銃使いだったはず。いつの間に刀など扱えるようになったのだろうか。

「さて、手前を助ける義理はねえが、こいつには用がある。手前は目障りだから、さっさと消えな」

舌なめずりをして“獲物”を睨み付けたみかげは刀を構え“獲物”と対峙した。少女は自らがひどく怯えており、そのせいで身体中が震えてしまっていることに悔しさを覚えると、きつく唇をかみ締めたが、彼の言うとおり自分はこの場に似つかわしくない存在だと理解し、何とか身体を引きずって這うようにして逃げ出した。

みかげは少女が消えていくのを確認しながら、取り出した煙草に火をつけて瞳を怪しく輝かせ、表情のない“獲物”に微笑みかけた。「搜したぜ、フブキ」

“獲物”はフブキは、まるで無駄のない動作で“化け物”が扱うにふさわしい剣をすつと抜いた。

~~~~~

どこをどう走ったかは覚えていなかった。すっかり日は沈み、もともと暗かった森の中が完全な闇に包まれたころ、息をきらしてたどり着いた場所に少女は身を隠した。そして、恐怖やら疲労やらが限界に達したのか、そこでぱたりと意識を失ったのだった。

目が覚めたとき、いったい何日が経過したのかは分からなかった。ただ、太陽が上に昇っていたことと、自分のお腹の減り具合から判断して、最低でも丸1日は眠っていただろうと結論付けた。これだけ時間が経てば、あの“化け物”もみかげも近くにはいなくなつて

いるだろう。

そう思って安心した少女は起き上がると自分の身なりを見て驚いた。いくら無我夢中であったとしても、この汚れようは凄まじかった。彼女はため息をつくと近くに川や滝がないかと思い、とりあえず歩き出そうとして一歩を踏み出した。

そして、あの音を聞いた。

## 八章 『彼女は彼に救われる(2)』

アンフォールを出て数日が過ぎた。ハム吉のナビによると、次は森の中に入らなければならないようだった。

「せっかく、ここ2、3日は広くてのんびりとした道を進んできたのに、わざわざ森に行かなくても……」

真っ先に不満を漏らしたのはユキナだった。ハム吉がそれを聞いて強気に反論する。

「バカ。こつちが近道なんだよ。一刻を争ってるだろうが」

「でも妙な胸騒ぎがしますね」

ひなたがハンドルを手に厳しい目つきになった。さくらがその顔を覗き込み、首をかしげた。

「嫌な予感、つてことかしら？」

「いや、なんていうか……嫌な予感というよりは不吉な感じかな」

「そう」

さくらも森の入り口を見つめる。ひなたにそう言われると、なんだか魔物が口を開けて待っているように思えてくるから不思議だった。

「とにかく行こうぜ。ナビは、俺だ」

「そうですね」

この中で、最も小さいくせに最も偉そうなハム吉に従い、ひなたは車を発進させる。車は森に飲み込まれた。

~~~~~

「……車？」

こんな木だらけで狭い場所を車が走っている。いったい、どんな世間知らずか、あるいは無法者か、それともバカか。少女は興味をもったのか、車の音がする方向に向かっていった。

がたがた、という音がし前方に小さく車が見えた。少女は茂みに身を隠すと、タイミングを見計らって飛び出してやるうという計画を立てた。

“化け物たち”を目の当たりにしたことや何日か意識を失っていたことから、先ほどまで少女の顔は疲労で強張っていたが、車の音を聞いたときからゆっくりと、しかし確実に気持ちは浮つき始めていた。そして、歳相応の顔で無邪気に笑った少女は計画通り飛び出した。

~~~~~

「ひなたっ！」

叫んだのは、さくらだった。茂みから“真つ黒な怪物”が飛び出してきたのだ。ひなたは慌ててブレーキを踏み、その反動でユキナは前の座席にぶつかり、ハム吉はフロントガラスまで吹っ飛んだ。ふぎゃっ、という声のおまけつきで。

「……子ども？」

それはユキナの発言だった。突然現れたので、ぱっと見では怪物に見えたが、それは服や顔を泥だらけにした少女だった。

「ねえ、ひなた」

「ああ」

「あの子って、ねえ？」



「ああ」

ひなたはさくらの問いかけに口を“あ”の形に開けたまま、機械的に音を発した。少女も運転席と助手席に座る人間を確認すると、ひなた同様に口をぽかんと開けて静止している。

「どうしたの？ 二人とも」

「俺を心配しろ」

ハム吉の言葉は無視して、さくらはユキナの質問に答えた。

「あの子よ」

「え？」

「あたしが一緒に住んでいたっていう子」

さくらが答え、ユキナの顔が驚きの表情に変わると同時に、ひなたがドアを開けて外に出た。そして、少女に歩み寄りながら笑顔で言った。

「久しぶりだな、みなみ」

みなみ、と呼ばれた少女は相変わらず口を開けっぱなしにして、近づいてくるひなたを見上げていた。

「え？ え？」

それは、ひなたが近づいてきて、みなみの頭を乱暴になでてやるまで続いた。ひなたの手が触れ、彼の顔が近づき、

「みなみ、だよな？」

という声を聞いて、みなみは初めて動きを見せた。

「ひ、ひ、ひな兄い！」

泣き叫びながら抱きついたのだった。それを見て軽く眉を動かしたのはさくらで、分かりやすく目を吊り上げたのはユキナだった。ハム吉は、お、と言いにやにやと笑った。

「何やってんだ、こんなところ」

ひなたの言葉は最後まで続かなかった。いつの間にか車から降りてきたユキナが腕を組んで仁王立ちした格好でひなたの背後に立つ

たのだ。

「誰？」

正直な話、このこみ上げてくる感情がいったいなんなのか。そのときの彼女は理解していなかった。さくらとひなたが会話をしている姿を見ても、このような感情は生まれなかった。もやもやした何かを感じたことはあったが、それでも、ここまで爆発的な感情は生じていなかった。しかし、今はどうだ。自分と同じくらいの相手（女の子）が、ひなたの胸に顔をうずめている姿を見て、何かが破裂したとしか思えないくらいに、彼女の感情があふれ出したのだ。

端的に言えば、ユキナはやきもちを焼いていた、ということになる。

「あ、この子は、みなみと言ってますね。最も適切な表現を選ぶなら、僕の“家族”ですかね？」

「家族？」

じろり、とした視線を向けるユキナに対して、みなみはひなたの胸から顔を離すと彼には見えないように笑ったのだ。

にやり、と。挑戦的であり、かつ蔑むような視線を加えて。

「あんた」

「久しぶりね、みなみちゃん」

今にも飛び掛ろうとするユキナを制して、みなみに近づいたのはさくらだった。みなみはさくらに気づくとユキナに向けた表情を一変させ、笑顔を浮かべて彼女の胸に飛び込んだ。

「久しぶり、さくら」

さくらがみなみの頭をなでてやる様子は、さながら姉妹のようであった。ひなたはその様子を満足げに眺めると、ハム吉を肩に乗せ、「それにしても、その格好はまずいな。着替えを取ってくるからちよつと待ってる」

とみなみに向かって言い、車に戻った。荷物をあさるために後部座席に乗り込むと扉を勢いよくばたんと閉める。

みなみはちらつとその様子を眺め、声量を落とせば彼に自分の声

が聞こえることはないだろうと判断し、すつとさくらから身体を離すと冷めた視線をユキナに向けた。

「相変わらず、生意気な目をしてるわね」

さくらはみなみの頬をやや本気めに引っ張り、みなみが、ふがふが、と漏らす。

「うるひゃい」

「口の聞き方には気をつけなさいよ」

さくらは妹、あるいは娘をからかう様にみなみを弄び、対するみなみは姉、あるいは親に反抗するかのようじじたばたと暴れた。

その光景を眺めていたユキナは敵意丸出しのみなみに驚き、そして呆れた。

「あの……」

「で、あんた誰？」

ユキナの言葉は、すぐさま遮られた。みなみの重い声がユキナを睨む。

「私は、ユキナだけど」

「ふ〜ん」

品定めするようにユキナを見つめまわして、みなみは鼻で笑った。「さくらはともかく、なんであんたみたいなのがひな兄と一緒にいるわけ？」

「それはあたしから説明するわ」

いやにユキナにつつかかるみなみを制して、さくらが事の次第を説明した。ユキナが例のフブキの妹であること、そしてひなたが彼女を兄に会わせてあげようとしていることなどを聞いて、みなみはみるみるうちに不機嫌な表情に変わっていく。

ころころと表情の変わる様はまだまだ子どもよね、とさくらは思ったが、それを言うともみなみがすねるので決して口には出さなかつた。

「言うっておくけど」

そう前置きして、みなみはユキナを睨み、それから遠慮がちにさ

くらにも視線を向けた。

「ひな兄は私のだから」

その一言で、気づいた。目の前にいる生意気な少女は自分とは決して相容れない存在だ、と。言わずもがな、気づいたのは、ユキナとみなみの2人ともである。

「よくわかんないけど、私、あなたのこと嫌いかも」  
「安心して。私もだから」

ユキナが言い、みなみが答える。さくらは呆れたように首を横に振ると車に視線を戻した。ひなたが戻ってこないか、と様子を窺ったのだ。

## 八章 『彼女は彼に救われる(3)』

「なるほど。ただの可愛い妹ではないわけか」

「彼女もなかなかにきつい過去を持っていますからね。やや屈折しているのは見逃してあげてください」

みなみの顔を拭いてやるために取り出した大きめの布と、着替えのためのユキナの服（もしかしたら、すこし大きいかもしれないが、それでも今着ているものよりはましだろうと判断した）を手に、ひなたとハム吉は車の中から3人の様子を観察していた。

「女って怖えな」

「人間は皆怖いですよ」

そこで、ひなたとさくらの視線がぶつかった。困ったような視線を向けたさくらを見て、ひなたは小さく笑う。

「助けてくれ、とのことですよ」

「そうか。確かに一触即発って感じたもんな」

ハム吉は苦笑を浮かべたが、ひなたは顔を引き締めると低い声で語る。

「みなみは多分ユキナさんと同じか、それより年下だと思えますが、あの歳で十分に戦えるくらいに鍛えています。僕が教えたわけですが……。さらに、僕を追って町を出た、ということは数年ほど旅をしていることになりませう。その間に見たくないものが見えたり、聞こえたくないものが聞こえたりしたんじゃないでしょうか」

「ん？」

急に語りだしたひなたの言葉が、これまでの流れと無関係な気がしてハム吉は首をかしげた。

「つまり、彼女は見た目よりはるかに大人で、はるかに冷静に物事を判断できる、ということですよ。ユキナさんは実戦経験も少なすぎますし、事が起これば、確実にみなみはユキナさんを捕らえることが可能でしょう。けれど、踏みとどめるべき場所はきちんと理解し

ていると思います。彼女は試しているんですよ。ユキナさんが、どの程度の挑発に食いつくくらいの存在なのか。もつと言えば、彼女は自分が認めるに足る人間なのか、ということを」

「ほお……。つつうことは、俺らはどうすればいい？」

「できることなら、もう少し成り行きを見守りたいところですよ」

そんなひなたの顔を見上げてハム吉はため息混じりに口を開く。

「だがなあ、ひとつだけ言っていていいか？」

「なんででしょう？」

ひなたが問いかけると同時に前方で火花が散った。みなみの刀と

ユキナの短剣がぶつかったのだ。

「うちの姫は、我慢をしない」

ハム吉のつぶやきに、ひなたは急いで外に足を踏み出した。

「そうでした。うちのお姫様は“何も”知らないんです」

~~~~~

「何で、あんたみたいな弱そうなのがひな兄と一緒にいるわけ？」

「弱そう？」

「うん、弱そう」

ユキナは、ふふん、と自慢げに鼻で笑うとポケットから自らの手配書を取り出して、彼女の目の前に広げて見せた。例の脱走により、懸賞金は少し上がっている。3,200万\$。それが今の彼女の賞金額だった。

もともと手配書にはそれ自体がある程度の力を持っている。手配書には顔写真、賞金額、名前が書かれている。と言うことは、だ。手配書が出回ると言うことは自然と自分の噂が広がるということだ。

もある。つまり、それは戦いを有利に進めることにつながる。なぜなら、手配書を相手に見せるといった行為、あるいはそこまでせざるも名前を言うだけの行為であっても相手を怯ませるのに有効であるからだ。例えば、知名度が上がれば、それによって戦うことなく相手が怖れをなして逃げ出す、といったことも十分にあり得るということだ。

ただ手配書を見せるといのは、まだ自分の名声に不安があることとの表れでもあった。相手に信じ込ませるためにはきちんとした証拠がなければままたまらない、と自分の手で示しているようなものだからだ。ひなたやみかげといった高額の賞金首は、手配書どころか名乗らずとも顔を見ただけで相手が逃げ出すほどだ。

手配書には、そういった効果があるという点で、悪党たちは自分の額が上がるたびに喜びをかみ締める場合もあった。

そして今回、ユキナにそのような知識があったかは別に、彼女は手配書を示した。3,200万Sならば、一部の者を驚かせる程度の威力はあるだろう。

しかし、残念ながらみなみには通用しなかった。

「たかが3,200万で何自慢してんのよ？」

「う……」

ユキナはそう言われて手配書をそくさしまつと、短剣を抜いた。

「抜いたね？」

え、という間もなかった。

「先に仕掛けてきたのはあんただからね」

瞳をぎらぎらと光らせながら、みなみが言う。短剣があつという間に抑えられ、じりじりと後退していきながら、ユキナは額に汗を浮かべた。

「あんだ。その使い方知らないでしょ？ 戦い方も知らないくせに、そんなもん持ってるんじゃないわよ」

「うるさい」

体格もさほど違わないというのに、この力の差はなんなのだろう。ユキナはそう思いながら、このままではどうしようもないと感じた。2人が急に戦いだしたのを見て、さくらは慌てて止めに入ろうとするが、車のドアが開いた音に気づき、そちらに顔を向けた。

こんな状況にも関わらず、にこやかに笑みを浮かべたひなたが出てきて、さくらに小さく手を振った。

(さつさと止めなさいよ)

目でそう合図して、ひなたが頷く。彼はさくらに近づくと、車から持ち出した布と服を手渡した。

そしてすぐさま、彼女の目の前を風が吹きぬけた。

~~~~~

「あれ？」

「ふえ？」

いきなり足場を失ったみなみが声を上げ、自分を押さえつけていた力が消えたことに驚いたユキナが間の抜けた声を漏らした。

「あまりユキナさんをいじめないでください。うちの大事な“お姫様”ですのよ」

「だって、ひな兄。こいつ、むかつくんだもん」

みなみはふくれっ面でじたばたと暴れた。ひなたが彼女の襟首を掴んでひょいと持ち上げた姿は、悪戯を見つかり兄に捕まえられた妹そのものであった。

「ユキナさんも、そんな物騒なもののはしまってください」

「ん、あ、うん」

殊勝に頷いて、ユキナは短剣をしまった。それを見てひなたは満



足げに頷くと、つづいてみなみに声をかける。

「みなみもしまいなさい」

「でも！」

「しまいなさい」

「う……はい」

みなみが刀を鞘に戻すのを確認してから、ひなたはみなみを地面に下ろした。それからさくらから布を受け取ると、乱暴に顔の汚れを拭ってやった。

「さくらの持つている服に着替えなさい」

ひなたは布をみなみの頭にかけて、次にユキナに向かっていき、軽く頭を下げた。

「お騒がせしてすみません」

「ん、いや、別に」

ユキナはまだ不機嫌ではあったが、ひなたに頭を下げられ、困ったように手をふった。

「では、仲直りしましょう」

唐突に屈託なく笑ったひなたは、その言葉で全員の注目を集めた。さくらとハム吉は呆れたように額に手を当て、ユキナとみなみは頬をひくつかせた。

「ま、まあ、ひな兄がそう言うなら、あんたと仲良くしてあげてもいいけど？」

みなみは意外にも素直にすつとユキナに近づくと、右手を差し出した。

「偉そうに……」

ユキナはそれに応じて彼女の手をつかむ。

それはもう持てる力全てを右手に集約して思い切り握る。

みなみも同じことを考えていたようで、2人の手がぎしぎしいうくらくらいきつく結ばれた。

「離したら？」

「……あなたがね」

両者とも一歩も引かない様子を見て、

「いい加減にしとけよ」

ハム吉がそう漏らした。

2人の視界の隅で、ひなたの頭が「バカ」という小さな声とともにさくらの叩かれた。

みなみはそれを見て、なんだか懐かしい思いにとらわれる。そして、目の前のユキナのことなど忘れて、あの日々のことを思い出したのだった。

## 八章 『彼女は彼に救われる(4)』

少女が目覚めると、青い空が見えた。瞳にたまった涙を拭って、ゆっくりと体を起こす。木々が揺れる音が耳に入り込んでくる。こんな森の中を、幼い少女がいるというだけでも不思議なのだが、彼女は荷物を一切持っていなかった。どうやら旅人というわけでもなさそうだ。

太陽が雲の隙間からひよこつと顔を出す。と、ひゅーつと彼女の髪を一陣の風がなびかせた。少女は無意識のうちに(そう、それは確かに無意識だった)視線を風が吹いてきた方向にやり、そこに心を静めて精神を統一させている男の後ろ姿を見つけた。彼は蒼い髪の毛を持っていて、少女よりは年上のようなようだが、まだ幼さの残る顔をしていた。

ぴくつと彼の眉が動く。

「誰だ？」

彼は目を閉じたまま言う。無論、先ほど眉が動いたことも、彼が目を瞑っていることも、少女の立っている方向からは分からない。少女は慌てて木陰に身を隠す。

「隠れても無駄だ」

彼は依然として目を閉じたまま静かに言う。少女は観念したのか、木陰から出てくると男のほうへ近づいていく。

「女か？ ……どうしてこんなところにいる？」

男は後ろを振り返ると、片目だけを開けて少女の姿を捕らえた。腰にさげた刀がやや不釣合いではあったが、年齢の割りに大人びているようだった。

「わ、私……」

少女が口を開く。その声は若干震えていた。男は自分の周りにあるものが全て敵であるかのようにかなりの殺気を身にまとっていたのだが、その雰囲気も次の瞬間、一変する。

少女は泣いているようだった。

「な、泣くんじゃねえよ」

男はさつきまでの殺気を取り払い、少女の元に近づいて行って頭をなでてやる。

「私……ひとりぼっちになっちゃった」

あまりにも突然の告白。

「お母さんも、お父さんも……私……」

男は戸惑いながらも少女の涙を指で拭ってやる。

「えーっと、まあよく分からねえが、行くところがないならここにいてもいいぞ」

その言葉を聞いて、少女の顔が、ぱあっと明るくなった。

「いても……いいの？」

「ただし、僕の修行の邪魔をするなよ？」

男はそう言うと、すたすたと森の奥に入っていく。少女はそのあとを小走りですいていった。

~~~~~

「こ、こんな重いのも、持てない」

少女は見よう見まねで丸太を持つとする。しかし、丸太はびくりとも動かず、少女はただ唸るばかりだ。

「おいおい。お前じゃそれは無理だろ」

男は自分の体の何倍もある丸太を片手に1つずつ持ち、それを持ったまま彼女の前をどんと進んでいく。

「わ、私も強くなりたいの！」

「あ？」

男が振り返ると、少女は未だに丸太を持ち上げようと奮闘しているところだった。

「強くなつてどうするんだよ？」

男は足を止め丸太を置く。ズシツという音が辺りに響いた。

「分からないけど」

「なんだよ、それ……」

男は呆れ気味に言つて、ため息をついた。

「じゃあさ、じゃあ、えつと……」

「どうした？」

何かを言おうとして、口をつぐんだ少女に向かって男が言う。

「お名前、なんだっけ？」

少女が首を傾げる。その姿を見て男は小さく笑つた。

「ああ、ひなただ」

「ひなた……ひなた……」

少女は何度も何度も呪文を唱えるかのように“ひなた”と繰り返した。

「お前は、なんて名前なんだ？」

「えつとね。私は……みなみ」

少女は明るい笑顔でそう言った。

「そうか、みなみか」

ひなたは微笑みながら言う。そして、ふとこんなことを思った。

(こんな気持ちになつたのは、随分と久しぶりだな)

「それでね、えつと……ひな兄？」

みなみは明るい声でそう言った。

「あ？」

みなみの言葉に、ひなたは口をぽかんと開けた。

「えつと、えつと……ダメ、かな？ ひな兄つて呼んじゃ……」

みなみの顔は真っ赤だった。ひなたはそんな顔を見て、嫌だ、と

言えるはずもなく、

「好きにしる」

と、敢えてぶっきらぼうに答えた。その返事を聞いて、みなみは満面の笑みを浮かべて、ひなたの腕にしがみつく。

「おいおい！」

ひなたは抵抗するような素振りをみせたが、みなみがとても幸せそうな顔をしているので、無理やり引き離すというようなことはしなかった。

「あつ、それでね。さっきの続きなんだけどね」

（さっきの？）

ひなたはさっきのことが何だったかを思い出そうとしたが、彼が思い出す前に彼女が言葉を続けてくれた。

「ひな兄は、なんで強くなりたいの？」

（ああ、その話ね……）

みなみの言葉で先ほどの会話を思い出したひなたは、その問いに答えようとした。

（ちょっと待てよ）

しかし、なんと答えればよいのか分からなかった。

（この子に、それを話すのか……？）

仇を討つため、という危険極まりない理由を、目の前にいる無邪気な子に話しても良いものだろうか、とひなたは苦悩した。

そして、そのせいでしばらく何も答えないひなたに疑問を抱いたのか、みなみが語気を強めた再び訊ねた。

「ねえ！　なんで？」

無邪気だな、とひなたは思った。まさか目の前にいる男が、蒼風という名で怖れられている悪党だとは微塵も疑っていないような輝いた瞳をしていた。

（ひとりぼっちになったっていうのに、こんなにも楽しそうにしていられるのか）

ひなたはみなみの顔をじっと見つめる。それに特に意味はなく、

ただ考え事をしていただけであつたのだが、彼に見つめられて照れてしまったのか、みなみは朱に染まつた顔を背ける。

（僕は何をやつてるんだ。あいつみたいに暴れまわっても意味なんてないじゃないか）

最近のみかげに感化されたのか、ただひたすらに暴れまわっていた自分を冷静に見返してみても、彼は呆然とした。確かに仇を討つために強くはなりたかつた。

けれど。

彼の胸を激しい後悔が襲う。仇を捜すために情報をかき集め、仇を討つために腕を磨く。そのためにいくつもの悪事を働いてきた自分を省みて、彼は自分を殴りたい気持ちになつた。

（僕が殺してきた人たちにも、家族はいたんだよな……）

それは当然のことであるはずなのに、ひなたはそれを失念していった。危うく、自分を止めることができなるところまで連れて行ってしまうところだった。なるほど。だいちが僕たちと離れた理由は、そこにあるのかもしれない。ひなたはそう考え、首を横に振つた。そして、ふとひなたは先ほど、みなみが自分を“ひな兄”と呼んだことを思い出す。

（もしかして、この子は家族が欲しいんだろうか……）

みなみはようやく顔の火照りが収まつたのか、背けていた顔を元に戻す。

（いや、家族のぬくもりが欲しいのかもしれないな……）

ひなたは何も言わず、そつとみなみを抱きしめた。生き別れになつていた妹を優しく抱きしめる兄のように。

「えっ！ ちよ……ひな兄!？」

せつかく落ち着いたというのに、また顔が赤みを帯びていく。ひなたはみなみを抱きしめたまま言った。

「大切な人を守るためかな？」

「ええ？」

そうして、ゆっくりと体を離すと、みなみの顔をじっと見つめた。
「僕が強くなりたい理由」

守りたい。その言葉に嘘はなかった。初めは、そのつもりで戦ってきたのではなかっただろうか。

自分たちと同じように“ひとりぼっち”になった人たちを守りたくて、あるいは自分たちと同じように誰かが“ひとりぼっち”になっ
てしまわないように、戦っていたのではなかっただろうか。それ
がいつしか、ただ強くなりたい、という気持ちが大きくなりすぎて
……。

真っ赤な顔で動転しているみなみが目の前にいて、彼は微笑みを
浮かべた。

（久しぶりに、帰ろうか）

ひなたは立ち上がってみなみに手を差し伸べた。

（“あいつ”に会えば、少しは救われるかもしれないし）

彼女もそつと彼の手を握り返してきた。

「行こうか」

「どこへ？」

「うちへ」

ひなたは、にっと笑う。みなみは、こくと頷くと、彼の手を握
る力を強めた。

「あ、そうだ」

そして、ひなたは何かを思いついたように声をあげた。そして、
意地悪な口調で言う。

「新入りは、今日の夕食当番だな」

「え？」

ぴたりと動きを止めたみなみを見て、ひなたの方が驚くはめになった。

「どうした？」

「料理、したことない……」

それを聞いて、ひなたは、ははっ、と声をあげてわらった。一方のみなみは馬鹿にされたと思い、ぷくつと頬を膨らませる。

「大丈夫。うちには料理の得意な“先生”がいる」

みなみは、まだむっとした顔をしていたが、内心、とても楽しかった。ひとりぼっちだった自分を救ってくれた人を見つめ、さっきまで泣いていたことも忘れて彼女は微笑んだ。

そして、そのまま倒れた。

八章 『彼女は彼に救われる(5)』

「ん」

みなみが目を覚ますと、白い天井がみえた。どうやら、ふかふかのベッドに眠っているらしい。目をこすりながら体を起こすと、見知らぬ部屋に自分がいることに気づく。

「どこ？」

まだ働きが鈍い頭を無理やり起こしてベッドからはいでる。やけに体が重い気がする。それでも何とか部屋から出ると、人の声が聞こえた。1つは聞いたことのない女の人の声。

そして、もう1つは。

「ひな兄？」

声がする方へ向かっていくと、そこは居間であり、ひなたともう1人、綺麗で長い黒髪を持つ女の人在那里にいた。

「おっ、起きたか？」

ひなたはみなみを見つけると、にこつと笑った。

「う、うん」

女性の方もみなみを見つめて、にこりと笑う。

「はじめまして、みなみちゃん。あたしはさくら。よろしくね」

近くで見ると、みなみが惚れ惚れするくらいに可愛い人だった。恥ずかしさのあまり、みなみは彼女を直視できなかった。

「それよりも、みなみ。腹が減ったな」

ひなたはにやりと笑うと、台所を指差す。

「む」

そういえばそういうことを言っていた、ということ思い出すみなみ。

「ちよつと、ひなた。あの子、疲労で倒れたんでしょ？ そんな無理強いさせちゃダメよ」

さくらがひなたに向かって言うが、彼は悪びれた風もなく、ける

りと言いつつ放った。

「うちの“家族”になるなら、料理はできないとだめだ」

家族という言葉聞いて、みなみは拳をぎゅっと握り締めた。

「何が家族よ。どれだけ長いこと顔を合わせてなかったと思ってるのよ。……ま、最後に会った日はなんだか思いつめた顔をしている心配だったけど、それも吹っ切れたみたいだし、別に良いけど」

さくらは軽い愚痴を含めてひなたに言う。彼は小さく頭を下げて謝ると、みなみに向かって言葉をかけた。

「さくらに教えてもらえ」

ひなたの言葉を受けて、さくらはみなみに近づくとその手をとる。

「一緒に作りましょうか？」

「あ、はい」

そうして2人は台所に消えていき、1人残されたひなたは窓の外に映る闇に目を向け、そのまましばらく、ぼーっとしていた。

~~~~~

みなみが気を失った後、彼女を肩にかついで町に戻ったひなたは、とある家の前で立ち往生していた。

（なんて言えばいいのだろう……）

無難に、ただいま、というべきか、あるいは、ごめんなさい、かなどと考えながら家の前に立つ男。端から見れば怪しさ抜群だったが、ひなたは真剣に悩んでいたのだ。

彼が訪ねようとしている家に住む人物の名は、さくら。かつて彼がこの町に連れてきた女性で、定まった家を持たないひなたはちよくちよく彼女に世話になっていた。

フブキの動向を伝えるニュースが増えたために、最近は何に飛び出すことが多くなったひなたは至る場所で様々な問題を起こし、いくら新聞沙汰にもなった上、賞金額も跳ね上がった。無論、そのことは彼女も知っているだろう。

彼女には、そういう自分の一面を見られたくない、という思いがどこかにあったのかもしれない。ほぼ完全に狂い始めたみかげと共にいることで理性を失いつつあった自分だが、さくらのことを忘れたことなどなかった。

そんな自分が今、彼女と会っても良いのだろうか。いや、彼女に何か言われるのが怖かったただけかもしれない。

数分ほど、ぐだぐだと悩みつくした後、彼は意を決してチャイムを鳴らそうとし

その手前で指を止めた。

彼女のこととなると情けないほどに決断力に欠けるひなたのため息と、家の物陰からのため息が重なった。

そこは家の側面にあたる壁で、ひなたからは死角となっていた。彼が視線をそちらに向けると同時に重い物袋を掲げたさくらが姿を現し、ひなたは思わずみなみを落としそうになる。

「久しぶり」

彼女は、そう言って鍵を開けた。見慣れた光景がひなたの目に飛び込んできた。

「あ、あの、さ……」

さくらに続いて部屋に入ったひなたは、気まずそうにそう声をかける。

「その子は？」

しかし、さくらはそれを無視して問いかけてきた。相変わらず、こちらを向いてはくれない。

「え？ あ、この子は、みなみと言って……」

「新しい住民になるの？」

「あ、うん。それで、できればさくらのところに置いてやって欲しい、かな？」

ひなたは内心の動揺を隠しきれずにそう言う。居間に入っても落ち着かないひなたは、みなみを抱えたまま、うろろろしていた。さくらは買い物袋を台所に置くと居間に戻り、そんな彼の様子を見て、呆れたように微笑んだ。

「とにかく、その子を寝かせてあげたら？」

「そ、そうだね」

ひなたはその言葉に弾かれたように居間を飛び出すと、かつてひなたが使っていた部屋に向かった。扉を開けて、彼は口を開いたまま固まる。長い間、訪れていないというのに、そこは綺麗なままだった。気がなければ、自然と汚れは溜まるものだ。しかし、ここは違う。普段からまめに掃除でもされているのか、いつひなたが帰ってきてても大丈夫なようになっていた。彼はそれを見て、何かが吹っ切れたかのように笑うと、みなみをそこに寝かして居間に戻った。

居間には椅子に座ったさくらがおり、ひなたは机を挟んでその向かい側に立つと、頭を下げた。

「ごめんなさい」

さくらはそれを見て何も言わずに、じっと彼を見つめる。ひなたが頭を上げたときも、彼女はまだ彼のことを見つめていた。ひなたは凝視されていることにわずかながら怯んだが、それでも彼女から目を離さずに黙りこくる。

「バカ」

「は？」

さくらは小さな声でそう言うと、立ち上がってひなたに近づいていく。そして、彼の頬を一発はりつけた。

「ここに戻ってきたってことは、少しは頭が冷えたのかしら？」

さくらの言葉に、ひなたは頬を押さえながら頷いた。彼女は、よしよし、と何度か頷いて、ひなたに座るように促した。

「らしくないことばかりやってるみたいだから、随分心配したのよ」「ごめん、なさい」

椅子に座って、ひなたはうなだれた。縮こまった背中をみると、彼がみなみと出会ったときのあの男と同じ人物であるとは到底思えない。

「ま、いいわ。無事に戻ってきてくれたみたいだし」

さくらは改めて向かい側に腰掛けると、笑いながらひなたに言う。彼は顔を上げ、彼女がもう怒っていないことを確認すると、安堵のため息をついた。

「それで？　これまでのことを詳しく聞こうかしら？」

その会話は、みなみが起きてくるまで続くことになる。

## 八章 『彼女は彼に救われる(6)』

「えーっと……」

初めての料理。それはうまくいくとは限らない。もちろん彼女にとつても例外ではなく、フライパンの上に、数分前までは卵であった黒こげものが米と混ざって、なんだかよく分からないものができあがっていた。みなみは若干涙目で、その料理（とは言えないかもしれないが）を見つめていた。

「不器用だな」

いつの間にか、みなみの背後に立っていたひなたはフライパンを覗き込んで言う。

「ちよつと、ひなた！」

さくらが慌てて止めるが、みなみの頬を一筋の涙が伝うのを止めることはできなかった。

「ん〜」

ひなたは無造作に、それを一口食す。そして何度か頷きながら、ごくんと飲み干した。

「料理も教える必要があるそうだな」

彼は、そう言うつと俯いているみなみの頭をくしゃくしゃなでる。

「とりあえず、美味しいものを食って味を覚えろ」

ひなたは包丁を手にとると、台所に立った。そして嬉しそうに微笑む。彼がこの台所に立つのも、随分と懐かしい光景だった。

「ちよつと待ってな」

~~~~~

台所が焦げ臭い匂いから香ばしい香りへと変わっていく。ひなたの料理する姿を、ぼーっと見つめるみなみは改めて彼のすごさを感じ知った。

「ほら」

ひなたは完成したものを皿にのせ、みなみに渡す。

「美味しそう」

彼女は思わずそう漏らした。彼が作ったのはお米を使った料理だった。お米は何かの調味料を使って炒められており、半熟の卵がその上にふわりとのっっている。さらにかけられたソースからは非常に良い香りがし、これが異様に食欲をそそる。見逃せないのは、その盛り付けだった。卵の黄色とソースの赤茶色に近い色、さらに緑の野菜を皿の端にのせたその盛り付けは食べる前から見る者を楽しくさせる。

ひなたは、それを一口分だけスプーンですくうと、みなみの口に運んだ。

「ん」

みなみはその行為にやや顔を朱に染めたが、ひなたの料理をしつかりと味わった。

「美味しい」

「当たり前だ」

ひなたはにっこりと笑うと、もう一食分を作って皿に取り分ける。彼が作った料理は2人分。2枚の皿に盛り付けた時点で、フライパンにあった料理は綺麗になくなった。

「どうぞ」

ひなたはそれをさくらに手渡す。さくらは、やや逡巡して、

「え、でも……？」

と言ったが、ひなたがみなみの作ったものに目を向ける姿を見て何かを理解したのか、

「いただきます」

と返した。

その後、みなみの作った料理を美味しくそうに食すひなたを見て、みなみが泣きそうになるくらい喜んだことは言うまでもない。談笑を交わしながらの食事。そのひときは楽しいもので、ひなたの顔にも終始笑顔があったが、食事が終わると彼の顔からそれが消えた。

夜が深まっていく。

~~~~~

「じゃあ、そろそろ行くかな」

夕食を食べ終わり、片付けも終わった頃だった。ひなたはそう言うのと、おもむろに立ち上がった。

「ん？ どこ行くの？」

みなみが外に出て行くこととするひなたを引き止める。ひなたはしやがみこんで、みなみと同じ位置に視線を移動させる。

「まあ……話し合い、かな？」

歯切れの悪い物言いだった。みなみは首を傾げる。

「とりあえず、お前が本当に強くなりたいてって言っただったら修行は明日からだ」

そう言っつて、ひなたは彼女の頭をぼんと叩くと立ち上がった。

「お前の部屋に“あるもの”が置いてあるから」

ひなたはにっこり笑ってから、家を出て行く。取り残されたみなみは腑に落ちない顔をしていたが、さくらの呼びかけにしたがって椅子に座った。

「ひなたにも事情があるのよ」

優しいような笑顔だな、とさくらの顔を見ながらみなみは思った。

そして、ずっと気にかかっていたことを訊ねてみることにした。

「……………あの」

「何？」

机に肘をのせて頬杖をつくさくら。みなみは、やや下方に視線を落とし、それから視線をあちこちに移す。なにやら緊張しているようだ。しばらく視線を行ったり来たりさせたあとに、さくらの瞳を直視した。

「ひ、ひな兄とは……………どういう……………？」

若干、顔を赤らめながら訊ねるみなみを見て、さくらは、くすつと微笑んだ。

「そうねえ」

さくらは軽く流そうかとも考えたが、みなみの瞳が真剣そのものだったので、ふう、と短く息をはいてから姿勢を整えた。

「安心して。“まだ”ただの友人だから」

彼女は笑顔でそう答えた。“まだ”の部分をかなり強調して、強い意志を持って、そう答えた。

「まだ？」

みなみは怪訝そうに、さくらを見据える。

「ひなたがどうもあなたを気に入っているみたいだから、野暮なこととは言いたくないけど……………」

さくらの顔から笑みが消える。

「彼を独り占めしないでね」

ずばつと言いつつ切った。みなみは、その言葉に含まれた想いの強さを感じた。そして、何も言えなくなった。きつと、この人は自分より彼のことをよく知っている。彼と過ごした時間も長い。彼に対する想いも、きつと比べ物にならないくらい大きいのだろう。だからこそ、今は何も言えなかった。自分は彼のことを知らなすぎた。そう。知らなすぎた。彼はただみなみを救ってくれただけの優しい人物なのではない。

しばしの沈黙のあと、さくらがおもむろに口をひらいた。

「あの人は」

彼女はみなみから視線を外した。その瞳は少し翳りを帯びているように思えた。

「ひとりぼっちだから」

みなみにはその言葉の意味がわからなかった。ひとりぼっち……？　ひとりぼっち、というのは、ひなたと会う前の自分のような存在ではなかるうか。“周りに誰も居ない”ことを言うのではないだろうか。

「え、ひとりぼっちって？」

それを理解するのに、みなみはまだ何も知らなすぎた。

孤独とは、1人で彷徨う森の中にあるのではなく、たくさんの人に囲まれている中にこそ存在するものだということ。

みなみの問いに対する答えはなかった。ただ窓を打ち付ける風の音だけが2人の耳に入ってくる。さくらの淋しそうな、悲しそうな顔を見ながら、みなみは胸騒ぎを感じた。

が、そんな彼女の心情を知ってか知らずか、さくらはいきなり不安げな表情を崩すと小さく笑った。

「あなたの部屋も用意したから、後で見せてみてね」

## 八章 『彼女は彼に救われる(7)』

朝。

小鳥のさえずりで、みなみは目を覚ました。森が近くにあるというところもあるのだろうが、この町は自然に囲まれているといえた。森の中には川や湖もあるらしい。

みなみは昨晚、さくらからいろんなことを聞いた。例えば、この町は“子どもしかいない”ということだ。いろんな事情のために親と離れ離れになった子どもが、ここに集まって1つの町を作ったらしい。そして、その先導をしたのが、ひなたとみかげというひなたの相棒。みかげという人にみなみはまだ会っていないが、ひなたとさくらに感じるイメージから思うに、きっと優しい人なんだろうな、と漠然と思っていた。

その他、さくらもひなたにこの町に連れてきてもらったこと。ひなたには決まった家がなく、普段は森で寝泊りをしていて、たまにさくらの家に立ち寄ること。そんなことを教えてくれた。

みなみは、ふぁ、と小さくあくびをすると部屋を出た。眠い頭でふらふらしながら歩いていると、

「起きたか？」

コーヒーをすするひなたと目が合った。頬は怪我でもしたのか、痛そうに腫れていた。

「お、おはよう」

みなみは慌てて髪をとかすが、手ぐしでは限界があり、ぴよこんと横の方の髪が重力に逆らってはねた。

「顔洗って来い。朝食にするぞ」

「う、うん」

~~~~~

「それで、あれは見たか？」

朝食を食べながら、ひなたがみなみに問う。

「……………」

彼女は彼の言っているものが何を指すのかよく意味が分からずに首をかしげた。

「あれ？ お前の部屋に刀がおいてあっただろ？」

「あ」

みなみは首を縦に振りながら思い出す。そういえば、さくらに案内されてこれから自分の部屋になる場所に入ったとき、そこに一振りの刀があつたことを思い出した。少しだけ持ってみたが、どうにも重くて持ち上げることが限界だった。

「まあ、刀を使えるようになるのには時間がかかるだろう」

ひなたは、びしっとみなみの前に人差し指を突き出す。

「とにかくお前には、決定的に基礎体力が足りてない！」

そう言つて、彼女の鼻をはじいた。

「ふにゅ」

そう言われても、というのがみなみの本音だった。これまでは平穩無事に生活してきたのだ。強くなりたい、と思つたのだから自分で住んでいた場所を失つたからだ。そもそも年齢を鑑みても、自分に体力がないことは仕方がないことに思えた。

「食事のときくらい、そういう話はやめればいいのに」

さくらは呆れたように言い、ひなたを一瞥してからため息をつく。が、ひなたはそれに何も答えずコーヒーを口に含んだ。そして、ちらつと窓の外に目をやる。天気は快晴。ぽかぽかとして気持ちよさそうな天気だ。

「ん、よし。今日は、まず昼食の食材探してもやろうか」

「食材……探し？」

食材は買うものではないのだろうか。みなみは疑問符と共にそう思ったのだった。

~~~~~

朝食後、ひなたはみなみを連れて森にやってきた。

「簡単な話だ。食べられそうなものを片っ端から集めて来い」

ひなたの指示は簡潔で明快だった。

「了解！」

みなみは元気よくそういうと、たたたと駆けていった。ひなたは彼女を見送ってから空を見上げる。太陽の光が思ったよりもまぶしく、彼は右手を挙げて光を遮った。昼間のうち、特に今日のように太陽の日差しが強いときは、森の中といってもある程度は明るかった。ただ、この森の地形についてよく知らない者。そう例えば、みなみのような人間が迷い込んでしまったら、たとえ昼の森といっても油断はできない。その程度は複雑な森なのだ。ひなたは、やや不安を抱きながらも、迷子になる程度のことなら、きつとすぐに見つけられるだろうから大丈夫だ、とたかをくくっていた。

そう、“迷子”になる程度なら……。

果たして彼の予想通り、みなみはまず迷子になった。

(む。このキノコは……)

ただ、当の本人は迷っていることに気づいてはいない。ひなたの言いつけどおり、食べられそうなものを片っ端から集めている。と、

ガサツという音がして、何かが現れた気配を感じた。みなみはびくと体を震わせると、おそろおそろ音の方に視線を向ける。獣か何かかと思っただのだ。でも、それはみなみの予想に反して“人間”だった。彼女は、とりあえず安堵した。

……が、人間だからといって安心できるわけではない。

「あ？ 誰だお前は……」

突然現れた紅髪の男は、みなみを見てあからさまに嫌そうな顔をした。左腕に包帯を巻いており服装もぼろぼろだった。口には煙草をくわえており、その瞳は正常ではなかった。

（な、なに？）

みなみはまず、その風貌に驚いたが、何よりも生気を感じられない彼の姿に足が震えた。

「まつ、いいや」

男はつまらなさそうに言いながら、みなみに近づくと刀を振り上げた。

（へ？）

一瞬、この男が何をしようとしているのか分からなかった。太陽の光が、男の刀に反射し、みなみは眩しくて目を閉じる。と同時に、殺される！ と感じた。

「ひな兄い！！」

みなみは無意識のうちに叫んでいた。そして、すぐにやってくるだろう痛みを覚悟した。しかし、待てども待てども痛みはこない。

おそろおそろ目を開けると、そこには美しい刃紋があり、その刀が男の刀を受け止めていた。

「ひ……」

みなみは自分を助けてくれた男の名を呼ぼうとした。けれど、その言葉を途中で飲み込んだ。ひなたの瞳が紅髪の瞳と同じに見えたからだ。そのせいで彼女は恐怖に足がすくんだが、本能が働いたのかその場から逃げ出した。



向かうところは1つ。ひなたのことをよく知っている人物の元へ。

どこをどう走ったか分からない。森をどうやって抜け出たのかも分からない。とにかくみなみは息もたえだえにさくらの家に転がり込んだのだった。

「さ、さくらさん!!」

すっかりおびえきった表情で訴えかけるみなみの顔を見て、さくらは何かを感じ取ったのか、険しい顔つきになる。

「ひ、ひな兄が……」

後半はもう声になっていなかった。さくらはぎゅっと下唇を噛むと、奥の部屋に入っていた。その間、ほんの数秒ほどだったろうか、1人残されたみなみにとっては、とてつもなく長い時間を感じられた。さらに、さくらが部屋から出てきたとき、その右手に握られているものを見て、みなみの顔から血の気が引いた。彼女の混乱はピーク状態に陥った。

「……さ」

「説明はあと!」

さくらが強い口調でみなみの言葉を遮る。

「ひなたのところに案内して」

## 八章 『彼女は彼に救われる(8)』

嫌に静かだった。さくらとみなみの足音と息遣いしか聞こえないでも、そこに確かにひなたは立っていた。いつもと変わらぬ顔(少なくともみなみにはそう見えた)のまま。

「ひなた？」

さくらがおそるおそるといった風に訊ねると、ひなたはなんとも形容しがたい表情を作った。彼はさくらの震える手に握られている刀を見て苦笑いを浮かべ、軽く頭を下げると彼女の横をすつと通り過ぎた。

そして、みなみに近づいてしゃがみこみ彼女と視線を合わせる。

「まあ……なんだ。さっきお前が見たとおり」

先ほど彼を見たときのことをみなみは思い返した。あのとときの恐怖や畏怖が呼び起こされる。

ひなたは目を伏せ、言った。

「あれが僕だ」

ただそれだけを。

しかし、みなみはいくつかのことを理解する。まず、彼はただの優しい普通の人間ではない、ということ。みなみを殺そうとした人物と同様に実は怖ろしい人間なのではないか、ということ。

だが、意外にもそこまでの驚きはなかった。つまり、彼女は信じただけだ。少なくとも自分を救ってくれた、ということは確かだったからである。

~~~~~

ひなたのしてきたことや、彼の首に懸かっている賞金など、さくらが敢えて話していなかったとおおむねの彼の事情を聞き終えた後、みなみは小さく頷いた。

「そう」

彼女はそう言うと、ひなたの前に立つて実に大真面目な顔で語る。「大丈夫。だって、私は私が出会ってからのひな兄しか知らないもん。昔のことなんて知らない」

にこつと笑うみなみを見て、ひなたは思わず、

「お、おお」

と洩らした。予想外の言葉だったが、ひなたはそれで救われた、と言っても良かった。自分のことを知っても、怯えの色を見せない人間などいない。彼自身がそう思うほどに、自分のやってきたことは惨かった。だからこそ、彼女がそう言ってくれたことはひなたにとつてとても嬉しかった。

彼が彼女を救ったと同時に、彼女は彼を救ったのかもしれない。

だから、今度は、

「ありがとう」

ひなたの方が心の底から感謝の言葉を述べ、誇らしげに笑うのみを抱きしめた。

「ちよ……！！ ひな兄い！」

みなみは突然のことに顔を真っ赤にして叫ぶが、ひなたは力を緩めない。ひなたからしてみれば、真正正銘、新しい“家族”に対する抱擁であつたのだが、みなみにはそんなことは関係ない。ただ抱きしめられたという事実のみが彼女の頭を支配する。

そして、そのままの体勢で彼は言った。

「僕が守つてやる」

「ええ？」

「お前は僕が守つてやる。何も心配するな」

ひなたがみなみを抱きしめている様子をややいらいらしながら見つめていたさくらであつたが、彼のこの言葉を聞いて呆れたようにため息をつく、そうすることが必然であつたかのように空を見上げた。

青い空に雲が流れている。1つだけちぎれて漂っていた小さな雲のかたまりが、傍にあつた大きな雲につながるのが見えた。

~~~~~

さて、それからしばらく時は流れる。

みなみの修行も順調に進み、ひなたをある程度満足させるまで成長した。ひなたが用意した刀もそこそこ扱えるようにはなった。

ひなたの方は、みかげの動きも気になるところで、やや駆け足気味に彼女の修行につきあっていた。

「ひゃっ！」

短い叫び声をあげて、みなみはしりもちをついた。刀を構えた姿勢のまま、ひなたが凄まじいスピードで突っ込んできたので、急いで懐からナイフを取り出そうとしたところで、そうすることは叶わず彼に倒されたのだ。

みなみは、うっ、と唸りながら恨めしそうにひなたを睨む。

「反応が遅い」

ひなたは表情を変えずにそう言って、みなみの額をはじく。

「集中力が足りない」

続いて、彼女の右頬をつねる。

「動きがぎこちない」

さらに左頬をつねる。

「だが、ナイフを取り出そうという判断は良かった」

両頬をつねられて悔しそうに涙を瞳に浮かべていたみなみは、ひなたに頭をなでられて、2重の意味で赤い頬を緩ませた。

「とにかく、まだまだ甘い」

おまけに、もう一度、みなみの額をはじいたひなたは彼女に気づかれぬように、ぎりっと齒をかんだ。

~~~~~

「うん」

ひなたとの修行後、家ではもう一つ、さくらとの修行、すなわち“料理”の練習をすることがみなみの日課になっていた。しかし、なぜかこの料理だけはいくら練習しても一向にうまくならなかった。根本的な部分で不器用なのかもしれない。練習にずっと付き合っているさくらも苦笑を浮かべるしかなかった。

みなみは悔しそうに頬を膨らませて、自分が作ったものを睨みつける。

「まあ、一つくらい苦手なものがあっても、ね？」

さくらの慰めもたいした効果がないようで、みなみは、ぎゅっと拳を握り締めた。

「でも、だって……」

みなみは消え入りそうな声で言う。さくらは、にこっと笑うと彼女の頭をなでた。

「まあ、ひなたに美味しい手料理を振舞ってあげたいっていう気持ちに分かるけど」

みなみが彼女の言葉を聞いて、さくらに視線を向ける。1人の瞳がもう1人の瞳を捕らえる。

「それは、あたしの役目みたいね」
「む」

挑発的な視線を向けるさくらに、かちんとくるみなみ。何か言いたそうに口を動かすが肝心の言葉が出てこない。

「ふふつ。一つ勝ちね」

意地悪っぽく微笑むさくらを見て、

「わ、私の方が、ひな兄と一緒にいる時間は長いもん!」

と、反論するみなみ。

「“今”はね」

動揺を露にするみなみに対して、いたって落ち着いた風でさくらは続ける。

「でも、あたしの方がずっと昔からひなたのこと知ってるわ」

「そ、それは……ずるいつ！」

瞳をうるうるさせながら叫ぶみなみを見ながら、

(少し、いじめすぎたかしら?)

と思ったさくらは、みなみの頭をぐしゃぐしゃと撫で回した。

「うん」

涙目のまま、上目遣いに睨むみなみは、女のさくらからみても充分に愛らしかった。

「もう一回、作ってみましようか？」

~~~~~

その後、ひなたが町から出て行くことになるのだが、みなみはそれについて思いを馳せることができなかった。

無理やりという形でユキナから引き剥がされ、車に移動してすぐにひなたから声をかけられたからだ。そもそも彼女にとって、それ以降の出来事はひなたやさくらと共に2つの修行をし続けた以外は、思い出したくもない悲しい記憶であるので、それはそれで好都合だった。

みなみの有する当時の消したい記憶を打ち切るように、ひなたが口を開く。

「つまり、何日か前にみかげとフブキを見た、と」

「うん」

後部座席で力強く頷いたみなみは、あのと時の感覚を思い出していた。それは紛れもない恐怖。

「やみくもに捜すのも時間の無駄かもしれませんし、近くに町か村

があれば、そこで1度フブキの目撃情報について聞いてみてもいい  
かもしれませんね」

「そうね。この辺に現れたのならば、フブキを見たっていう人がい  
てもおかしくないわ」

年上コンビが言い、依然として険悪な年下コンビとハムスターは、  
うんうん、と頷く。そして、同じ反応をってしまったことに苛立っ  
たのか、2人はお互いをぎろつと睨むと、そっぽを向いた。

外の景色を見ながらユキナは眉を下げ、不安な表情のままぼつり  
とつぶやいた。

「……お兄ちゃん」

それが聞こえたのか、みなみはだるそうにため息をついた。彼女  
は少し（みなみの中では、本当にちょっとだけだが）心を痛めた。  
フブキに妹がいて、その子が彼を捜している。もし、あの時自分が  
もう少ししっかりしていれば、彼女と兄を会わせてあげる協力がで  
きたかもしれない。

自分と同じように家族を失ったユキナのことを思い、みなみは唇  
をかみ締めた。それには誰も気づかない。車のガラスに薄く映った  
自分だけが、その光景をじっと見つめているばかりだった。

「みかげとフブキが戦ったつつうことは、ますます深刻な事態だよ  
な」

「はい。もしかすると、だいちたちも動き出しているかもしれませ  
ん」

ひなたはハム吉の問いかけに答えると、それっきり押し黙った。  
何かを思案するように、じっと、ただじっと行く先を見つめ車を動  
かした。さくらはそんな彼を横目で盗み見しながら今後の成り行き  
を想像する。

なんとなくではあったが、彼の厳しい顔つきを見ると良い結末を  
迎えることはなさそうに思えた。



九章 『彼女は涙を、彼は血を流す(1)』

「化け物がっ！」

左の太ももから血を流し、軽く足を引きずりながら歩く男はそう悪態をつけて唾を吐いた。

前方には優雅に歩く化け物、フブキが歩いている。手を伸ばせば届きそうな距離にいる、それはすなわち、いつでも殺せる距離にいるのであったが、フブキは危機感のまるでない足取りで、怪我をした男、みかげの前をのんきに歩いていった。

それがみかげには屈辱であった。殺すならば、いつそのこと殺して欲しかったし、勝負が終わったというのなら、さっさと自分の前から姿を消して欲しかった。

「いったい手前は何を考えてやがる！」

返事はない。フブキは一定のペースで歩を進める。みかげは頭をかきむしって苛立ちを表すが、それは全く無意味な行為であった。

「くそっ」

悪態をつき続けるみかげに対して、沈黙を守るフブキは唐突に足を止め、後ろを振り返った。突然の行動にみかげは身構える。しかし、フブキはみかげなどまるでそこに存在していないかのように彼の遙か後方をじっと見つめた。

自分が無視されていることは不本意極まりなかったが、いったい目の前の“化け物”は何を見ているのだろうと思ひ、みかげは後ろを振り返った。

「……何も、ねえな」

そうつぶやいて、前に向き直る。そして、彼は驚きのあまり絶句した。

「おいおい」

先ほどまで目の前にいたはずの男が、いまや遙か彼方に小さく見えるだけになっていたのだ。

「待てよ、こら！」  
みかげは足が痛いのも忘れて必死に彼の背中を追いかける。追いつけるかどうかは分からなかったが、ここで見逃す気など彼にはさらさらなかった。

「気づかれました」  
「そのようだな」

茂みからフブキとみかげの様子を観察していた一団はその姿を現すと、目から双眼鏡を外した。

「とにかく追うとしよう。絶好の機会のようだし、それにどうやらこの任務は私の首がかかった最後のチャンスらしい」

「にやつと笑ったのは政府の役人であった。制服をきちんと着こなし、姿勢も良い。几帳面さが身体中から滲み出ているような部隊の隊長と思しき人物、だいちは全体に命令する。」

「最優先はフブキの確保だ。無いとは思うが、もしも精神と身体に余裕があればみかげも捕縛する」

ざつと数十人はいるであろう一団は各々小さな塊になって車に乗り込んだ。

「……これは」

ユキナとみなみの握り合いを終え、改めて車を発進させたひなたたちが見つけたのは廃墟と化した町だった。全ての家は崩れ、どうしようもないくらいに荒れ果てている。

「時間の経過や自然災害というよりは、人為的って感じね」

そう感想を漏らしたさくらは瓦礫を手にとって、悲しそうに目を伏せた。瓦礫の状態からみて、ここが壊されてから時間はそれほど経っていないらしい。

「つまり、あれか。これはフブキの？」

「と、見るのが妥当でしょう」

車の中に残されたユキナとみなみをちらりと見て、ひなたが頷いた。壊された家や石壁に見られる独特な剣の跡を見て、彼は難しそうに顔をゆがめた。

「これ、全部1人でやったのか？」

「はい。そうだと思います」

「人間じゃねえな、おい」

「ですね」

ハム吉が言うのは最もだった。この光景を1人で作り出したのなら、それは人間業ではない。神かはたまた悪魔か。

「そついや死体もないな？」

「いえ、見えないだけできつと家の下敷きになっているだけだと思います。基本的に彼が活動するのは夜ですから。住民が寝静まったころを狙ったのではないでしょうか」

「ああ、そうだった。奴は夜行性の化け物だったな」

ハム吉が頷き、ひなたは近くにあった家だったものをかきわけ、う、と漏らした。できれば一生見たくない人間の悲惨な姿を目撃したからだ。

「さくら」

「何？」

別の場所で、しゃがみこんで瓦礫を見つめていたさくらにひなたは声をかけた。

「ひとまず、墓でも作るべきだと思っ」

「そうね。そうしましょう」

~~~~~

「これ、フブキがやったんだと思う」

「え？」

ひなたにここで待っている、と言われ、素直に従った2人は外にいる彼らの様子を窺いながら会話を始めた。

「ひとりでこれをやったとしたら、っていう前提がいるけどね。こんなことができるのって限られてるもん。フブキかみかげか、あるいはひな兄か……」

「……」

黙りこくったユキナにちらりと視線を向け、すぐに逸らすとみなみは言葉を続けた。

「ひな兄のほすはないし、みかげは基本的に壊した町は燃やし尽くす狂人らしいから違う。だったら消去法でフブキ、ということになるでしょ」

「……そうかもね」

ユキナは硬い表情のまま同意の言葉を発した。みなみは、ため息と共に車の窓に頭を乗せた。

「いいじゃん、あんたは」

「え？」

ユキナはそんな予想外の言葉にみなみの方に顔を向けた。どこか

寂しそうで、悲しそうな顔で微笑むみなみが、そこにいた。
「本当のお兄ちゃんがいてさ」

~~~~~

「なんだっつーんだよお！」

距離の縮まらないフブキを追いかけながらみかげは叫ぶ。左足は限界を訴えており、白い包帯が徐々に赤に染まる。

「フブキい！」

その叫び声のせいか、それとも別の理由か、フブキは足をとめると後ろを振り返った。その行動にみかげはにやりと笑い、それと同時になかな音に気がついた。

それは後ろから迫る機械的な音で、みかげは思わず振り向いた。そして、大きく目を見開くことになる。

確かにみかげの前方にいたはずのフブキが、彼が振り返ったときには既に彼の前にいたのだ。

「おいおい」

続いてみかげは気づく。後方から10台近い数の車が迫ってきていることに。フブキはその先頭車両を容赦なくぶった切ると、すぐさま残りの車に攻撃を開始した。

「ありゃあ、だいちの野郎か？」

「まずいな」

そうつぶやいたのは、先頭車に乗るだいちだった。運転席に座る男がその言葉の意味を図りかねて首をかしげる。

「どうかされましたか？」

「距離を詰めすぎた。これでは、殺られる」

そして、その言葉通りのがすぐに起こった。だいちたちから見て、だいぶ先にみかけ、そして、そのまただいぶ先にフブキがいた。いたはずだった。が、次の瞬間、フブキが目の前数百メートルの場所に現れ、そして。

「“化け物”が」

だいちの乗る車が真っ二つに切り裂かれた。悲鳴をあげる暇さえなかった。

~~~~~

「さて、先を急ぎましょう」

「先って？」

墓作りを終えて町を出たひなたは、しばらく車に戻らずにあちこちをうるちよろしてから、ようやく車に戻ってきた。随分と車内で待たされた、ユキナやみなみ、一足先に車に戻らされたさくらまでもが不機嫌な顔で彼を迎えた。

「血の跡を見つけた。それを辿ってみようと思う」

「血？」

不吉な言葉にユキナは顔をゆがめ、みなみは目を閉じる。聞き返したのはさくらであり、彼は強く頷いた。

「みかげとフブキが今も尚戦い続けているなら、あの血はみかげのものだと判断するのが妥当だ」

「ま、どうせ手がかりはねえんだ、行ってみようぜ」

ハム吉が笑い、ひなたも釣られて笑みを浮かべる。

「そうですね」

鈍いエンジン音がして車が走り始める。

間もなく、全てが一同に会する。

九章 『彼女は涙を、彼は血を流す(2)』

「おいおいおいおいおい」

絶句する4人に代わって、おどけたように声に出したのはハム吉だった。10台はあろうかという車が全て真つ二つに切り裂かれていたのである。しかも何人が怪我人の姿も見られる。

「どうしたんだよ、これ」

ハム吉のつぶやきに答える声はなく、さくらが素早く車から降りて怪我人に駆け寄っていく。

「いったい何があったんですか？」

「あ、ば、化け、物、が……」

「化け物？　もしかしてフブキのことですか？」

「そ、そうだ……。あ、あい、つが」

「それで、彼はどこに？」

男はフブキが去っていたと思いき方向を指差した。そちらを見てさくらは頷くと車に戻る。

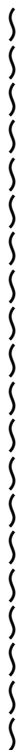
「治療は良いので？」

「いいのよ。今は医者である前に、1人の人間としてユキナちゃんを優先するわ」

「じゃ、行くよ」

ひなたは車を走らせる。フブキに近づいたという手ごたえで彼は震えた。

誰か、その震えに気づいただろうか。たとえ気づいた者がいたとしても、彼の震えを止めることができるものなど、この車内には存在しなかったに違いない。



「やべえぞ、これ。俺、死ぬんじゃねえか？」

政府の車両を全部破壊したフブキが駆け出すのを追いかけて、その背中を狙って発砲しながらみかげは思った。

もしかしてこいつは俺が逃げ出そうとしたら、それを狙って殺す算段なんじゃなからうか、と。

フブキはみかげの弾丸をひよひよい避けながら、前方に行く。

「どっちにしろ、死ぬなら死ぬで仕方ねえ。あの野郎に傷ひとつ付けられない方が気に入らねえ」

みかげは足に力を込めて翔ける。殺意を込めて。それを感じたか、フブキは足を止め、ぐるりと振り返った。その表情は、やはり無そのものだった。

~~~~~

「ついてこれる者だけついてくれば良い」

だいちは言って、フブキが逃げた方向に向けて駆け出した。先ほどの攻撃で右腕を負傷したが、そんなことを考えている余裕はなかった。

「追うぞ」

だいちの言葉に数人が従う。怪我人はそのままだいちが目標物を追いに走った。逃がすつもりなど、さらさらなかった。

~~~~~

「あれは……」

前方の小さな集団を見つけて、ひなたはつぶやいた。

「だいちか」

ハム吉が言い、ユキナとみなみが身を乗り出して、前方を見つめる。集団はこちらに気づいたらしく、武器を構えて立ちはだかった。「時間をとられてる暇はないわね」

さくらは言うつと医療道具の入った荷物を手にして、動く車から飛び出した。

「さくらっ!」

「あなたは、さつさと“お姫様”を送り届けなさい」

さくらの笑顔を脳裏にしかと焼き付け、ひなたはアクセルを踏み込んだ。急な加速に集団は驚き、思わず脇にそれた。

ただ1人を除いて。

「任せた」

その男の声は聞こえなかったが、ひなたは彼にそう言われたように感じた。ぶつかる直前、男は飛び上がった。今しがた車から飛び出してきた女性に目を向ける。

「お久しぶりですね、さくらさん」

「そうね、だいち」

さくらは荷物をあげ、中から切れ味の良さそうなメスとそれが医療関係ある道具なのか拳銃を取り出して、集団に向かって言い放つ。

「ここから先には行かせません。ひなたの邪魔はさせません」

それを聞いて、だいちはにっと笑った。

「ああ。そうでした。君はひなたの奥さんでしたっけ？」

「まだ、です」

「そうでしたか。好きにしてください。こうなったら四の五の言っている場合ではありませんし。フブキとみかげに加えて君の旦那も確保するつもりですよ。……君を人質にして」

だいちが拳銃を構え、さくらに照準を合わせた。残りの部下たちも各々武器を構える。

「あなたのお好きなようにすれば良いわ」

車の音が彼女らの耳に届かなくなったころ、数発の銃声が鳴り響いた。

~~~~~

「ふざけん、なっ」

身体をぼろぼろにしながら、それでも食い下がるみかげをフブキは静かに見つめていた。

「て、手前……」

フブキは無表情で、みかげが握る拳銃をはじきとばした。そして、彼に止めをさそうとして、

「……」

表情は変わらなかった。みかげが袖から滑らせるようにして取り出したナイフが、フブキの頬をかすめ、血を流した。

「手前が人間で安心したぜ」

みかげは彼の身体から赤い血が出るのを確認して口笛を吹き、不敵な笑みを浮かべたまま地面に倒れこんだ。

~~~~~

「役者が勢ぞろいって感じだな」

前方に転がる男を見てハム吉がぼやいた。ひなたは車を止めると、急いで降りて彼の元に向かう。

「おい、カゲ」

「あ……？ あんだ、ひなたか」

倒れていた男は無理やりに身体を起こすと、はぁ、と息をはいた。身体中が怪我だらけだった。

「フブキは？」

「さあな。先に行ったんじゃないか？」

「そうか」

ひなたの目を見て、みかげが口を開く。

「追うのか」

「ああ」

「やめとけ」

みかげはぶつきらぼうに言うと、ひなたの胸に拳を突きつけた。

「俺が全力を尽くしてかすり傷ひとつ負わせただけだ。手前が奴を前にしてできることなんてねえよ」

ひなたは目を閉じて首を横に振った。諦めにも見たその表情を見て、みかげは眉をひそめる。

「それでも行かなくてはいけません」

「あ？」

「約束ですから」

ふざけんな、と言うよりも早くみかげはひなたの頬を殴った。ひなたはそのまま地面に倒れ、みかげは彼の胸倉を掴む。

「くたばれ」

「ま、待て」

震えた声だった。声だけではない。足も腕も、身体全体が震えていた。

「ああ？ 手前は腰抜けのガキじゃねえか。生きてたのか」

「うるさい」

みなみは刀を抜くと、勇気を絞る出すようにして叫んだ。

「ひな兄！ 早く行って！ ここは私が何とかするから！」

その言い草にみかげは苛立ち、みなみの首元目掛けてナイフを走らせた。

「だ・れ・が、だ・れ・を、ど・う・す・る、って？」

不気味なほどに感情のない声がみなみの耳に届き、

「分かった」

というひなたの声が続けざまに届いた。気づくとみかげは後方に吹っ飛ばされており、代わりにひなたがみなみの前に立っていた。どうやら、ひなたがみかげの首を後ろから掴んで投げ飛ばしたらしかった。みかげが苦しそうに咳き込んでいる。

「任せる」

ひなたはみなみの頭に手を乗せて、軽くなでてやった。みなみはくすぐったそうに、しかし、とても嬉しそうに頷くと、頬を赤く染めたまま小さく笑った。

「任せて」

ひなたも笑顔で頷くと急いで車に戻っていく。そして、なんの躊躇いもなく車を発進させた。

「おい、こら、ひな」

みかげが言い終わる前に目先に刀の切っ先が迫った。もう、震えていない。

「不本意だけど、あんたを止める」

「あ？ 手前もフブキの妹を救いたい口か」

「違う」

みなみは、すう、と息を吸いこんで、叫ぶように言った。

「あいつのためじゃないから。これはあくまで、ひな兄のためだから」

九章 『彼女は涙を、彼は血を流す(3)』

「あれか？」

前方に人影を確認してハム吉がつぶやき、ユキナがじっと目を凝らす。

「お兄ちゃん……」

ユキナの呟きを聞いて、アクセルを踏む足に力をこめるひなた。かなりの速度が出ている車で追いかけているのにも関わらず、フブキとの距離は一向に縮まらない。

「本当に人間じゃねえな」

「見失ったら終わりです」

ハム吉がぼやき、ひなたは焦りを隠さない。

いったいどれくらい追いかけただろうか。みなみと出会ったときは確かに太陽は高い位置にあったはずだった。それが今はどうだ。まもなく夕暮れというところまで時間は流れている。周りがゆるりと暗くなつていき、このまま彼を取り逃がすのではないかというひなたたちの心情を如実に表しているようで、ひなたはぎりつと奥歯をかみ締めた。

と、突然、車内に風が吹き込んだ。

「ユキナさん？」「ユキナ？」

原因はユキナが窓を開けたからだった。凄まじいスピードで走る車には、かなり強い風が吹き込むが、彼女は髪を抑えることなく精一杯息を吸い込んだ。

「お兄ちゃああああああああん！」

前方の影が立ち止まった。

~~~~~

「どちらにしろ、俺に向かってくるなら死んでもらうだけだ」

みかげが懐から小さなナイフを取り出した。明らかにみなみを挑発するために、わざとそんな小物を取り出したのだが、みなみはあっさりとそれにかかった。頭に血がのぼる。

「ふざけんなあ！」

そう行って力を込めて地面をけり、みかげに飛び掛る。体型にそぐわない刀で彼を斬りつけようと、彼女は勢いを殺さずに飛び込む。

「この程度で熱くなるくらいじゃ、相手にならんな」

みかげはつまらなさそうに、それをひよいとかわすとみなみの横に回りこむ。そして、隙だらけになった彼女の首筋に1本の線をつけるために、ナイフを持った手を伸ばす。

「この程度で油断するくらいじゃ、相手にならないね」

が、それは読まれていたらしくみなみは身体をひねった。みかげのナイフはみなみの髪を斬り裂き、予定より遥かに浅い傷を彼女の首裏に作った。そして、手を伸ばしたまま逆に隙だらけになったみかげに向かって、みなみが刀の切っ先を向ける。

「ざけんなよ、ガキがつ！」

みかげの怒号が響く。彼は腰に吊るした愛用の拳銃を空いている手で掴むと、それでみなみの切っ先を受け止めた。拳銃に刀が突き刺さる。そこでみなみに新たな隙が生まれる。みかげは長年使って



きた拳銃に未練を微塵も残さずに手を離すと、伸ばしていた手をみなみの後頭部目掛けて引く。ナイフの柄が彼女の後頭部にぶち当たり、みなみは小さくうめいて前方に倒れる。それをみかげが受け止め、彼女の顔に膝蹴りを加えた。前のめりに倒れていたみなみの身体が今度は後ろに反り返った。みかげはナイフを構えなおし、それを彼女に突き刺しにかかる。

「うおっ！」

が、それは失敗に終わった。みなみが鬼の形相でそれを掴んだのだ。手のひらからは血がだらだらと零れるが、みなみは一切力を緩めなかった。

「誰もふざけてなんか、ない！」

そのままナイフをみかげの方に押し込むと、拳銃が刺さったままの刀を横に構えなおし、それを突きの形で前に押し出した。

痛い、とは思わなかった。ただ、呆然と動きを止めみかげは“そこ”に手を触れた。

「はっ……ははっ」

そして、声を出して笑う。ぬるりとした感触。みかげは自分の頬に傷が付けられていることを知り、みなみを“笑顔”でにらみつけた。

「おい、ガキ。手前、名前は？」

「みなみ」

みかげの笑いは止まらない。楽しそうに、子どものように、無邪気に笑う。みなみは気味悪そうにそれを見ながら、自分の刀に刺さったままの拳銃を外した。

「みなみか。まさか手前みたいなガキに傷を付けられるとは思ってなかった。悪い。俺が悪かった。そうか。手前、伊達にひなたの弟子やってたわけじゃねえな。いくら手負いとはいえ、この俺が。手前につ！？ 信じられねえが、信じるしかねえ。俺の目で見た事実だ。疑う理由がねえもんな。そうか、そうか。手前、俺を斬りつけやがったのか。はっ。ははっ。俺を。この俺を斬りつけやがった。

「はははっ」

狂ったように言葉をつむぐみかげに、みなみは恐怖を覚えた。やはり、この男は怖ろしい。そう再確認したのだ。

「よし、みなみ。これまで、なめてかかって悪かった。ああ、悪かった。変に手加減してたのが良くなかったな。ああ、良くなかった。いいか、よく聞け。俺はこれから、このっ！ この手前の舞台で手前の存在を完膚なきまでに消し去ってやる。いいな、みなみ。手前は今、ここで！ 俺が！ 殺す！」

そう言っつて、みかげは腰に飾りのようにつけていたものを抜いた。そういえば、みなみがこの男と再会したとき、彼は刀でフブキと戦っていた。

「この刀が最初に血を吸う相手は、ひなたか、あるいはあの野郎のはずだったが、そんなのはもう知らねえ。もう忘れた。綺麗さっぱり忘れた。……光栄に思え、みなみ。手前を最初にしてやる」

みなみの本能が告げた。放たれた殺気。迷いのない瞳。

彼女はどうしようもなく逃げ出したくなった。

~~~~~

「なるほど、 月か」

夕暮れ時。太陽が沈もうとしている。残り陽がフブキの剣に反射し、地上に三日月を作った。黒月。それが、フブキに与えられた別称だった。

異様なまでに曲がりくねった剣。柄は太く重厚だが、刃の方は意外なほどに細い。例えるならそれはまるで三日月のように弧を描いていた。そんな異様な剣を前にして、ひなたは怯むという感情を捨て去った。後ろではユキナが見ている。それだけで、自分の仕事を理解した。

「始めましょう」

初めに攻撃を仕掛けたのはひなただった。ヒュッ！ という音とともに、まるで風のごとく体を動かす。常人ではついていけない速度だが、フブキは特に感慨もないように簡単にそれをかわしていく。それを見てもひなたは一切攻撃の手を緩めない。緩めないが、一向にフブキには当たらない。

（ちよつと、これはまずいな）

ひなたはそう思っただけで顔をゆがめた。初っ端から全力でぶつかるとも思わなかったし、もちろん全力でぶつかつた。けれどこの様だ。

「ひなた！」

聞こえるはずがないのに、そんな声が聞こえた気がして、弱気になりかけた心を立て直す。危ない。先ほどこちゃんと捨てたはずなのに、いつの間にか怯む心を拾い直していたらしい。ひなたは攻撃の手を休めずに、集中力を高めると一点に力を込めて刀を突いた。

ひなたが振るった刀がフブキの首筋をかすめる。フブキの首に一筋の傷ができ、そこから赤い血が零れる。しかし、フブキの方は顔色一つ変えずに、いや、表情を一切変えずに、そんなひなたに向かって初めて攻撃の姿勢に入った。その柄の大きさと刃の長さならば相当の重さだと思うのだが、フブキは軽々と剣を振り下ろしてきた。ひなたは何とかそれを止めるが、剣の重さは想像以上だった。刀と剣が激しくぶつかり合う。乱れた息遣いが聞こえるが、それはひなただけのものだった。フブキは無表情のまま、機械的に剣で殺しかかってくる。

間髪入れない攻撃により、ひなたの体力は確実に削られていった。「うぐあ！」

剣に気をとられていたせいも、フブキの左手がひなたの腹部に完璧にめり込み、彼は後方に吹き飛ばされる。

(片手でそれを振るえるのかよ)

吹っ飛びながら、フブキが例の剣を片手にこちらに飛び掛ってくるのを見て、ひなたはそう思わざるを得なかった。地面に叩きつけられると同時にフブキがひなたの目の前に迫る。ひなたはそれに瞬時に反応し、体を回転させ剣を避ける。

そのまま地面を滑りながら転がる速度を殺すと、ひなたはすぐさま立ち上がった。剣を振るったフブキがもう一度構えなおす前に、お返しと言わんばかりに腹部に強烈な一撃を加えてやる。

ひなたの頭の中では、それによって吹き飛ばされるフブキがいるはずだったのだが、

キーンッ！

という、長く、それでいて高い音が耳の中でこだました。

美しい刃紋の描かれた刀が宙を舞う。信じられないといった表情で、その刀が描く弧を見つめる男。しかし、それはほんの一瞬のことで、男はすぐさま我に返ると刀の代わりにナイフを抜こうとした。

そのときだった。

「がっ……は……」

剣が男の腹部を貫いた。

貫いたという表現では甘い気もした。まさに串刺し状態というやつだ。刃がそれなりに細かったのには救われた。あの柄に見合った刃の太さであれば、一瞬でひなたの身体は2つに別れ死んでいたことだろう。その光景を想像して、ひなたは「運が良い」とやけに冷めた頭で思った。

九章 『彼女は涙を、彼は血を流す（4）』

「ひ、な、た？」

時が止まった。

激しい戦闘のために、いつの間にか2人の立っている位置は入れ替わっており、車の方からはフブキの背中とそれに隠されながらも少しだけひなたの姿が見えた。

ハム吉は目を見開いたまま固まり、ユキナは口を開けたまま固まった。後方から見ていたユキナたちの目には、ひなたがどのような状態にあるのかはつきりとは見えていない。

しかし、じわりとにじみでてくる赤い液体が地面に落ちるのはかろうじて見えた。事実、ユキナの視界には入っていないが、それはゆっくりと、それでいて確実に男の服を染めていった。

刀を飛ばされ両腕をだらりとたらしした男。彼が倒れることなく踏みとどまっていることは唯一の救いであるように思えた。

「ひなたあああああああ！！！」

ユキナが叫び声をあげた。その声は、泣いているのか震えていた。車から転がるように飛び出し、ひなたに駆け寄る。その手には、あの短剣。

背後でその叫び声を聞きながら、フブキはひなたに突き刺さった剣を抜きにかかる。その手に力を込め、そして。

~~~~~



銃声がして、みかげの身体が横に倒れた。その瞬間をみなみは目撃したわけではない。銃声に驚いて目を開けたみなみが、次に見たのは横に倒れこんだみかげだったのだ。

「大丈夫？」

みなみは声の主の方に顔を動かし、腰から崩れ落ちた。

そこに立っていたのは、拳銃を手にしただいちと、さくらだった。

~~~~~

「え？」

そう声を上げたのは誰だっただろうか。さくらは役人たちに囲まれ、まさに背水の陣という状態だったはずだ。しかし、これはいったいどうしたことが。

1人、また1人とさくらを取り囲む役人が倒れていく。

「だいち、さん？」

「少しは手伝ってくれませんかね。私だけがやったとなると、上への言い訳が苦しくなるもので」

「やっと笑っただいちは、また別の役人たちに拳銃を向け、

「ちょ、だいちさん、何を!？」

躊躇なく撃った。そして、また1人役人が倒れる。さくらは我に返ると、残りの役人を手に持った鋭利な刃物、すなわち切れ味抜群のメスで斬る。……などということはずせずに、手刀で手際よく気絶させると、だいちの前に立った。

「どづいことかしら？」

「ひなたに賭けただけです」

「だいちが悪びれた様子もなくそう言って、すたすたと歩き出す。」

「部下たちを殺してまで？」

「死んでませんよ」

「え？」

「だいちの言葉通り、よく見れば彼らは血を一滴も流していない。」

「麻醉銃です。さすがに“仲間”を手にかけるほど落ちぶれてはいません。すべてが終わるまで彼らには眠っておいてもらいたい、ということですね」

「それじゃあ、あなたはどこへ？」

「誰かが見届けなければいけないでしょう」

「だいちはくるりと振り返ると、笑顔を浮かべたまま口を開いた。」

「例え、それがどのような結末を迎えたとしても」

~~~~~

身体に剣が貫通した状態で、ひなたはフブキの首を力いっぱい掴んだ。腹部から血が流れ出るのを気にも留めない。見ているこっちが倒れそうなくらいの量が流れているが、それでもひなたは虚ろだが鋭く強い瞳のまま、戦いをやめることはしない。その様は、いつぞやのみかけ戦でみせた姿に似ていた。

ひなたが首を絞めると、そこで初めてこれまで無だったフブキの顔が微妙に歪んだ。そして、自らの死を前にして、そんな彼の顔を

拝めたひなたは、

(ああ、フブキもまだ人間だったんだ)

と、のんきにも考えた。一瞬、意識が飛びそうになったが、遠くから 実際はそれほど離れていなかったが、ひなたにはとても遠くに思えた 自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、緩んだ力を元に戻す。「まだ、終われない……」

その手に力を込めなおし、決してフブキを逃がしはしない。それが最後の抵抗だった。フブキの顔が苦痛を物語り、ひなたはそれ以上の苦痛を浮かべる。

ひなたの耳に、フブキの耳に足音が聞こえた。

彼女にそれをさせたくなかった。

けれど、今回ばかりはたとえひなたが身体を張って止めに入ったとしても、彼女が止まることはなかっただろう。

彼女は、フブキの背中に短剣を突き刺した。

九章 『彼女は涙を、彼は血を流す(5)』

だいちが地面に倒れこんだみかげを冷静に立ち上がらせると、その頬を思い切り殴った。みかげは幾らか吹っ飛び、地面に倒れる。

「いてえ」

「外れたねじは戻ったか」

「うるせえ」

みかげは頬をさすりながら立ち上がると、そこにさくらの姿を見つけて不躰にも指をさした。そして、先ほどまでの狂った様子とは打って変わって、いつもの調子で言葉を発した。

「あら？ 手前は確か、ひなたの嫁だよな」

「だから、まだよ」

どこかで一度したような会話をし、さくらは呆れたように笑って腕を組んだ。

「どつちにしろ、あれだ。俺んところよりフブキのここに行ったほうがいいんじゃないか」

その指摘は、だいちに向けられたようでもあり、それでいてさくらに向けられたようでもあった。

「早く行け。多分だが、いや、俺もそういうのは考えたくないんだが……」

みかげにしては珍しく歯切れの悪い物言いだった。

「はつきり言いなさいよ。らしくないわね」

「相変わらず可愛くねえ女だな。あのバカは手前なんかのどこがいんだか」

「殴るわよ」

「まあ待て。いいか、つまりだな。俺が言いたいの、早く行かねえと手前の旦那が死んじまうってことだ」

それに最も早く反応し、青ざめたのはみなみだった。

「し、死なないもん！ ひな兄は……ひな兄は死なないもん！ 適

「当なこと言わないで!!」

「なあ、みなみ。俺は直にあの“化け物”の強さを知ってんだよ。これは冷静な分析の賜物だ」

みかげが言い、みなみは唇をかみ締めた。さくらは血の気のひいた顔をだいちに向ける。彼はその顔を見て、つぶやくように言った。  
「行くしかないでしょうね」

~~~~~

「手前は行かないのか」

2人が去ったというのに、その場を動かないみなみを見て、みかげは地面に寝転がった姿勢で訊ねた。

「うるさい」

「あ？」

みかげは首だけを起こして、みなみの様子を見る。ぺたりと座り込んだまま、涙を浮かべてこちらを睨みつけている。

「手前……。もしかして腰抜けてんのか」

「黙れ。それ以上しゃべると、斬る」

「はっ」

みかげは静かに目を閉じ、音を聞く。

みかげの耳を幾分か楽しませた風の音が、急にぴたりとやんだ。

見たくない光景が見えた。

血だらけの彼を見て、彼女は理性を失いかけた。

しかし、そうならなかったのは彼女を見たからだ。短剣を握り締め、2人のいる場所へ向かっている。

彼女は彼女が何をしようとしているのかを理解し、ここまで走ってきたことで既に限界に達していた足を叱責して速度を上げた。

フブキに向かっていくユキナの手を押さえつけたのは、さくらだった。

さくらは彼女の手からすばやく短剣を奪い去ると、ユキナがやるうとしたことを代わりに行う。

彼女は、それを行う前にユキナにウィンクをしてみせた。ユキナは何も言わずに泣きそうな顔でさくらを見つめていた。

そして、さくらは一步を踏み出す。

自分が守りたい人、愛する人のために、それを

瞬間、彼女の頭に目の前に映っているものとは違う光景が浮かびあがった。

幼い日の自分と、倒れていく男。

(ああ、そうだ。あたしは)
全てを思い出した彼女は、それでも躊躇いなくそれを突き出す。

彼女は、フブキの背中に短剣を突き刺した。

~~~~~

短剣がフブキの背中に刺さると同時にひなたの腕から力が抜け、さらにフブキの手からも力が抜け落ちた。彼の手から離れた剣は、ひなたの身体とともに地面に落ちる。血で濡れた地面は、べちゃ、という嫌な音を立てて、ひなたを受け止めた。

「この機を逃すと、降格どころではすまないな」

ひなたに駆け寄るさくらを置いて、だいちがフブキの前に立ちはだかった。ひなたに首を締められたせいで、肺の中の酸素が足りなくなつたのか、必死に呼吸をして酸素を確保しようとしているフブキの両膝に、だいちは迷いなく銃弾を打ち込む。背中と両膝から血を流してはいるものの、彼はまるで痛覚を失つたかのように怪我をした部分には目も向けない。見ると、ひなたに見せた苦痛の表情は既に消え去り、いつもの無表情に戻っていた。

痛覚がなかるうと、膝を撃たれて容易に立ち歩けるものではない。彼が本物の“化け物”であったならば事情は違つたかもしれないが、フブキが立ち上がることはなかった。

「良かった。君はまだ人間のようですね」

だいちが背後でへたり込んでいる少女のことを思い、心の底から安堵したように息をはいて、手錠を取り出した。

「黒月ことフブキ……確保」

冷たい音がした。フブキは手錠がはめられると案外あっさりといちに従った。暴れられるかと思っていただいちは、それにも安堵のため息をつくことになる。

後ろを振り返れば、不安そうな瞳を向けるユキナと睨みをきかせるハム吉がいて、だいちが苦笑交じりに口を開いた。

「ここは私を信じていたきたい。ひなたとともに例の病院へ向かうとしよう」

剣が刺さったままの姿で倒れ、大量の血を流して顔色を失っているひなた。

虫の息となったひなたを抱きしめ、嗚咽を漏らしながら動けなくなつたさくら。

隣で溢れ出る涙を拭おうともしないさくらにさえ一切の興味を示さない無表情のフブキ。

手錠をかけられ、背中には妹の短剣が刺さったフブキを見つめて涙をこらえるユキナ。

そんなユキナを慰めるでもなく、彼女の肩に立ち決して傍から離れるつもりのないハム吉。

偉そうに凄みをきかせるハム吉に、真面目な顔で「信じる」と言い切つただいち。

ひなたとフブキの元へ向かっただいちを追うことのできなかったみなみ。

未だに腰が抜けて動けないみなみを放っておいて、1人その場を立ち去るみかけ。

そして、彼は見る。

血だらけで倒れ、彼女に抱きかかえられているあの男の姿を。

「生きてんのか、あれ」

その言葉は誰にも届かず、消えていった。

そしてまた、彼も見る。

かつて相棒だった男が去って行く後ろ姿を。

その姿は他の誰にも悟られず、消えていった。

この日、1つの歴史が幕を閉じた。

史上最大の悪人として知られたフブキの身柄が確保されたのである。



## 余章『彼らの場合』

某日。彼が彼女と出会った日の話。

「聞きたいことがある」

男の凜とした声が響いた。

「なんだ？」

その声に気だるそうな声が答える。どうやら、この場には2人の男がいるらしかった。

「今日、1人の少女と出会った。“ひとりぼっち”になってしまった、と言っていた」

最初の男が言う。後半は怒りで声が震えていた。もう1人の男が、それに対して淡々とした口調で答える。

「それがどうした？」

「お前が、やったのか？」

問いただしているのは蒼い髪を持つ男で、訊ねられている紅髪の男は不機嫌そうに鼻を鳴らした。いつも苛立たしそうなのだが、今はより苛立っている風にみえた。それを示すかのように、煙草に火をつけようとして、何度か失敗する。

「証拠でもあんのかよ？」

「そんなものはない。だが、お前がここに帰ってきた日にちと、あの子がここに彷徨ってきた日にちとを考えて、お前がやったとしても充分可能な範囲だと判断したから、カマをかけてみた。……そして、お前の態度でだいたい分かった」

「あ？」

「また、どつかの町か村かを1つ消したな？」

紅髪はようやく火のついた煙草をふかすだけで、何も答えなかった。それは肯定の合図であり、蒼髪はいきなり彼の頬を殴りつけた。

「何すんだよ」

「黙れ」

「手前だって、散々」

続きはうめき声に変わった。もう1発。蒼髪が拳をねぐりこませたのだ。

「今更善人ぶつても、もう遅えんだよ」

紅髪が煙草を吹き捨て、それが蒼髪の頬をこがした。

「そんなことは」

「分かってねえ！」

夜の闇の中に2人の男の叫び声と肉体がぶつかり合う音が響いた。それは、彼らが倒れるまで続くことになる。

~~~~~

某日。彼女が彼らにすっかり馴染んだころの話。

「は？」

月明かりがわずかにしか入ってこず、お互いの顔すら見えない森の中、2つの影が対峙していた。

「俺は、もうすぐここを出て“やつ”を追っ」

1人が軽い口調で言った。もう1人は震える拳を握り締めながら答える。

「追ってどうする？」

「殺すに決まってるだろ？」

聞くまでもないだろう、という意味合いを暗に含んで、そう即答した声は感情のこもっていない声だった。

「そうか」

1人が言う。その声は幾分、諦めの思いが込められていた。

「あいつを殺さないと、俺はだめなんだよ」

「……」

「隙間を埋めるには、あいつを」

「分かった。もう、いい」

1人は刀を抜き、それを見たもう1人が拳銃を構えた。

「準備が整い次第、出る。止めたきゃ、命賭けな」

「ああ、そのつもりだ」

銃声が、闇夜に吸い込まれた。

~~~~~

それから、数日が過ぎた。

その間にさらに一悶着あったのだが、それはまた別の話とつながり、ここで語るのには適切ではない。いつかまた、語るときもくるだろう。

「……行っただか」

夜の闇の中、1人の男の声がある。

いつも“あの男”が寝泊りしているテントはそのまま残されていたが、その中は空だった。

いや、正確には1枚の紙だけが残されていた。男はそれを読んで、拳を握り締めた。手の中にあつた紙がくしゃと潰れる。

手前は手前で動けばいい。

俺は俺のやりたいようにやるだけだ。

“あいつ”の言葉を借りるなら、俺は俺の正義を忠実に実行する。いいか、ひなた。

手前と俺は違う。

俺は確実に狂っちまったんだと思う。

俺は手前が最も敏感な“ひとりぼっち”の人間だ。

だから、俺がやる。

手前は、そこで平和に呆けてる。

体の震えが止まらなかった。

もう誰も殺したくはなかった。傷つけたくもなかった。それが虫の良い話であることは知っていたし、それを言う資格が自分にはないこともよく知っている。

けれど

ひなたは自分を取り巻く人たちの顔を思い浮かべる。ここで黙ってみかけを放っておけば、それこそ大罪に当たると思えた。彼はやると言ったらやるやつだ。きつと、いつになるかは分からないが、確実に“あの男”を殺すだろう。

そうなったとき、果たして自分は今頭に浮かんだ人たちの前で、心から笑うことができるだろうか。

仇に同情のようなものを抱き始めた自分を自嘲的に笑うと、ひなたは決意を込めた眼差しを空に向けた。

ここから見る空は、今日で最後になりそうだ。

ひなたとみかげが、ひとりぼっちになった。

## 余章 『彼女らの場合』

彼女は家に帰りながら、このことをあの少女にどう伝えるかを考えていた。きつと、うまく伝えることができない。彼がなぜ出て行ったのか。彼がなぜ“自分”を置いていったのか。

正直、自分でも混乱しているのだから……。

結局答えは出ないまま、家の前につく。できることなら、あの子がまだ眠っていてくれればいい。そう思って彼女は扉に手をかけた。だが、彼女の期待はすぐに裏切られる。

少女は玄関に立っていた。台所からは、なぜかいい匂いがする。

「どこ行ってたの？」

その問いに彼女は押し黙る。

ひなたを見送りに。

とは言えない。しかし、適当な嘘も思いつかない。

「……さくら？」

何も答えない彼女、さくらを不審に思ったのか、少女が訊ねる。

「あの、それ……何？」

少女が指差したのは、家を飛び出したときからさくらが握ったままだった彼の書置きだった。

もう、だめね。

と、さくらは思った。これ以上、隠し通すことができないと悟ったのである。それに、いつまでも隠し続けることができるとも思えない。今、この子に伝えないと、もっと彼女を傷つけることになるかもしれない。

さくらは、じっと少女を見つめる。

「……さくら？」

「みなみちゃん」

抑揚のない声が出た。

「ひなたは、ね」

さくらは胸が痛むのを感じた。この先の言葉を紡ぐことが嫌で嫌で仕方がなかった。自分の言葉で、目の前にいる少女を悲しませてしまうことは明白だった。

「さつき、街を出て行ったわ」

それを聞いても、みなみの表情は変わらなかった。さくらが、もしかしたら自分の言ったことが聞こえなかったのではないか、と思うくらいに無反応だった。

「……な、ん……で？」

しかし、さくらの言葉はきちんと伝わっていた。みなみは口を開くと同時に、瞳に涙をためた。

「あの人は結局、どこまでも“ひとりぼっち”で、どこまでも“バカ”なのよ」

さくらは、これまでの経緯を淡々と説明した。

それはつまり、彼とみかげとの決別であったり、彼とフブキとの関係であったり、そこから繋がる彼が街を出た理由であった。

「ひなたもね、みかげと同じなのよ」

さくらはそう言葉を繋げ、自分の結論をみなみに告げた。

「昔空いた穴を埋めるには、フブキとの問題が解決しないとだめなの。どれだけ周りに彼を慕う人がいても、誰も近づけない場所を持つてる」

簡単に言えば、それが、ひなたがひとりぼっちだという理由だった。外面的には仲間がいるが、内面的にはひとりぼっち。それが、ずっとひなたを苦しめていた。

「でもね、ひなたがみかげとは違う点は、あの人がもう誰も殺したくないと思っっているくらいにバカなことね」

さくらは先刻別れたばかりの男の背中を思い浮かべ、ぐっと涙を堪えた。

「ひなたは、みかげもフブキも救いたいと思ってる。死んで欲しくないと思ってる、そして、それが甘いことであることも分かっている。でも、彼は止まれない。自分も含めて、3人が3人とも“ひとりぼっち”だから。ひなたはそこから彼らの手をとって這い出したいのよ。死んでしまったら、それでおしまいになっちゃうでしょ。それじゃ、だめなの。ひなたはみんながもう“ひとりぼっち”じゃないと思ってくれないと、だめなのよ。それが、彼の罪滅ぼしでもあるの」

「わかんない……」

と、突然、みなみの瞳から涙が溢れた。これまで我慢していたものが、一気に溢れ出したようだった。泣きじゃくるみなみを前にして、さくらは何も言うことができなくなった。

「わかんない、わかんない。私が聞きたいのは、そういうことじゃない」

みなみは涙を拭うこともせず、さくらに顔を向けることもせず、ただただ俯いたまま、口を開いた。

「わ、私が……私が弱いから……。ひ、ひな兄の足手まといになっちゃうから……」

だから、私は連れて行ってもらえない、と続くのだろう。

なるほど、とさくらは思った。みなみはさくらと同じように、彼と一緒に連れて行ってもらいたかったのである。さくらには、その



気持ち痛いほどよく分かった。分かったが、足でまとい、というのはきつと違う。

「違うって。ひなたはそんな」

「違うないもんっ！」

ひなたはそんな風には思っていない。彼は、みかげやフブキを追うことで、もしかすると死んでしまいかもしれないことを自覚しているから自分たちを置いていったのだ、とは言えなかった。

みなみが大声で叫んで、それを遮ったのだ。

「ひな兄が私を“ひとりぼっち”にするはずないもん！」

さくらは何も言い返せなかった。呆然としている彼女を尻目に、みなみは自分の部屋に駆け戻っていく。そして、なにやらどたばたと動き回っている音が聞こえた。

さくらは小さくため息をつく、居間に入った。彼女の言い分は分かる。誰も“ひとりぼっち”にしたくないことが、ひなたの正義であるのならば、みなみを置いていったという事実は明らかに矛盾だ。でも、それは多分、自分を信頼してくれているからだろう、とさくらは思った。

（みなみには、あたしがいる）

そう思いながら入った居間で、彼女は信じられない光景を目の当たりにした。

そこには、美味しそうな朝食が並んでいたのである。

さくらは自分の目を疑った。自分は今日、朝食を作った覚えは無

い。ということ、これは……。

そう思って台所を覗くと、失敗作の数々が並んでいた。みなみの苦勞がここに積み重なっていた。さくらの瞳に彼女が悪戦苦闘しながら料理を作る姿が浮かび上がってきた。そして、1つのことを決めた。

この朝食を食べずに出て行ったひなたを思いっきり殴ってやろうと。自分とみなみを泣かせた、あの男を力の限り殴ってやろうと。

しばらく台所で物思いにふけていたさくらだが、慌しい足音と扉の閉まる音が聞こえて我に返った。

彼女は慌てて玄関に向かうが、そこには1枚の手紙が置いてあるだけだった。

今まで、ありがとうございました。

私は、ひな兄を追います。

「また、手紙……か」

みなみを追う気にはならなかった。さくらは彼女に自分の気持ちを託そうと考えたのである。自分は家で待ち、みなみは旅路に行く。そうして2人でひなたを見張っていれば、彼が道を間違えることはないだろう。

さくらは急に広くなった家を見渡してから居間に戻る。並べられた3人分の朝食の1つを手を取った。

それは上出来とはいえないが、間違いなく美味しかった。

さくらとみなみが“ひとりぼっち”になった。

十章 『そして、彼らは微笑む(1)』

事態が一応の終焉を見せるのに、それから丸々1年ほどの月日を要することになった。

さて、時はまず例の事件から数カ月後の話になる。

まだ動き回ることはできないが、順調に傷の回復をみせるひなたはベッドに寝転がったまま、じっと目をつむっていた。

まるで周りのことなど全く気にしていないかのように。

「あんだ、不器用ね」

「うるさい。食べられればいいの」

「食べるどこないじゃない」

「ある」

「ない」

「ある」

「ない」

ひなたのベッドの横に椅子を並べて、りんごの皮をむいているのはユキナとみなみであった。お互いにお互いの批判することができないくらい、両者の手にあるりんごの形はあまりにも歪であった。

その光景を呆れ気味に見つめながら微笑むさくらは花瓶に花を飾りながら、皆が死なずにすんだことに心から感謝する。

「ない」

「ある」

「ない」

「ある」

「うっせえんだよ！ お前らのりんごなんて、どっちも食えるかつ

！  
不毛なやり取りに痺れを切らしたのか、ハム吉は思わず大声を上げた。ユキナとみなみが示し合わせたかのようににやっと笑い、同時にハム吉に視線を向けた。

この瞬間、ハム吉は人生最大の殺気を感じ、すばやくひなたの布団にもぐりこんだ。

ひなたは布団の下で器用に指を動かしてハム吉の鼻をつまむと、非難の意を示した。ハム吉も反省しているらしく「悪い」と小さく言った。

「それより、あんた、ここにいてもいいの？」

「え？」

「お兄さんよ」

「ん……」

フブキは怪我が治り次第、とある特別な監獄に入れられたらしい。当初はいろいろと問題もあったようだが、だいちが総裁を半ば脅すように納得させ、それを了承させた。

政府側でフブキを勝手に処分せず、彼を元に戻す薬を必ず作るというのがだいちの強い言い分であり、もちろん政府の大部分はそんなものに聞く耳を持たず即刻処刑にすべしと主張したのだが、クーデターものの「だいちによる総裁人質大作戦（ユキナ命名）」により、ごり押しの形でつっきったのだ。

「もう少し、待ってね」

口を開いたのはさくらだった。政府側が抹消していてもおかしくなかったはずのフブキに投与した薬の成分表であるが、実に運の良いことに倉庫の山に埋もれて存在していたのである。

……と、さくらやユキナといったひなた側の人間は思っていた。

が、実際は別に運が良いわけではなく、政府側はその薬に関する書類は厳重な警備のときちゃんと保管していたのだ。無論、当初の

目的である心を失わせる薬を調合するために、その過程のデータを保有しておくべきだ、というのが大きな理由ではあったが、仮にフブキが戻ってきたときに、いわゆる“解毒剤”を作るために必要だろうと、例の成分表だけきちんと保管所にしまった人物がいたのだ。彼もまたフブキ脱走に巻き込まれたのは確かであるはずなのに、そのようなことを考えていてくれたことにだいちが喜び、政府のお偉方は苦悩した。せつかくフブキを処分できたというのに、元に戻す薬ができる可能性があれば、それが漏れたときに責任を取らされるのは自分たちだ。実際、その点を強くついて、だいちが強行突破したといっても過言ではない。

さて、そのような事実があったにも関わらず、だいちが成分表が手に入った流れについて、ひなたたちには、たまたま見つけたので盗むようにして持ち出したと説明した。そこには彼なりの思惑があった。鍵となるのは、成分表を保管した男のことだ。その男、ひなたたちのよく知る人物であったのである。

だいちも詳しくは知らなかった。彼のことを調べる上で、名前と顔は確認した。その保管者の名前を見た瞬間に、どこか頭の隅にあった記憶が呼び起こされたのだ。

成分表を保管した研究者は、みかげの父親であった。

フブキ脱走の際に、何とか生き残ったみかげの父はいそいで故郷へ戻った。そして、住民に逃げるように伝えるためにそこにたどり着いた日と同日、フブキの襲来にあった。まるで、自分が殺し損ねた男をきつちりと始末するかのように、ぴつたりのタイミングで全てを壊しにやってきたのだ。

それを考えると、フブキ自身も薬でおかしくなっているとはいえず、政府に強い恨みを持っていたのかもしれない。その事件（すなわち、

ひなたとみかげの故郷へのフブキ襲来事件）により、当時薬開発に携わっていた研究者は全てこの世を去ったことになり、政府の薬開発は足踏み状態になった。

みかげの父が薬開発に携わっていたことに関しては、ユキナたちにはともかく、ひなたやさくらにはあまり言いたくない、と思っただちは、それについて言及することをやめたのだ。

その判断が正しかったのか間違っていたのかは、まだ分からない。

十章 『そして、彼らは微笑む(2)』

ひなたの元に彼がやってきたのは、またそれから幾月か過ぎた日の夜中のことだった。

窓から入り込んできた侵入者は、開口一番こう言った。

「そろそろお前が“ひとりぼっち”じゃなくなっても良いんじゃないかねえか」

その言葉に、ひなたはゆっくりと身体を起こす。闇にまぎれて侵入者の顔はよく見えなかったが、その声を忘れるはずはない。

「お前はどうかんだよ？」

だから、ひなたは逆にそう訊ねたのだ。彼はひなたがどうしても“ひとりぼっち”にしたくない人物のうちの1人だ。

「俺は、無理だ」

「なんでだよ？」

多少苛立ちを含んだひなたに対して、彼はやや投げやりな口調で答える。

「俺は陰で、お前は陽だからだ。お前は誰から見ても幸せなやつにならなくちゃいけない。俺と違って、な」

「何をわけのわからないことを」

「俺は、良い。良いんだ。世界中の誰1人として俺を幸せな野郎だと思わなくても良い」

「……カゲ」

みかげは憂いの表情を一瞬だけ浮かべ、それから薄く微笑んだ。

「そう思われたいだなんて、願うなんてあつかましいにも程があるだろ。俺はまともな人生なんて送ってきていないんだよ。迷惑をかけすぎた。だから」

「僕がいるよ」

「あ？」



ひなたはみかげの語りを止め、静かに笑う。

「お前だって、“ひとりぼっち”じゃない。お前には僕がいる」

「くさすぎて吐きそう」

「うるさいよ」

「……なあ、ひなた」

「ん？」

しばらくの間があった。窓から夜風が吹き込んでくる。寒くはなかった。むしろ、心地よい風だった。

それがやむのを待っていたかのように、みかげが口を開く。ひなたが聞いたことのないくらい弱々しい声が彼の口から発せられた。

「俺、最低だよ」

ひなたは首肯し、

「僕もだ」

と答える。みかげはそれを聞いて笑いを含む。

「そうか」

「ああ。だから、ここから這い上がる。悪行は消せないけど、善行は積み重ねられる」

「俺にはそういうの興味ねえなあ……」

「別に良いんじゃないか」

「あ？」

「僕とお前は、あの日違う道を選んだんだ。たとえ、お前が悪党だろつと関係ない。僕にとって、カゲ。お前はかけがえない友人だ」

みかげは、けっ、と吐き捨てるように言ってから、大仰に首を振った。

「よくそんな恥ずかしいことが、さらつと言えるもんだ」

「いいんだよ。こつこつ鳥肌立ちそうな言葉を吐くつても、時に

は大事だつてことを学んだんだよ。……隙間を埋めるには、な」  
みかげは遠い目をするひなたに視線を向け、すぐにそらした。  
「そんなもんか」  
「ああ」

~~~~~

「んじゃ、ま、そろそろ行くよ」

「そうか」

「ああ」

みかげが窓枠に足をかけ、まさに飛び出そうとした時だった。

「帰る気は、無いのか？」

ひなたがその背に言葉を投げかけた。みかげは振り返らずに答える。

「ねえ。居場所が、ねえ」

「それでもないよ」

「いや。ねえよ、もう。あそこには」

みかげは少しだけ振り向き、ひなたに向かって口を開く。

「俺はもう戻れねえ。そうしちやいけねえ理由がある」

「……お前のやってきたことを考えると、どうしようもない、ってことか？」

みかげは、まあそれもあるけどな、とはつきりしない態度でぼやき、ため息をついた。

「どうせお尋ね者だ、俺は。あいつらに迷惑はかけらんねえ。フブ

キが捕まった今、やりたいこともねえし……いろいろ考えるさ」

「そうか。まあ、僕もお尋ね者に変わりはないけどな」

「手前は大丈夫だろ。この件で司法取引だなんだがあるんじゃないかねえのか？」

「ああ、なるほど」

ひなたは、その可能性に今ようやく気づいたかのように、あっけらかんと言い、みかげの苦笑を誘った。

「ま、どっちみち、手前に悪人は向いてねえよ」

「そうかもな」

みかげは言いながら窓枠に両足を乗せた。もう振り返らない。

「全部終わったら」

振り返らずに、別れの言葉を綴る。

「ん？」

「いや、きつと終わることなんてないんだろうけど、な。もし、俺のやるべきことが全部終わったら、そのときは」

「ああ、帰ってくれば良い。あそこは、お前が作った町だ」

みかげの小さな笑い声が漏れた。

「……じゃあ、いつてくる」

「いつてこい」

彼の姿はすぐに闇夜にまぎれた。飛び降りた瞬間、みかげが会心の笑みを浮かべたことを誰も知らない。

そんなみかげを見送った後、ひなたもまた会心の笑みを浮べる。これもまた、誰にも知られることなく彼の顔から消えていった。

彼らは、新しい一歩を踏み出した。
。

エピソード『日向に降る雪』

そして、最終局面を迎える1年後の話によろやく移るとしよう。

事態を転がせたのは、やはり彼だった。

彼の一言によって、全てが収束されていくことになる。

~~~~~

「あなたは、お兄様と一緒にいるべきです」

さくらたちを外に出し、ユキナと2人きりの空間を作ってもらったひなたは、彼女を前にベッドに座り込んでいる。お腹部分に包帯をぐるぐる巻きにしながらも、なんとか歩けるようになるまで回復した彼はユキナの頭をなでながらそう言った。

彼女は初め、何を言われているのか分からないといった顔をしていたが、彼の顔に本気の思いを読み取り、迷うように視線を動かした。

「……えっと」

「家族は大切にしなければなりません」

ひなたの言うことは分かる。分かるが、ユキナはどうしても目の前にいる男と別れることなどできそうになかった。自然と涙が零れる。

「でも」

「僕では、フブキの代わりは務まりません」

そう言つて、ひなたは棚の上に手を伸ばした。そこには小瓶に入つた薬があり、彼はそれを手に取るとユキナに渡そうとする。

「これは、さくらが作ってくれた“解毒剤”です。きっと効くと思いますから、それをフブキに飲ませて、2人で一緒にくら

「……だ」

ユキナはそれを受け取らず、弱々しく首を振つた。

「……やだ」

ひなたは彼女の手をとると、無理やりにそれを握らせる。ユキナはふるふる震えながら、

「嫌だっ！」

と叫んだ。

「……ユキナさん」

「ひなたと一緒にじゃなきゃ嫌だ！」

まるで子どものわがままのようだった。泣きじゃくるユキナを見て、ひなたは、こみ上げる得体の知れないものを押し殺し、ふう、とため息をついた。

「あなたには幸せになつてもらいたいです」

「だつたら……！」

「あなたを幸せにする人物は僕ではありません」

彼は喉元まで押し寄せたそれを無理やりに飲み込み、毅然とした言葉で言い放つ。

「これで永遠の別れ、というわけではありません。僕はアンフォー  
ルにいます。大丈夫。また会えます」

ユキナは拳を握り締め、これ以上なくまいと歯をかみ締めた。

「……だからね」

ユキナは俯きながら小さな声でなにかを言った。

「何ですか？」

「……約束だからね！！ 絶対、会いに行く。会いに行くから！  
だから、待っててよ！」

そう言つて、顔を上げるユキナ。彼はその顔に向かって笑顔を見た。

「はい、約束です」

ユキナはひなたの笑顔を目にしっかりと焼き付けてから彼に背を向けた。両手で大切そうに小瓶を持ち、部屋から出ようとす。

そうして一歩、外に踏み出したときだった。

「あ、待ってください、ユキナさん」

彼女は足を止め、しかし振り向くことはない。

「忘れ物です」

ひなたが彼女に歩み寄り、手渡したのは例の短剣だった。ユキナは思わず振り返り、それを彼の手から受け取る。そこには、いつもと同じ笑顔のひなたがおり、一方のユキナの顔は涙でぐしゃぐしゃに濡れていた。

「元気だな、ユキナ」

ひなたは砕けた口調でそう言つて彼女の頭をぼんと叩いて背を向けた。ユキナは驚いたように一瞬だけ動きを止めたが、またすぐに彼に背中を向ける。

お互いに背中合わせの状態で彼女は口を開いた。

「……うん。またね、ひなた」

ユキナは、もう振りかえらなかつた。

~~~~~

「良かったの？」

ユキナが出て行ったのを見届けてからさくらとみなみが部屋に戻ってきた。

「まあね。うちのお姫様には、似合いの王子様がいるってことだ」

ひなたはおどけたようにそう言うのと、ベッドに寝転がって目を閉じた。普段の彼に似合わず、そのようなおどけた口調でものを言ったのには理由がある。そうでもしないと、だめだったのだ。今にもその目から涙が零れそうで、だめだったのだ。さらに、その目が潤んでいたことを誰にも気づかせないように急いで目を閉じるほどの徹底振りで、彼は自分の中にその感情を閉じ込めた。

「……それよりも」

そう言つて、目を閉じたまま口を開くひなた。

「何で、ここにいるんだ？ ハム吉」

ひなたの頬の傍、枕の横にハム吉が座っていた。ひなたは自分に襲い掛かっていた悲しみとも寂しさとも言いがたい、得体の知れないものが完全に去つたのを感じて、片目を開けた。

「あの女についていかなくていいの？」

みなみがハム吉の頭をなでながら言う。その言葉にはとげがあつたが、当初に比べて随分と柔らかくなつたようだ。

「ああ。ユキナの幸せそうな顔はしっかりと拝見したからな」

ふん、とひなたが興味なさそうに目を閉じる。

「だから、今度はな」

「お前が幸せになるところを見届けないとな」

ハム吉の一言に、にやりと笑うひなた。彼の言いたいことが理解できたのか、ひなたは身体を起こすと、お目当ての人物に視線を動かした。

「はいはい、分かったよ」

そう言っただけはゆっくりと右手を動かして、さくらの手を握った。「へ？」

あまりに突然のことで、戸惑ったように彼の目を見つめ返すさくら。

「一緒に帰ろう、さくら」

ひなたは、さくらの方に顔を向けて柔らかい笑みを作った。

「え？ それは、もちろん、そのつもり、だ、けど……」

隠しきれない動揺が零れだすさくらを前にして、ひなたは首を横に振ると、こほん、と咳払いをした。その顔が、薄く染まっていく。

「あなたと一緒に暮らしたい、という意味です」

ひなたは照れを振り払って、さらっとわざと素っ気なく言う。

「これからもずっと、僕のそばにいて欲しい」

「……あ、えーっと、あ、あの……え？ え？ ええ！？」
ひなたの言葉の意味するところに気づいて、さくらの顔はこれでもかというくらい赤くなった。

「ご、ごごご、こちらこそ、お、お願い、します……」

頭から湯気が出そうなほどに赤くなったさくらの口からそれを聞いたひなたの顔は幸福に満ち溢れた顔になった。

「よっしゃー！！」

ハム吉が叫びながら手をたたく。

「あつ、でも……ですね」

既に宴会気分のハム吉を制するように、ひなたが付け足す。そして、もう1人、この病室にいる人物に目を向けた。

「2人きりというわけにはいきません」

さくらはちよっぴり残念そうな顔をしたが、予想はしていたのかひなたの大切な人のほうに目を向けた。

「みなみも一緒に。な？」

ひなたの言葉に、みなみは笑顔で涙を流しながら彼に飛びついた。

「ちよー！！ ちよっと待った！！ き、傷が！！！！」

「ひな兄い！！ ありがと！！ ずっと一緒だね！！！！」

ひなたの言葉など耳に入っていないようで、ぎゅーっと彼を抱きしめるみなみ。

「わ、わかったから……み、みなみ。痛い」

ひなたは必死に抵抗するが、怪我で体が思うように動かない。それに痛いのは痛いのだが、それでもひなたは笑顔だった。

そして、そんな彼を見ながら彼女は想う。

自分が記憶を取り戻したことは、まだ彼には言わないでおこう、と。

たとえば自分が父親を刺して逃げ出した、という事実を知っても、彼は変わらず接してくれるだろう。

問題はそこじゃないのだ。

問題なのは自分が記憶を取り戻したことを聞いて、彼に“本当の名前”を聞かれたときだ。

それは、とても困る。

あたしは、さくらでいたい。

彼がくれた名前だから。

彼女はひとつの秘密を抱え、彼にそっと近づき、みなみを彼から引き剥がすと

その唇に、自分のそれを押し当てた。

乱暴で、それでいて優しく。

満ち溢れる幸福の中で、彼女は思う。

それに

あたしが“彼と同じ名前”だとお互いに呼ぶときに困るものね。

1つに重なった2人のそれは、やがてゆっくりと離れていく。

あたしは、さくらとして、ひなたと一緒にいたいもの。

目を見開いて口をぱくぱくと動かすひなたを悪戯っぽい笑みで見つめて、さくらは自分の想いをそう完結させた。

さくらはひなたの頬に触れ、柔らかく微笑んだ。

つられてひなたも微笑もうとしたが、嫉妬の瞳をみなみに向けられ、どきまぎとした不器用な笑顔にしかならなかった。

ハム吉の口笛が響き、再び部屋中に笑顔が広がる。部屋の中の全ての存在が笑顔になり、誰一人として嬉しさを隠そうともしない。

彼は今、ようやくひとりぼっちの闇を抜け出た。

~~~~~

「ほらみる。やっぱり俺の居場所なんてねえよ。惚气られる身にもなれってんだ」

ぼつりとつぶやいた“カゲ”は、足早にその場を去った。

「幸せに、な。……ひなた」

~~~~~

病院内廊下。

ひなたの病室を出てフブキのいる監獄に向かう途中、ユキナはあの男に呼び止められた。

「それ、だけどな」

声のする方を見ると、そこにはだいちが立っていた。

「ん？」

「その短剣」

ユキナは手にしていた短剣とだいちの顔を見比べた。

「それ、もともとは私がひなたにもらったものなんだ。政府への入

隊記念に、新たな旅立ちへの贈り物としてな」

「え？ でも、これ私が……」

「拾っただろ。あの場所で」

「だいちはにっと笑い、言いたいことは全て言い切ったとでもいう風にユキナの視界から通り過ぎてゆく。」

「それは、もう君のものだ」

その背中を見つめながら、ユキナは彼の言いたかったことはなんなのかを考え、声を上げた。

「ど、どういうこと!？」

彼女に上手く伝わっていなかったことで、ずるっとこけかけただいちは、呆れ顔で振り返った。

「ここは格好良く立ち去るところだろう」

「だって……」

「いいか。それは君が手に入れたとき、実際は私の所有物だった。」

しかし、もともとはひなたのものだった。つまり、それは私を介してはいるが、ひなたから君への“新たな旅立ちへの贈り物”ととらえても良いんじゃないか、ってことだ」

「ええ……?」

ユキナは納得いかない風にだいちを見つめるが、彼は肩をすくめると再び彼女に背を向けた。

「自分にとって都合の良い解釈が善い結果になることも、ままある。そう思うことで、君が少しでも救われれば、と思ったただけだ。気にするな」

ひらひらと手を振りながらだいちは去っていく。

「しばらくはみかげを追うことにする。ひなたは……君に黙って捕らえることはしない」

最後に告げられた言葉を聞いて、ユキナは深々と頭を下げた。

「ありがとう！」

その言葉を最後にユキナは駆け出した。短剣と小瓶をそれぞれ片手に持って。2人の大事な人のことを考えながら、ユキナは走る。

彼の元から彼の元へ。

~~~~~

窓の外では、もうそんな季節になったのかぱらぱらと雪がちらついていた。

風に誘われて、雪がふわりと揺れる。

太陽の日差しが、地面に陽だまりを作る。

いくつかの日向が微笑みを浮かべて、舞い落ちる雪を見上げている。

雪が、日向に、降る。

その光景は、彼を、彼女を、あたたかくさせる。

もう、誰も“ひとりぼっち”じゃない。

F・i・n



## エピソード『日向に降る雪』（後書き）

約2ヶ月に渡り、ようやく完結を迎えました。

思ったよりも長くなってしまったというのが本音です。

草稿時点では、word換算で150ページくらいだったんですが、書き足し書き足しで、結局180ページを超えることになりました。（別のテキストに走り書きしたのを含めると、きつと200ページを優に越えます）

前半（みかげ編）と後半（フブキ編）で区切って、2巻構成の長編小説として投稿すれば良いかなとも思ったんですが、余章の件もあるし、最後までつっぱした方が良かったろう、ということでも1つにまとめることにしました。

さて、ちょこつと読み返してみましたが、どうも投げっぱなしの伏線がちらほらありそうな気がしないでもないです。回収しきれない、かな……。

ですが、一応これで完結です。

拙い上に、長い作品でしたが、ここまでお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

もしかすると、番外編「日向の降る雪」を短編で書くかもしれませんで、

そのときは、またよろしくお願いいたします。

最後にもう一度、皆さま本当にありがとうございました。(彩月空)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6553f/>

---

日向に降る雪

2010年10月8日14時35分発行